

南部I遺跡は北を上吉川I遺跡、南を八尾町の翠尾I遺跡に接する集落遺跡である。弥生終末期～古墳時代前期と古代の堅穴住居等が検出されており、古墳時代の墓域としては1.8km西の富崎千里古墳群が考えられている⁽⁴⁴⁾。報文中、古代集落の変遷が示されている。古代の集落は6世紀末に遺跡南部で成立し、8世紀中葉には遺跡中央部から北部に居住域を広げ大規模化するが、9世紀中葉には北部と南部に分かれ10世紀初頭まで存続するとされる。墨書き土器の出土等から領主階層の居住する拠点集落としての可能性が考えられている⁽⁴⁵⁾。

またこの他に、富崎南野遺跡、千里B・C・D・E遺跡から古代の遺物が出土している。

(3) 地域C

呉羽・射水（羽根山）丘陵東麓から山田川流域にかけて広がる地域で、山田川水系に属する。井田川と山田川が合流する長沢地区は古くから交通の要衝として栄えた地域とされる。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて、鍛冶町遺跡、千坊山遺跡が、また古墳時代後期には下邑東遺跡が丘陵縁辺部から河岸段丘上に範囲に形成される。丘陵上には王塚古墳・勅使塚古墳をは



図3 嬢負地域の遺跡分布図 (1:60,000)

- 1 中名I 2 中名B 3 中名V 4 中名VI 5 板倉II 6 砂子田I 7 袋 8 鶴舎I 9 翠尾I 10 南部I 11 上吉川I 12 千里B
13 千里C 14 千里D 15 千里E 16 富崎千里古墳群 17 豊崎 18 富崎南野 19 富崎塙墓群 20 鹿山岳 21 富崎赤坂 22 鍛治町 23 鏡坂塙墓群
24 下邑東 25 千坊山 26 滝ノ山古墳 27 下邑 28 六治古塚 29 句野原 30 各瀬寺前 31 新町塙穴墓 32 勅使塚古墳 33 五ツ塙古墳群
34 王塚古墳 35 新町II 36 新町III 37 新町I 38 二木塙II 39 二木塙III 40 小長沢古墳群 41 小長沢II 42 小長沢I 43 新町 44 緑野III
45 緑野I 46 铃谷A 47 铃谷古墳群 48 友坂金城坊 49 友坂天神 50 友坂

じめ多数の墳丘墓や古墳が築かれ、県内の古墳密集地のひとつとなっている。

銀治町遺跡は弥生時代後期後半（法仏式期）に山田川左岸の河岸段丘上に形成される集落遺跡である。平成11～13年に実施した調査において、弥生時代後期後半（法仏式期）～古墳時代前期前半（高富式期）の遺構と遺物が確認されている。集落の最盛期は弥生時代終末期（月影式期）～古墳時代初頭（白江式期）にあったと考えられ、竪穴住居3棟等が検出されている。墓域としては200～300m西に離れた山田川河岸段丘南縁辺部に位置する鏡坂塙墓群（1・2号墓、四隅突出型墳丘墓）が想定されている⁽⁴⁾。古代の遺構としては7世紀中頃のカマドをもつ竪穴住居が検出されているほか、奈良・平安時代を通じて一定の遺物出土量があり、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が確認されている⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

古代には、比叡山各願寺や延喜式内社に比定される友坂熊野神社⁽⁶⁾が建立されており、この地域を中心とする大きな勢力の存在が考えられる。

比叡山各願寺は大宝元年（701年）に天武天皇の第7皇子一品親王（仮性聖人）が創立したとされる寺院で、羽根山丘陵の東麓に位置する。この南方から東方にかけて各願寺前遺跡が広がる。また各願寺西側の丘陵裾を通る県道八尾・小杉線沿いに、小長沢Ⅰ・Ⅱ、二本榎Ⅱ・Ⅲ、新町Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、千坊山、銀治町遺跡等多くの集落遺跡が形成される。

新町Ⅱ遺跡では昭和59・60年の調査で建て替えを含む3棟の掘立柱建物、溝、土坑が確認されており⁽⁶⁾、掘立柱建物の規模等から土地開発の拠点的集落であった可能性が高いとされる⁽³⁾⁽⁶⁾。

友坂熊野神社の東700m、呉羽丘陵の東裾には友坂遺跡が位置する。昭和56年から継続的に調査が

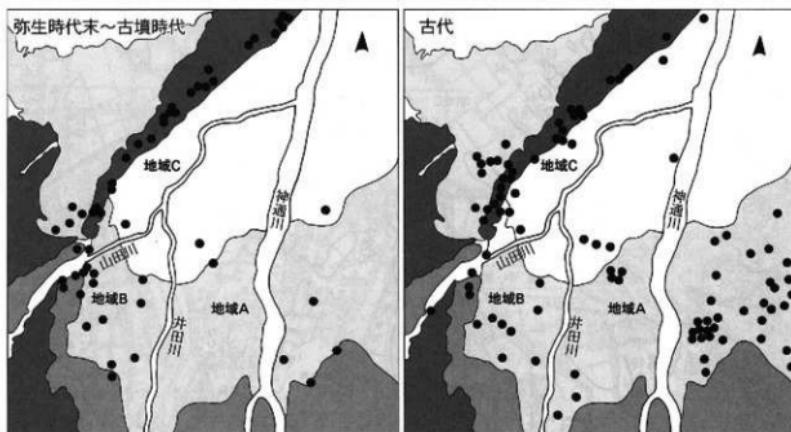


図4 婦負地域の遺跡分布状況 (1:150,000)

□ 沼澤原 □ 島状地 □ 台地 □ 丘陵地

700 800 900 年

地域A	鷺坂I 砂子田I 中名遺跡群			
地域B	南部I 上吉川I 翠尾I 銀治町 新町II 新開 友坂			
地域C				

表 婦負地域の古代遺跡存続期間

実施されており、古代集落と中世城館が確認されている。古代の遺構としては8世紀後半～9世紀初頭の土器を伴う竪穴住居等が検出されている。また管状土錐が多く出土しており、「延喜式」に越中の貢獻品として鮭やその加工品が挙げられていることから、古代集落が鮭漁を生活基盤におく性格をもっていたと考えられている^(註1)。友坂遺跡の北には旧河道を挟んで友坂天神遺跡・友坂金城坊遺跡が位置しており、付近一帯には古代の大集落が形成されていたと考えられている^(註2)。

（4）小結

地域B・Cの丘陵部には、弥生時代終末期以降、数多くの墳丘墓や古墳等が築造され、東裾の平野には基盤集落が形成された。古代にはこれらの地域に加えて扇状地上にも遺跡が形成されるようになり、遺跡の立地に変化が生じる。地域Aの神通川左岸扇状地上に墾田開発集落が出現するのは右岸より早い7世紀段階であり、地域B・Cに勢力を持つ集団が開発に携わった可能性が考えられる。

4.まとめ

婦負地域において、弥生・古墳時代の集落が立地する地形は河岸段丘や丘陵を後背地におく平野であった。古代にはこれらの地域に加えて扇状地上にも集落が形成されるようになり、遺跡の立地に変化が生じる。この変化については多くの先学諸氏が指摘されるところであり、墾田の新規開発事業に伴い既存耕作地の外縁に新規可耕地を求める動きとして理解されている^(註3)。

富山県におけるこうした動向は、神通川と常願寺川の扇状地上にあらわれる^(註4)。神通川右岸では8世紀以降の新規遺跡形成が著しいが、婦負地域を中心とする神通川左岸においてはこれに先行し、7世紀前半には扇央部における遺跡形成が認められる。即ち地域B・Cを中心拠点とし、西から東へ向かう新規可耕地を求める動きとして捉えることができる。

中名遺跡群で調査した7・8世紀の竪穴建物は、床面積が10m²以下のもので占められ、神通川右岸における古代集落の研究成果^(註5)で示される小規模建物であるという評価ができる。つまり短期居住を目的とする簡素な上屋構造をもつ建物で、おそらく墾田開発に直接携わった人々の住居であると考えられる。そして地域Aにおける墾田開発を主導したのは、地域B・Cに古墳時代以来集落を形成してきた集団であると考えられる。

7・8世紀は越中においても律令体制への変換がはかられた時期である。律令体制の整備に伴い、射水郡をはじめとする県内各郡において一郡一窯体制が達成されるが、婦負郡のみ体制への変換は鈍かったと評価されている^(註6)。宇野隆夫氏は、古墳時代に窯業の伝統や政治的力が相対的に弱かった地域・窯群ほど郡を単位とする窯業生産体制が整備されていることから、地域の歴史的条件の違いが一郡一窯体制の完成度の違いを生じさせるという考えを提示している^(註7)。ここからも地域B・Cを基盤とする集団の持つ政治的勢力の強さが想定でき、興味深い。

以上、婦負地域を中心に検討したが、扇状地上の調査事例が少なく、考察に多くの不備を残す結果となつた。今後の詳細な調査報告が待たれるとともに、多くのご指摘、ご叱正をいただければ幸いである。

註

註1 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2003『中名I・V遺跡発掘調査報告－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告II－』

註2 青山晃2003「第V章 結語」『中名I・V遺跡発掘調査報告－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告II－』財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所

註3 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2001『砂子田I遺跡』『埋蔵文化財調査概要－平成12年度－』

註4 姫中町教育委員会2002『富山県姫中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』

- 註5 姉中町教育委員会2000『南部I遺跡発掘調査報告II』、姉中町教育委員会2003『南部I遺跡発掘調査報告III』
- 註6 注4文献に同じ。
- 註7 姉中町教育委員会2003『富山県姉中町銀治原遺跡発掘調査報告』
- 註8 白川裕美1986『第二章 第三節 二 銀坂神社と姉中』『姉中町史（通史編）』姉中町・姉中町史編纂委員会
- 註9 姉中町教育委員会1985『富山県姉中町新聞遺跡・新町I遺跡・発掘調査概報』
- 註10 岸本雅敏1986『新町II遺跡の古代柱立柱建物群の性格』『新町II遺跡の調査－富山県姉中町新町所在の古代・中世遺跡調査報告一』姉中町教育委員会
- 註11 姉中町教育委員会1994『富山県姉中町友坂遺跡発掘調査報告II』
- 註12 姉中町教育委員会1997『富山県姉中町友坂遺跡発掘調査報告III』
- 註13 森隆2000『任海遺跡群の古代建物群構成（3）－個別事象の検討－』『富山考古学研究』第3号 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 註14 武田健次郎1998『富山平野における遺跡群の展開』『富山考古学研究』創刊号 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 註15 注13文献に同じ。
- 註16 宇野隆夫1994『窯業と社会－シンボジウム講演記録－』『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
- 註17 宇野隆夫1991『一郡一窯体制について』『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会

参考文献

- 宇野隆夫1991『律令社会の考古学的研究－北陸を舞台として－』
- 宇野隆夫1994『越中頃負郡の古代窯業生産－8世紀中頃の盛期をめぐって－』『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
- 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2000「中名V・VI遺跡」『埋蔵文化財調査概要－平成11年度－』
- 高橋浩二1995『越中ににおける古墳出石期の様相－陪塚・古墳と集落の検討から－』『大境』第17号 富山考古学会
- 武田健次郎1998『富山平野における遺跡群の展開』『富山考古学研究』創刊号 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 武田健次郎2003『共食いの富山平野における層状地立地型集落の様相－7世紀～10世紀を中心として－』『富山考古学研究』第6号 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 富山市教育委員会1975『富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会1984『富山市羽山丘陵古墳分布調査報告書』
- 姉中町史編纂委員会1986『姉中町史 通史編』
- 姉中町教育委員会1984『富山県姉中町友坂遺跡調査報告書』
- 姉中町教育委員会1986『新町II遺跡の調査－富山県姉中町新町所在の古代・中世遺跡調査報告－』
- 姉中町教育委員会1986『富山県姉中町宮崎・千里地区埋蔵文化財子備調査概要』
- 姉中町教育委員会1988『富山県姉中町宮崎地区埋蔵文化財子備調査概要II 富崎野畠遺跡 富崎南野遺跡』
- 姉中町教育委員会1994『富山県姉中町各郷寺前遺跡発掘調査報告』
- 姉中町教育委員会1995『千坊山遺跡（1）』
- 姉中町教育委員会1996『千坊山遺跡（2）』
- 姉中町教育委員会1997『富山県姉中町小長沢I遺跡発掘調査報告』
- 姉中町教育委員会1998『千坊山遺跡（3）』
- 姉中町教育委員会1998『南部I遺跡発掘調査報告』
- 姉中町教育委員会1999『県営公害防除特別土地改良事業に係る埋蔵文化財伝蔵地式採削調査報告書』
- 姉中町教育委員会2000『県営担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財伝蔵地式採削調査報告－姉中南部地区・千里地区－』
- 姉中町教育委員会2004『富山県姉中町砂子田I遺跡発掘調査報告』
- 姉中町教育委員会2004『富山県姉中町各郷寺前遺跡発掘調査報告II』
- 森隆1997『越中の古代柱立柱建物群に関する考察』『埋蔵文化財調査概要－平成8年度－』財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 森隆1998『越中の古代居宅建物に関する考察』『大境』第19号 富山考古学会
- 八尾町教育委員会1997『笠尾I遺跡発掘調査報告書I』
- 八尾町教育委員会1997『笠尾I遺跡発掘調査報告書II』
- 八尾町教育委員会1997『薄尾遺跡、翠尾I遺跡、妙川寺遺跡試掘調査報告』

2. 中名VI遺跡A地区の河川構築物について

武田健次郎

1. はじめに

富山県は耕地の中に占める水田の割合が日本一高く、急勾配で流速の早い河川が多いことから、水害が多発した地域であり、治水に関しては特に関心の高い地域であったことが予想される。現に富山城下を常願寺川の氾濫から守るために築造されたとされる佐々堤や、庄川扇状地を流れる諸分流を集めて流路を固定するために設けられた庄川町の堤防松川除などが中世末や近世に造営されたことが伝えられている。当遺跡からも治水・利水に關係すると考えられる河川構築物が、河川（SD02）の近接地で確認された。この河川構築物は、横板と杭からなるしがらみ状の遺構が盛土の上に配され、盛土法面に粗朶や樹皮などを利用した護岸施設を伴う一連の構造物（SX01）である。その遺構の立地や構造から治水・利水関連施設と考えられ、ここではこの構造物について考察を行いたい。

2. 遺跡の概要

中名V・VI遺跡は富山平野の中央を流れる神通川によって形成された扇状地の扇端部に位置する。富山県婦中町中名に位置し、付近には数多くの遺跡が分布する。特に、熊野川、井田川に囲まれた一帯は徳大寺家領宮河荘とされる。また式内社として伝わる熊野神社・鶴坂神社が鎮座しており、古くから開発行為が行われていた地域であったことが窺える。当事務所では過去4回に渡って付近の調査を進めた。その結果、この地には主に古代・中世に集落が經營され、近世には移動あるいは散居化し、遺構が希薄になることが明らかになった。隣接地にあたる道場I遺跡では、まとまった集落遺構が検出されており、集落の最盛期は区画溝によって集落内が整然と整備された14世紀末～15世紀後半頃と考えられる。今回の調査は公告防除特別土地改良事業に伴って、平成11年度に調査されたものである。今回の調査対象となった中名V・VI遺跡においても、中世を中心に奈良・平安時代、古墳時代後期の集落関連の遺構を検出した。

SX01を検出した調査区は土地改良事業の道路建設予定部分にあたり、南北に細長い調査区となる。この南北に細長い調査区からは南から北へ蛇行しながら流れる河川（SD02）が確認された。SX01はSD02の東岸脇に配置されていた。出土状況から中世に属するものと考えている。なお、その北側微高地には中世の集落があり、井戸や掘立柱建物がみつかっている。立地状況から考えて、SX01はその集落の付属施設と考えられる。

3. 遺構の検出状況

SX01は南北に流れるSD02が北西側に大きく進路を変える場所に位置する。40cm大の礫を河川の右岸沿いに並べ盛土とし、SD02の反対側にあたる盛土の東側部分を谷底よりも深く掘り下げ、樹皮や枝で構成された補強材で盛土の東側斜面の表面を覆っていた。盛土の一段低くなった中央部からは木杭および横板が直行するように組まれたしらがみ状の構造物が出土した。SX01は調査区東側の縁辺部にあたり、それより東側の詳細は不明である。盛土は南北方向に調査区北側微高地の岸まで約15m延びる。盛土の高さは約0.8mを測り、中央部分は南北両側よりも0.3m程低くなる。その中央部分に全長約1.5m幅約10cmの先端を尖らせた杭が南北方向に30～40cm間隔で列状に打ち込まれていた。各々の杭が先端から約50cmのところで折れ曲がって西側に倒れ込んでいたことから、杭は50cm程盛土に打ち込まれ、1m程は地上に出ていた可能性が考えられる。また杭は立ち折れながらも、原位置に留まっていることから、急激な水流やそれに類するもので倒れたのではなく、緩やかな圧のかかる行為によって崩壊したことが考えられる。なお上記の出土状況から、杭を崩壊させた力はSD02へ流れ込む方向

に働いたことが窺える。杭の上面には全長約2m幅30cm厚さ約1cmの板が杭と直交する形で南北方向に3~4列並んで配置されていた。杭に利用された木材は角材に加工されたものと、樹皮の付いた自然木を先端だけ尖らせたものとが混在していたが、板材の方は全て綺麗に加工されていた。出土状況から横板は杭に沿うように上に3~4段で積み上げられていたと考えられる。横板のうち627・636・645には、板材の縁辺に方形ないしは円形の小孔が1~5箇所穿たれていた。小孔が認められる横板は少數なため転用材の可能性も否定できないが、杭と横板の結合に利用された小孔の可能性もある。また625の下端には凹状のホゾか、あるいは方形のホゾ穴と考えられる抉りも認められ、板や杭による組み合わせや、紐などによって、しがらみが結束されていた可能性が高い。しがらみはスギ・サウラ・ヒノキ・コナラ属コナラ節で造られており、スギは杭や横板を問わず多数利用されている。一方しがらみが配置されていた箇所の両脇部分は、南北に盛土が翼状に広がり、中央よりも高くなっている。盛土東側の法面には木の枝を縦に並べ、その表面を樹皮で被った護岸用の補強材が配置してあった。北側の盛土部分では、補強材と礫の間に幅50cmほどの堅く締まった平坦な犬走り状の部分があり、土層断面を観察した結果、東側に土を斜めに入れて土手状にし、その表面に補強材を敷設していることが確認できた。補強材は恐らく、盛土東側の護岸として機能していたものと見なされる。また、犬走り状の平坦面はしがらみ部分の補修や調整に使われたものであろう。

土層の堆積状況は、SX01が調査区東端に位置していたため、調査区の周壁断面で観察することが出来た。以下それについて記述する。(但し、SX01より上層の土層については簡略に図示した。)

I層は表土および中世包含層である。①層は、SD02が埋没した後に流れている流路(SD17)の埋土である。②層はSD02の埋土である。そして③~⑫層までがこの遺構に伴う土層である。③層は主に砂礫で構成された土層で、横板や杭が配置されたSX01中央のシガラミ部の直上に相当する。③層が砂礫で構成されることから、シガラミ部分では流水していた可能性が高く、流水していた部分の幅は6.5mをはかる。④~⑧層までがSX01の東側掘り込み部分に相当し、粘質の土で構成される。但し⑤・⑥層に関しては礫や砂も混在し、流水によって盛土が攪拌された状況が窺えた。⑨~⑫層は盛土部分に相当し、主に40cm大の礫によって構成される。これらの出土状況から東側に溜め池もしくは谷状の遺構があり、盛土の低くなっているシガラミ部分を水が通りSD02に流れ込み、積み上げられた横板で水量を調節していたものと考えられる。またSX01に伴う遺物は出土しなかったが、盛土および板材部分の上位にあたるSD02の埋土からは、中世土師皿・珠洲の甕・須恵器の杯身や杯蓋などの破片が出土した。土師皿では森編年のZ1・C3・B5類等が発見され、13~15世紀代のものが認められる。なおSX01の上面には中世集落の遺構が検出されており、中世のある段階でSD02はある程度埋まっていたことが想定される。SX01の上面で検出した遺構は、主に主軸が北を向く新しい段階のものであることから、SX01は15世紀には廃絶されており、中世の古い段階の集落に伴う13世紀代の遺構と考えられる。

4. 類例

SX01は調査範囲が限定されており、遺構の性格を把握するのは困難である。ここではSX01の特徴を抽出し類例と比較したい。

SX01の特徴は、①河川(SD02)との接点に位置すること。②盛土部の補強材の位置や、しがらみ状遺構の状況から、恐らく東側からSD02へ流れ込む水流を意識して造営されており、出水側に位置すること。③盛土は礫や粘質土で構築されており、突き固めによる加圧は加えられていない。④水流が通過する盛土の低い部分に、杭と板で組んだしがらみ状の構築物を配し、翼状に広がる盛土部には

樹皮と小枝を束ねた補強材によって表面が覆われる。以上の4つがSX01の主な特徴で、これらを中心いて類例と比較したい。

1 河川との接点に位置し、出水側にあるもの。

河川と水路の合流箇所に位置し、しがらみ状の構築物をもつ類例としては、水流を堰き止める堰や水門などが挙げられる。しかし、管見に窓がある堰の大半は取水口に設置されたもので、出水部に位置するものは希である。

・奈良県田原本町の小阪里中遺跡の堰は、鎌倉後期～室町前期とされるもので、溝SD02と大溝(SD01)との接点付近に位置し、SD02に直交するように杭列が施されたものである。

・山形県山形市の今塚遺跡の水門は、古墳時代前期とされるものである。蛇行して流れる大溝(SG200)と合流する水路に、しがらみ状の造構を敷設したものである。底面の傾斜や河川跡の流水方向から、水門を伴う出水の可能性が示唆される⁽¹⁾。

出水側に位置するものは、上記の2例が認められる。但し、上記2例は、構築物が合流する地点よりもやや上流に敷設されており、杭列やしがらみが水路内部で収束する。またSX01のように合流点に位置し、盛土で大きく囲むような構造ではない。

2 盛土をもち、版築状に突き固めたりしない構造のもの。

盛土をもつ河川構築物では河川堤防や池堤防が挙げられる。広瀬和雄氏は古墳時代の河川堤防を木組の芯構造をもつA型と、それをもたず土を積み上げる構造のB型に分類した。古代を経て中近世に至るとB型が主流になる傾向を指摘している。畠大介氏によると中世の河川堤防には土や砂礫を積み上げる工法ばかりでなく、岐阜県可児市柿田遺跡の例から木組の芯構造をもつ堤があり、中世に古代の技術が部分的に関与したことを指摘した。また堤体を盛る土を搬運し、突き固める池堤防に対し、河川堤防は、盛土をあまり限定せず加压もみられないこと、池堤防と河川堤防との対照的な構造差を論じ、この差が常時漏水しているものとしている状況の差に起因するものと論じた⁽²⁾。SX01の盛土はしがらみ部分と法面に補強材が施されるものの盛土部自体に木組による芯構造は窓らず、基本的に疊と土を積み上げた構造物である。静岡県浅羽町の原野谷川旧堤防は、成立が中世に遡ると推測されるもので、遠州灘沿いの海岸平野に造られた輪中堤である。基底部は自然堆積の砂礫層で、それを覆うように粘質土を盛る。

3 翼状に広がる盛土部をもち、樹皮や小枝を束ねた補強材によって法面が覆われるもの。

SX01は、しがらみ状造構を中心いて盛土部が左右に張り出しているが、盛土が翼状に張り出る類例は認められない。但し、溝が堰部分で左右に張り出す翼状張り出しをもつ造構は多数存在する。

・新潟県上越市の今池遺跡の用水路(SD03)は、9世紀後半から中世まで利用された水路である。SD03は張り出し部分を有し、張り出し部の延長が溝になっているものも認められることから、水路から水を導水するための施設と考えられている。この様な翼状張り出しをもつ水路は、群馬県世良田遺跡下遺跡や北宿・觀音前遺跡で検出された堰にも、左右に翼状に張り出した造構が確認された。前者は奈良・平安時代、後者が古墳時代中期とされる。また北宿・觀音前遺跡の張り出し部の内部には、波板状の凹凸が認められ、分流配水するための堰として想定されている。SX01の場合護岸されていた東側に掘り込みがあることから、盛土が削平などを受け消失した場合、翼状張り出し造構と同様の検出状況になった可能性があり、水流の分岐として機能した可能性も否めない。

また、盛土の護岸であるが、盛土を護岸する類例はやはり、河川堤防や池堤防などの堤で、SX01と

の近似例が認められる。岡山県百間川米田遺跡では、古代末の河川堤防が確認されている。數度の洪水により、堤は4度大規模な復旧がなされている。堤体は、木杭やしがらみを多用し、草本類や小枝を敷き詰めながら盛土するものである。しかし盛土部に木杭の芯構造があることや、粗朶や草本類を盛土の下に敷き詰める構造である。東大阪市の久宝寺北遺跡では、古墳時代中期の護岸を目的とした杭列が確認された。複雑な流路変更を繰り返すNR5001の流路を安定させる為に築かれたもので、杭列は5基確認されている。これらの杭列は基本的に同様の構築方法が用いられている。構築法は、ほど穴をもつ横木や杭を複雑に打ち継ぎ、更にそれを補助杭で固定し、その木組を粘土やシルトで被覆し、その上に草を敷く複雑な構造をもつ。上記の護岸法は法面だけに対して施されるSX01とは構造においても異り、時期的にもかなり相違のある例であるが、粘土やシルトで盛土を覆い、その上面に粗朶や草を配置し護岸する点において共通点が窺える。

一連の河川構築物として検出したSX01と完全に一致する類例は窺えないものの、部分的にはあるが、機能・目的の点で共通する部分もあり、以上の類例を踏まえ、SX01の性格について検討したい。

5.まとめ

河川構築物については、河川や池、用水路などの治水施設、堰や水門などの利水施設、梁（やな）などの漁撈施設などが考えられる。SX01の特徴から考えると、河川（SD02）の流れと平行に堤状の盛土が造られており、樋（しがらみ）が盛土上面に設置され、法面を樹皮や小枝からなる粗朶などで護岸されていることから、河川堤防などの治水施設がまず想定される。しかし、詳細にみると法面を護岸している粗朶などが自然河川の本流と逆の外側に敷設されていることや、しがらみが盛土の落ち込んだ箇所だけに設置されていること。また、しがらみ部分に流水していたと考えられる粗砂が堆積し、しがらみ部分の木杭がSD02方向へ折れ込んでいることから、SD02に対する治水施設というよりはむしろSD02に流れ込む水流に対する施設と考えられる。また水門や堰に盛土が設置された類例は確認できないが、盛土は版築などの加圧がなされておらず、常時滯水していたのは東側掘り込み部の粗朶などで護岸されていた高さまでであろう。なお流れ込んでいた水路の幅は粗砂が堆積していた約6.5mと考えられる。SX01の盛土は、南北約15mの規模をもち、東側に掘り込みがあることから、SX01の規模は水路幅よりも広くなる。仮にSX01の盛土が削平などを受け消失した場合、翼状張り出し造構と同様の検出状況になった可能性もあり、水流の分岐や水量調整といった機能も想定できる。但し、堤体部にそれほどの高さがないことや、水田への取水目的で造られた場合、分流方向に中世の掘立柱建物群が隣接することなど疑問点も多数認められる。梁の堰堤の可能性も指摘されているが、調査範囲が狭く、主流に注ぎ込む流路の様相が不明で、水流がどの程度のものであったのか把握できないことや、魚を捕獲する陥井部が不明瞭であり、梁全体の構造が把握できることから梁と位置づけることも難しい。ここでは出土状況から、出水部に敷設された土台状の盛土を伴う堰あるいは水門と位置づけ、また機能に関しては水路の水量確保あるいは水量調整の分流施設と想定したい。

註

（1）11年度の概要や紀要の3号では「しがらみ」という用語を、盛土法面の護岸部分にあてていたが、日本考古学用語辞典では「流水を塞（せ）くために杭をうち横に竹や木をからみしばりつけた施設」とある。遺構の形態を考慮すると、護岸部分の様相よりも、むしろ横木と杭からなる中央部分の施設に相応しい用語であり、本書では中央部分の施設を「しがらみ」とした。

（2）11年度の概要や紀要の3号で「しがらみ状造構」とした護岸施設である。資料観察の結果、木の枝を積み重ねた束の上面に木の皮を置いた構造であることが分かり、本書では粗朶や樹皮を重ねた護岸施設とした。

（3）報文では河川から水を引く用水路跡と報告されているが、水戸宏美（1998）『第7回東日本埋蔵文化財研究会』の資料

では、溝跡の南東部の造構が検出されず、溝の機能が特定出来ないとしつつ、底面の傾斜や河川の流水方向から水門を伴う出水の性格が強い水路と考えられている。

(4) 広瀬和雄 (1991)

(5) 畑 大介 (2003)

(6) 森 隆 (2002)

引用参考文献

泉佐野市教育委員会 1993『堺波羅遺跡』

大阪文化財センター 1987『久宝寺北(その1~3)』

岡山県文化財保護協会 1989『百間川米田遺跡3(旧当麻遺跡)』

田原本町教育委員会 1992『小坂里中遺跡第2・3次発掘調査概報 千代遺跡第1次発掘調査概報』

武田健次郎・新宅輝久 2000『中名VI道路A地区検出の治水関連施設について』『富山考古学研究』3

富山県文化振興財團

新潟県教育委員会 1984『上越バイパス関係遺跡発掘調査報告I』

新田町教育委員会 1993『北塾・観音前遺跡—新田大根住宅団地建設に伴う発掘調査報告書』

畠 大介 2003『治水・利水に携わった中世の人々と技術』『中世諸城』 中世諸城実行委員会

東日本埋蔵文化財研究会 1998『第7回東日本埋蔵文化財研究会 治水・利水遺跡を考える』

廣瀬和雄 1991『土木技術』『古墳時代の研究』5 雄山閣出版

森 隆 2002『考古学からみた漁撈用『梁』認定のための基礎的作業—民俗編—』『富山考古学研究』5

富山県文化振興財團

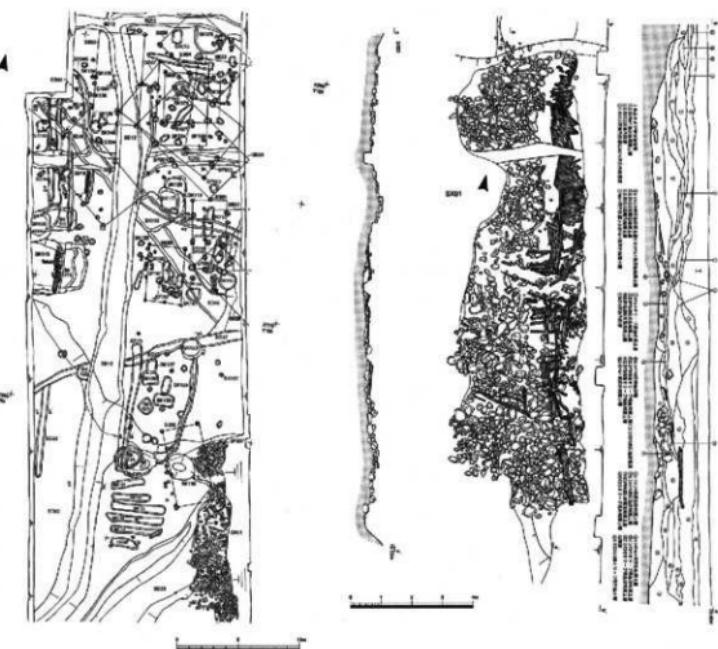


図1 中名VI遺跡A地区造構全体図

図2 中名VI遺跡A地区中世面治水関連造構実測図

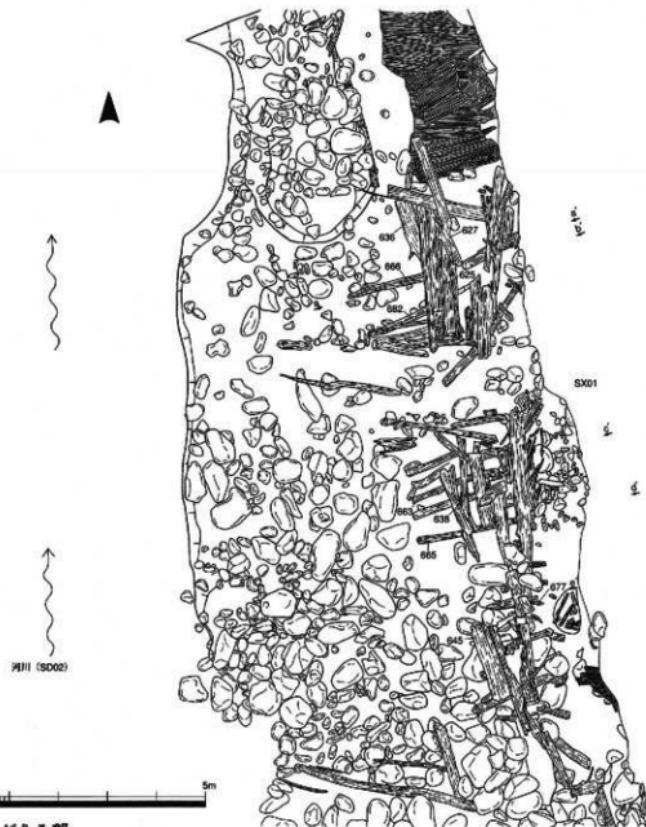


図3 SX01しがらみ部

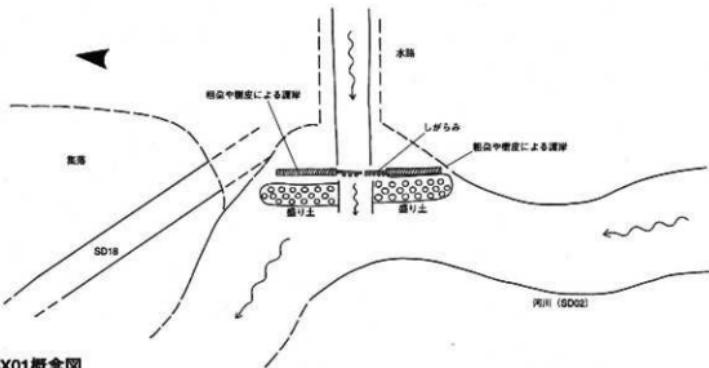


図4 SX01概念図

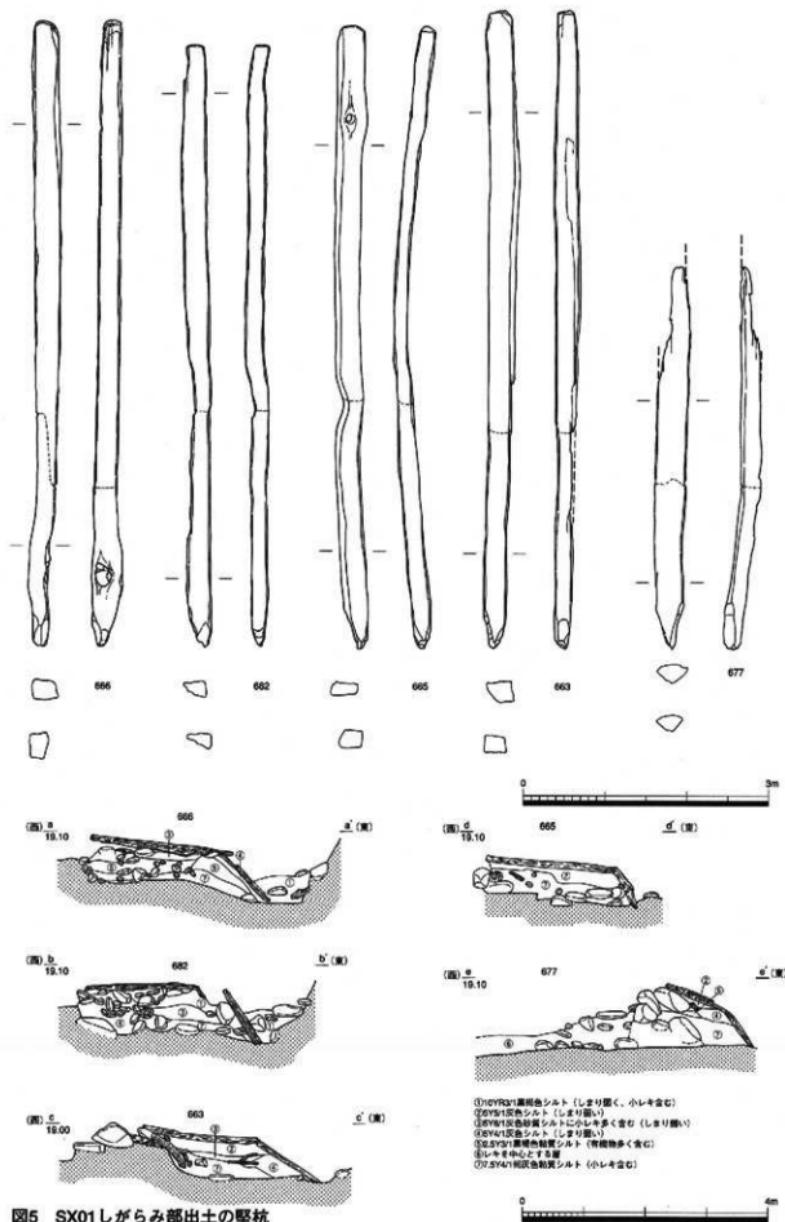


図5 SX01しがらみ部出土の堅杭

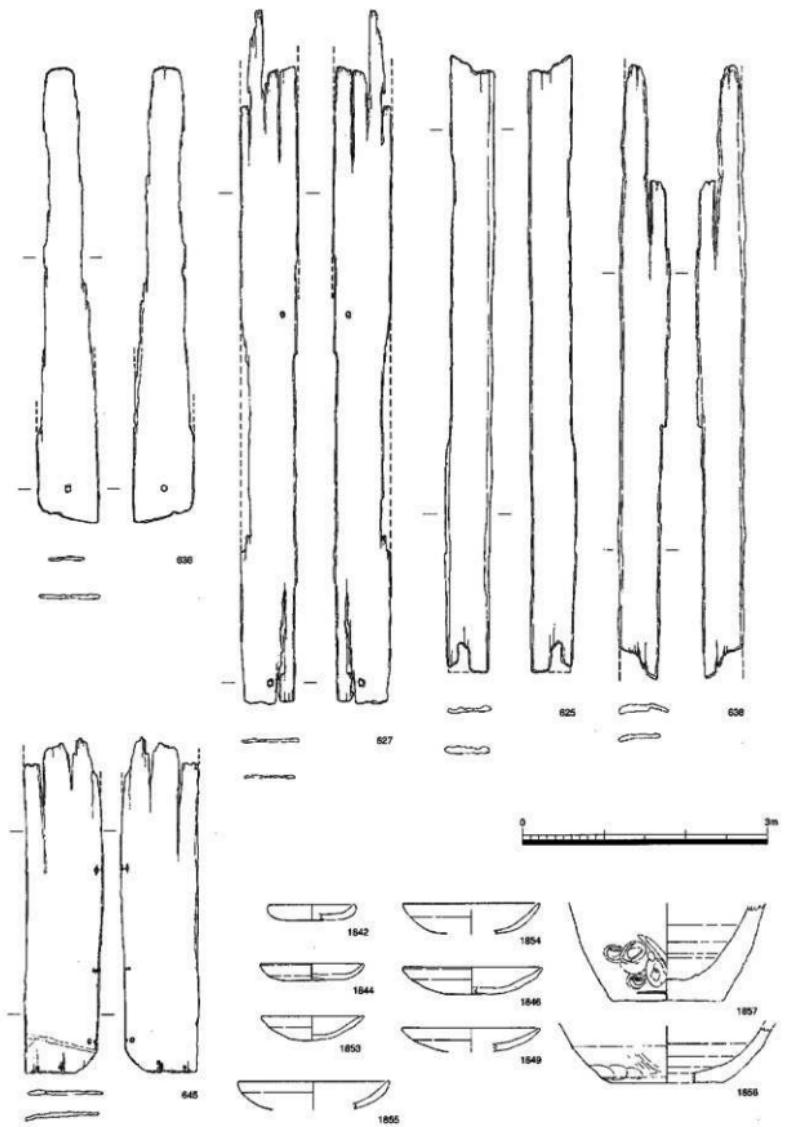


図6 SX01しがらみ部出土の横板・周辺出土遺物

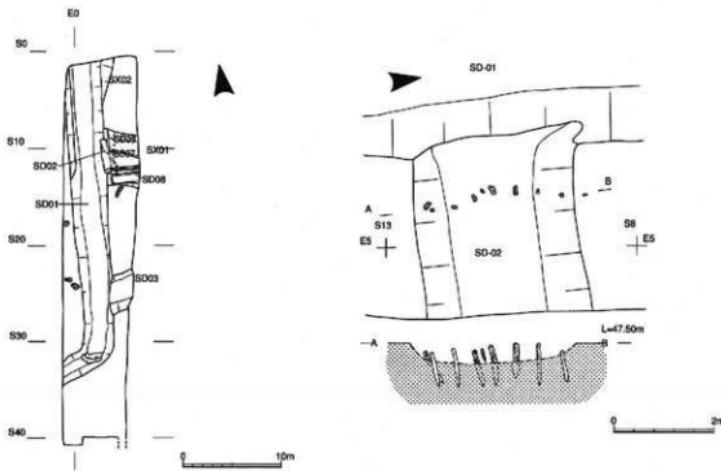


図7 小坂里中遺跡（田原本町教育委員会1992を著者一部改変・再トレース）

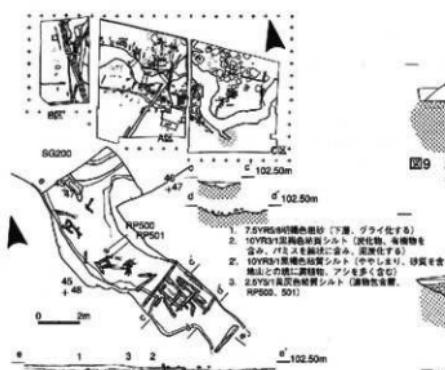


図8 今塚道路（東日本埋蔵文化財研究会1998を一部改変・再トレース）

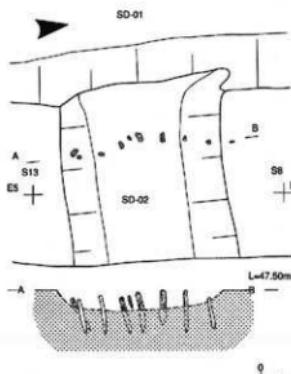


図9 原野谷川旧堤防
（畠 大介2003を一部改変・再トレース）

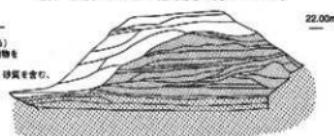
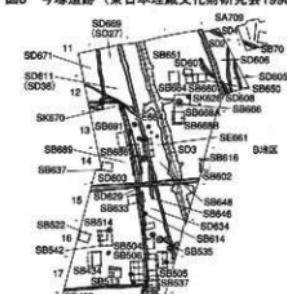


図10 橋瀬遺跡池堤防断面（東佐野市教育委員会1993を一部改変・再トレース）



SX01の類例1

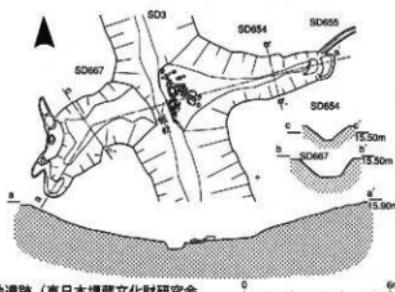


図11 今池遺跡（東日本埋蔵文化財研究会1998を一部改変・再トレース）

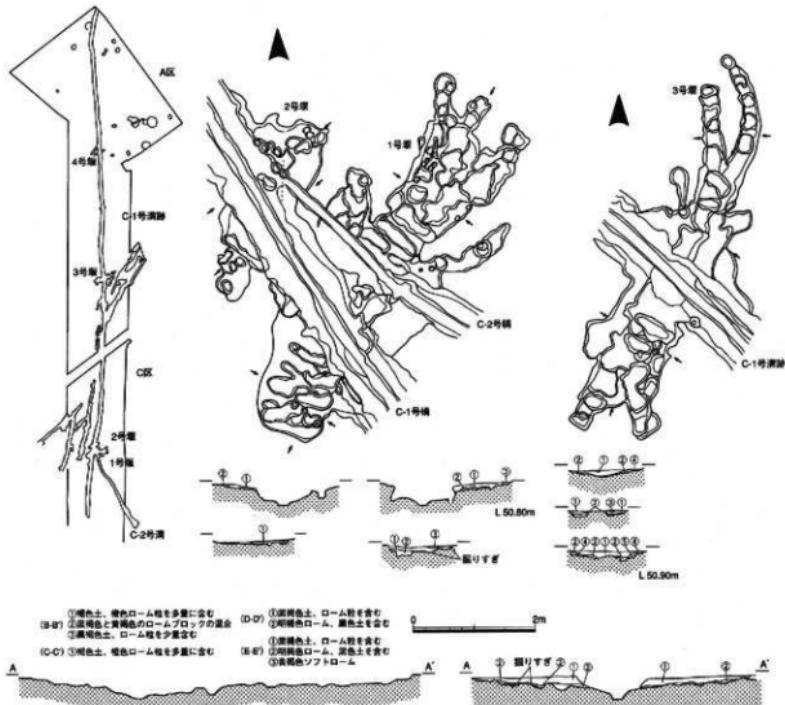


図12 北宿・觀音前遺跡（東日本埋蔵文化財研究会1996を一部改変・再トレース）

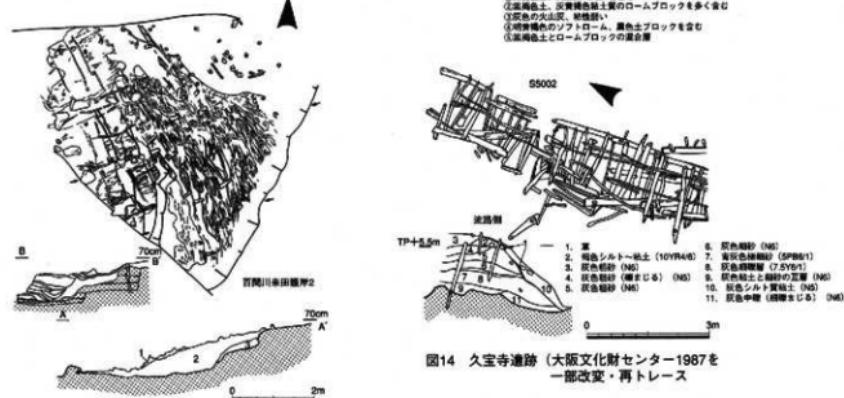


図13 百間川米田遺跡（岡山県文化財保護協会1989を一部改変・再トレース）

SX01の類例

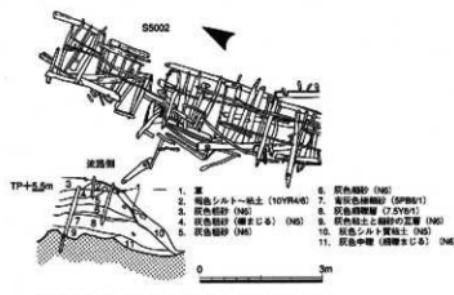


図14 久宝寺遺跡（大阪文化財センター1987を一部改変・再トレース）

3. 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器組成について

森 隆

1. はじめに

今回調査・報告した中名V・VI遺跡では、中世の集落構造に伴って多くの土器・陶磁器が出土している。これら中世の焼き物のうち、遺跡の近隣地域で生産されたと考えられる土器類以外については、原則として何らかの流通手段・経路を経て当地にもたらされ、使用・破損等により破棄されたものと考えられる。従ってこれらの土器・陶磁器の種類をリストアップし、その内容や組成について検討を加えることは、これらの土器を保有・使用したであろう人々の生業手段の一端や、当地でかつて生活を営んだ人々の嗜好や経済的地位、階層などを解き明かしていく上で、必要不可欠な作業であるといえよう。すなわちこれらの分析は建物群の検討と同様に、遺跡の性格を考えるうえでの、ひとつ重要な視座を提供することになろう。そこでまず出土した土器・陶磁器の焼物別および器種別のリストを作成し、次いで各種の焼物から構成される土器・陶磁器の組成について検討を加えていきたい。

分析の対象とした調査区は、中名V遺跡F1~F3地区、中名VI遺跡A~C地区であるが、細長いトレーニング調査区については、遺構に粗密があることから、さらにいくつかの小地域単位に分割している。次に分析の対象とした土器・陶磁器は遺構出土・包含層出土を含めた全てである。このなかには排土またはラベル記載不備で正確な出土位置は不明だが、出土地区は把握できる資料も含めている。このため組成に用いた資料数と、地点別出土状況に用いた資料数の両者は必ずしも一致していない。

カウントに先立ち、当然ながら中世以外の時期の遺物（古代以前および近世以降）は選別し除外した。カウントは基本的に破片数で行い、原則として個体識別や口縁部・底部残存比率による統計といった方法は行っていない。但し珠洲・八尾については、破片総数以外にも口縁部・体部・底部ごとの破片数のカウントを行い、これを総個体数把握のための参考とした。これらの手法は基本的に昨年度の「道場I・II遺跡発掘調査報告」の総括で実施した手法を踏襲している。以下各地区毎に分析結果を記していく。

2. 出土した土器・陶磁器の種類と特徴

まず最初に中名V・VI遺跡で出土した中世土器・陶磁器の種類と特徴を概説しておく。土器類ではまず在地産と考えられる土器類や土師質土器が挙げられる。総数で1,905点が出土している。土器類以外の器種では、壺・甕・擂鉢といった典型的な中世の貯蔵・調理器には、八尾や珠洲など地域色の強い流通品が多量にみられる。珠洲は573点、八尾は102点が出土している。さらに国内遠隔地から国外に及ぶ広域流通品としては、青磁・白磁・青白磁などの中国陶磁・瀬戸美濃施釉陶器、山茶碗、畿内産の瓦質土器などがある。とくに中国陶磁は当地では最も遠隔地からもたらされた広域流通品のひとつである。流通商品の価値は、そのものの有する品質としての価値に加えて、入手の難易度によっても左右されるが、中国陶磁は品質と入手の困難さにおいて、当時の人々にとって最も価値の高い焼物の一つであったと考えられる。中国陶磁の我が国への輸入は、初期貿易陶磁の段階を除くと、平安時代後期以降に本格化する。本調査地では平安時代に遡る北宋の時期の製品は少なく、南宋・元代の製品が主流となる。青磁・白磁・青白磁の順で多く出土する。総数68点の出土がみられる。青磁のうち過半は龍泉窯系青磁、次いで同安窯系青磁がある。また磁器ではない施釉陶器として、建窯産と考えられる鐵釉陶器が2点出土している。一方国产の施釉陶器である瀬戸美濃の製品は29点と、意

外にも数量的に中国陶磁より少ない。施釉は灰釉と鉄釉があるが、灰釉が過半を占める。また東濃産と考えられる無釉の山茶碗が1点F1地区から出土している。この他に瓦質土器の出土もみられるが、瓦質羽釜を加えて11点と少ない。

3. 各地区別の土器・陶磁器の組成比率と出土状況

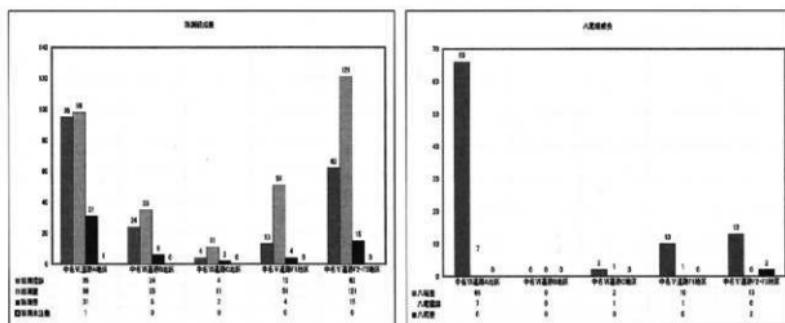
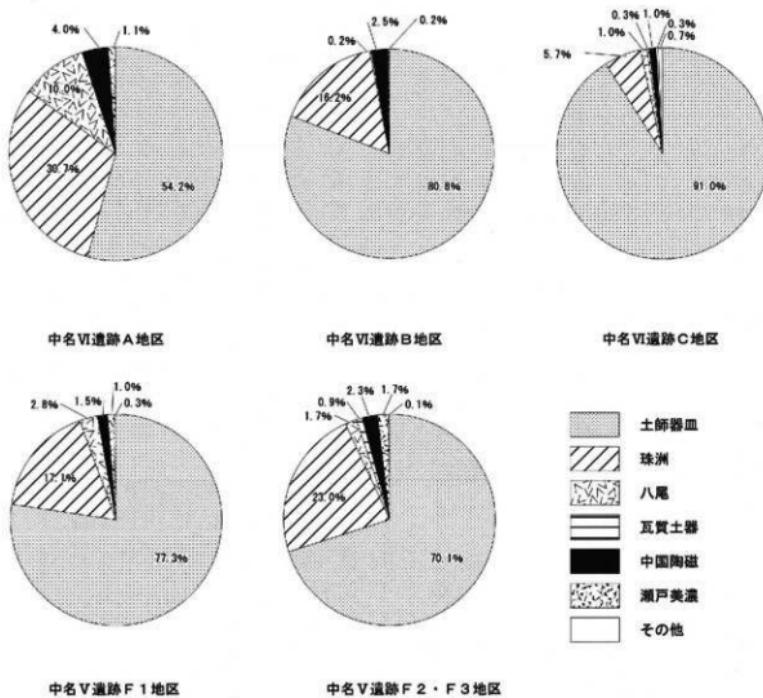
次に各地区出土の中世土器・陶磁器全てを対象に、その組成の比率や各地区内での出土の様相、傾向などについて検討してみる。本来土器・陶磁器組成の分析は、造構論・遺物論双方からの複合的検討が必要不可欠で、かつ資料の出土条件にも恵まれている必要があるが、中名V・VI遺跡の場合そのどちらにも恵まれていない。とくに建物群単位で短時期毎の組成が復元できるのがベストであるが、このような条件はもとより論外の状況にある。そこで漠然とした取り扱いであるが、土器・陶磁器の全体組成について、とりあえず存続時期総体の出土遺物をカウントする。但し空間的広がりについては、各調査地区毎の設定が可能であるが、これに造構群の単位を重視しながら細分した地区設定を行った。その結果中名V遺跡F1地区をさらにF1①～F1③の三ヵ所に、中名VI遺跡B地区をさらにB①～B③の三ヵ所に細分した。また出土位置と数量のドットについては、基本的に調査地内に設定した国土座標軸をもととした地区割り（X軸、Y軸）を利用し、4m²毎のメッシュ内での破片数をカウントした。カウントの結果示された数量は●○■などの記号と、その大きさの大小で表示し、出土の粗密を表現した。珠洲、八尾についてはこれに加えて器種ごと（壺・甕・擂鉢）の数量分布と組成比率を細分して明示した。中国陶磁は青磁・白磁・青白磁別の表示に、瀬戸美濃については灰釉・鉄釉の施釉別に表記した。その他これらの表記の種類と意味についてはその都度図面中で凡例を示した。以下に分析結果について順次言及していく。

（1）中名V遺跡F1地区

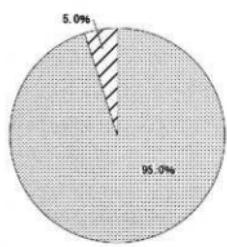
カウントした土器陶磁器の総数は、F1地区全体で397点である。内訳は、土師器皿307点（77.3%）、珠洲68点（17.1%）、八尾11点（2.8%）、中国陶磁6点（1.5%）、瀬戸美濃4点（1%）、山茶碗1点（0.3%）となる。土師器皿が70～80%、珠洲20%弱、八尾3%弱、中国陶磁、瀬戸美濃数%の比率はある意味今回の分析結果のなかでは標準的な様相を示す。中国陶磁は14世紀から15世紀にかけての比較的新しい時期の龍泉窯系青磁がみられる他、建窯産と考えられる鉄釉茶入れや青白磁の壺の破片も出土している。瀬戸美濃は灰釉鉢などが少量みられる他、山茶碗の破片が1点出土している。この山茶碗は東濃産で明和窯段階（13世紀代）の製品と考えられる。同様の山茶碗は西側に隣接する道場I遺跡でも出土しており、当遺跡との関連性が指摘できる。

F1地区は後述のF2・F3地区と異なり、細長いトレンチ調査区で南北200m、東西50mの範囲を「コ」字状に折れ曲がっている。このため造構もトレンチの全ての場所で検出されているわけではない。そこで造構の比較的集中する部分単位に、さらにF1①～F1③の三ヵ所にわけて組成をカウントしている。内訳は、F1①地区では総数20点、内訳は土師器皿19点（95%）、珠洲1点（5%）、F1②地区では総数159点、内訳は土師器皿137点（86.1%）、珠洲15点（9.4%）、八尾5点（3.1%）、中国陶磁1点（0.7%）、瀬戸美濃1点（0.7%）、F1③地区では総数143点、内訳は土師器皿97点（67.8%）、珠洲41点（28.7%）、八尾3点（2.1%）、瀬戸美濃2点（1.4%）となる。このうちF1①地区は造構・遺物とも少なく参考程度にしかならない。これに比べF1②地区は後述のF2・F3地区に隣接しており造構も多い。土師器皿が8割を超えこれに珠洲、八尾が定量伴う。このうち土師器皿は掘立柱建物周辺に集中出土する傾向がみられる。これに対し珠洲、八尾は土師器皿よりもやや外縁側で出土するもの

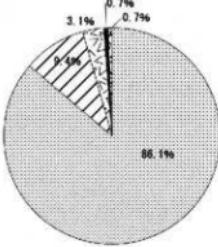
第1図 中名V・VI遺跡出土中世土器・陶磁器組成表（1）



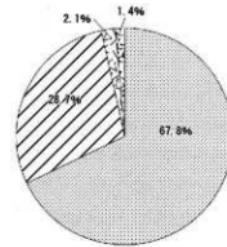
第2図 中名 V・VI遺跡出土中世土器・陶磁器組成表（2）



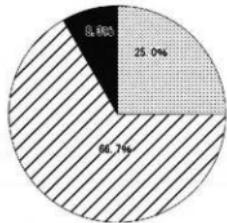
中名V遺跡F1地区①



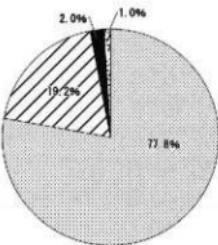
中名V遺跡F1地区②



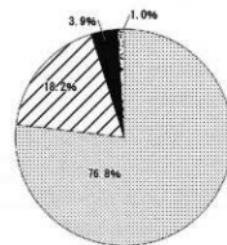
中名V遺跡F1地区③



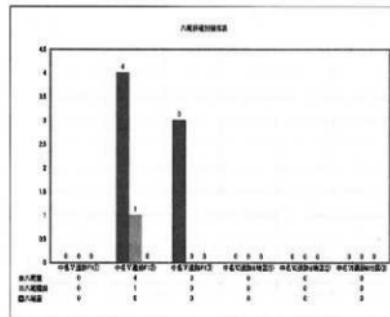
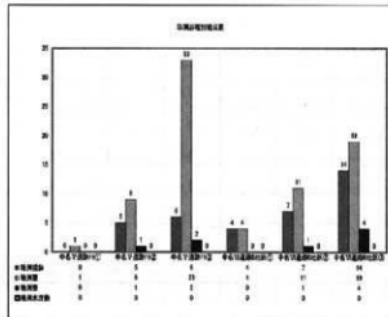
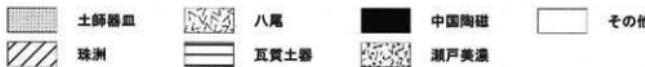
中名VI遺跡B地区①



中名VI遺跡B地区②



中名VI遺跡B地区③



第3図 中名V・VI遺跡出土中世土器・陶磁器組成表（3）

が多い。建物の時期は14世紀中～15世紀末頃でF2・F3の主体となる時期と一致する。F1③地区でも同様の傾向が看取できる。とくに土師器皿は磁石建物の周辺に出土が集中する様相が明らかである。建物の時期はF1②地区と同じである。また東濃産の山茶碗もF1③地区から出土しているが、山茶碗自体は建物の時期より遅る。

(2) 中名V遺跡F2・F3地区

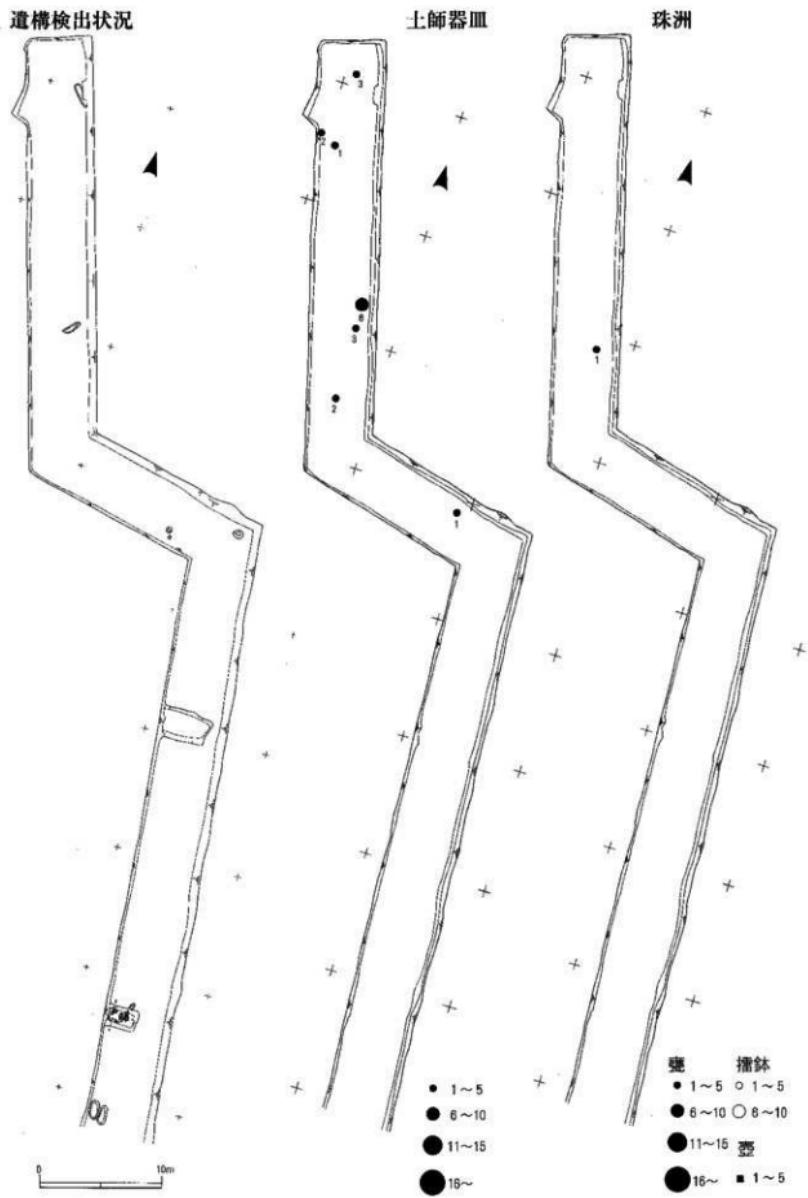
F2地区とF3地区は調査地区が一続きのため一括して取り扱う。カウントした土器陶磁器の総数は、F2・F3地区全体で860点と、調査面積に比べ出土遺物の点数が多い。内訳は、土師器皿603点(70.1%)、珠洲198点(23%)、八尾15点(1.7%)、中国陶磁20点(2.3%)、瀬戸美濃15点(1.7%)、瓦質土器8点(0.9%)、瓦質羽釜1点(0.1%)となる。概ねF1地区と同様の組成比率であるが、調査地区がまとまっている分、組成比率も安定している。ただし遺構変遷のうえではF2・F3地区の場合、遺構変遷自体は13世紀中頃から15世紀代までの時期幅があるが、主体となるのは15世紀代と考えられ、古い時期の遺物は相対的に少ない。

このなかでまず土師器皿の分布については、やはり掘立柱建物の周辺に集中して出土することが、一目瞭然であり、土師器皿使用形態の一端を示すものと考えられる。これに比べ珠洲は建物からやや離れて周辺に散在しており、土師器皿の分布とは異なる。同様の傾向は隣接するF1②地区でもみられる。八尾は数が少なく、これは建物群の時期の中心が八尾の時期よりも降るためと考えておく。中国陶磁は点数が少なく散在するが、白磁は北側に、青磁は中央から南側に一応範囲がまとまる。瀬戸美濃や瓦質土器は調査地内に広く点在する。

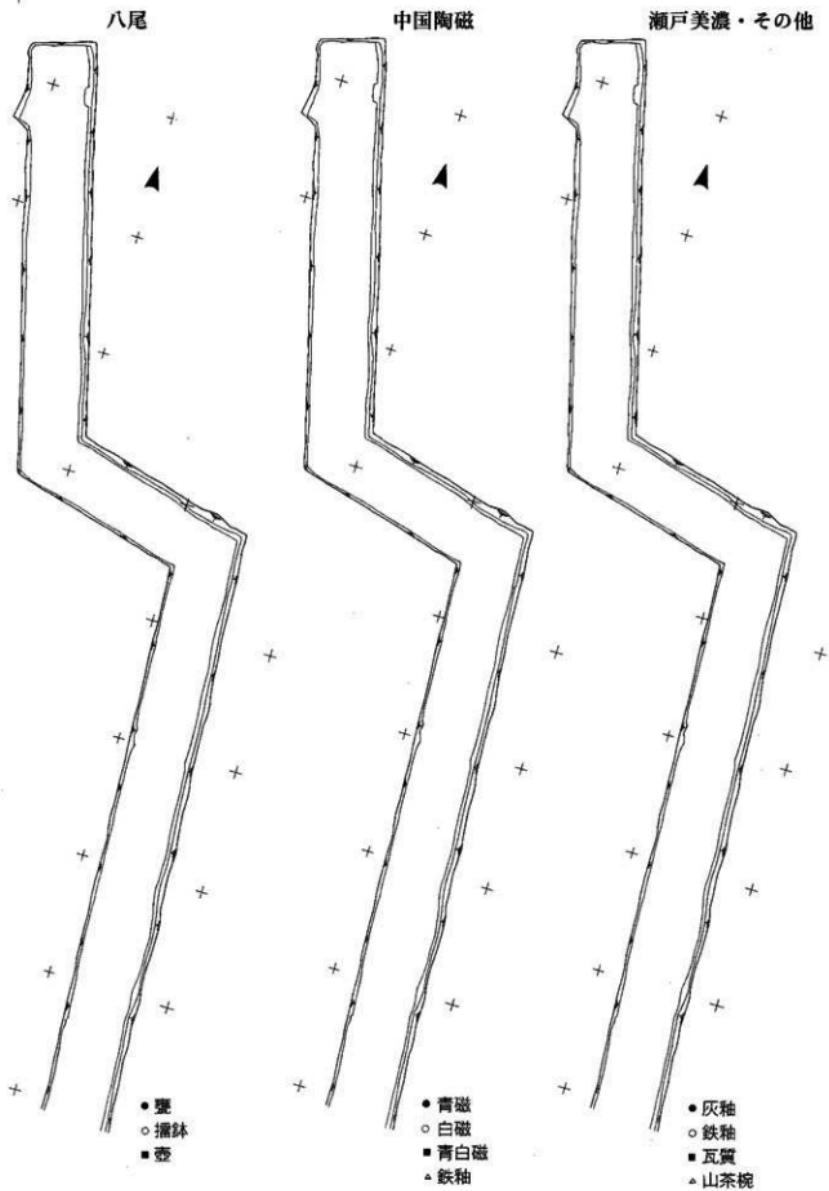
次に個別の出土遺物では、まず中国陶磁は大宰府分類IV類からそれ以降の14～15世紀にかけての比較的新しい時期の龍泉窯系青磁がみられるが、1点外面片彫り蓮弁文を有す大宰府分類I-5-b類(最近の分類ではII b類)があり、こちらは古い時期の建物に伴うものであろう。白磁も大宰府分類IX類や森田分類D群など14世紀代のものが少量みられる。またF1地区でも出土していた建窯産と考えられる鉄釉の天目茶碗がF2・F3地区でも出土している。瀬戸美濃には持腰形香炉や卸皿、平碗など灰釉の製品が多く見られる。藤澤分類古瀬戸後II～IV期の製品が多く、F1・F2地区でもっとも建物数の多い15世紀代の建物群に伴う遺物と考えられる。瓦質土器に関しては風炉・火鉢などの器種がみられる。畿内の製品の可能性が高い。また1点ではあるが鍔を有する瓦質羽釜が出土している。京都山城から近江に多いタイプで、13世紀代に比定できることから、F2・F3地区の古い時期の建物群に伴うものであろう。

(3) 中名VI遺跡A地区

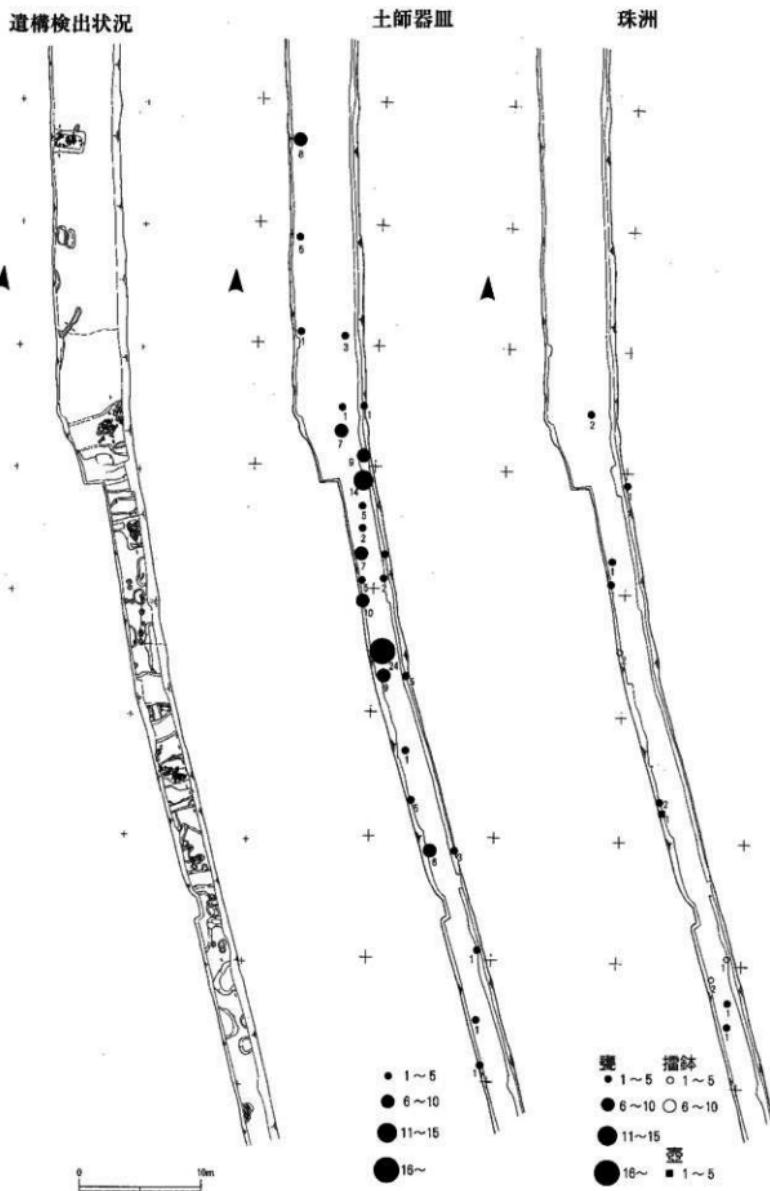
中名VI遺跡は中名V遺跡の北側に隣接する。調査区は中名V遺跡から続く長いトレンチの北端に位置するが、両遺跡の間には大きな旧河道が横切っており、中名VI遺跡A地区の遺構群として中名V遺跡と明快に区別できる。細長い調査区ながら面積もそこそことあり、今回報告する資料中では最もまとめたものとなっている。掘立柱建物は35棟が検出され、13世紀中頃～15世紀代の存続幅を有す。その間の全ての時期の遺物をカウントしたため、短時期毎の組成内容の変化はわからないが、特別に規模の卓越した建物はなく、建物群単位に時期ごとの大きな変化もあまりみられないことから、階層的には同質性を有する建物群の全時期を通じての組成内容と換言できる。ただし特定の出土遺物(中国陶磁や瀬戸美濃等)についてはある程度時期を把握できるため、多少は建物群の時期毎の組成内容を復元することは可能である。カウントした土器・陶磁器の総数は、A地区全体で732点と、中名V遺跡F2・F3地区と比べると、調査面積が大きい割には遺物の出土点数は少ない。内訳は、土師器皿



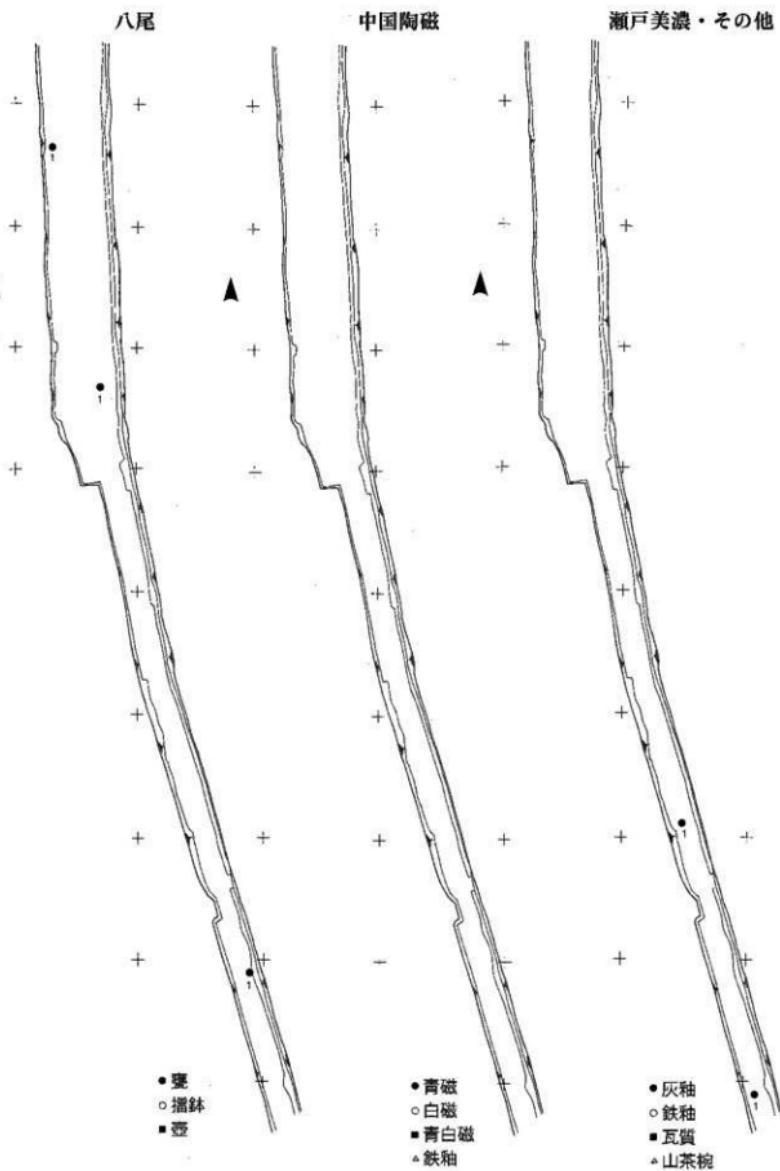
第4図 中名V遺跡F1①地区出土遺物分布図（1）



第5図 中名V遺跡F1①地区出土遺物分布図（2）

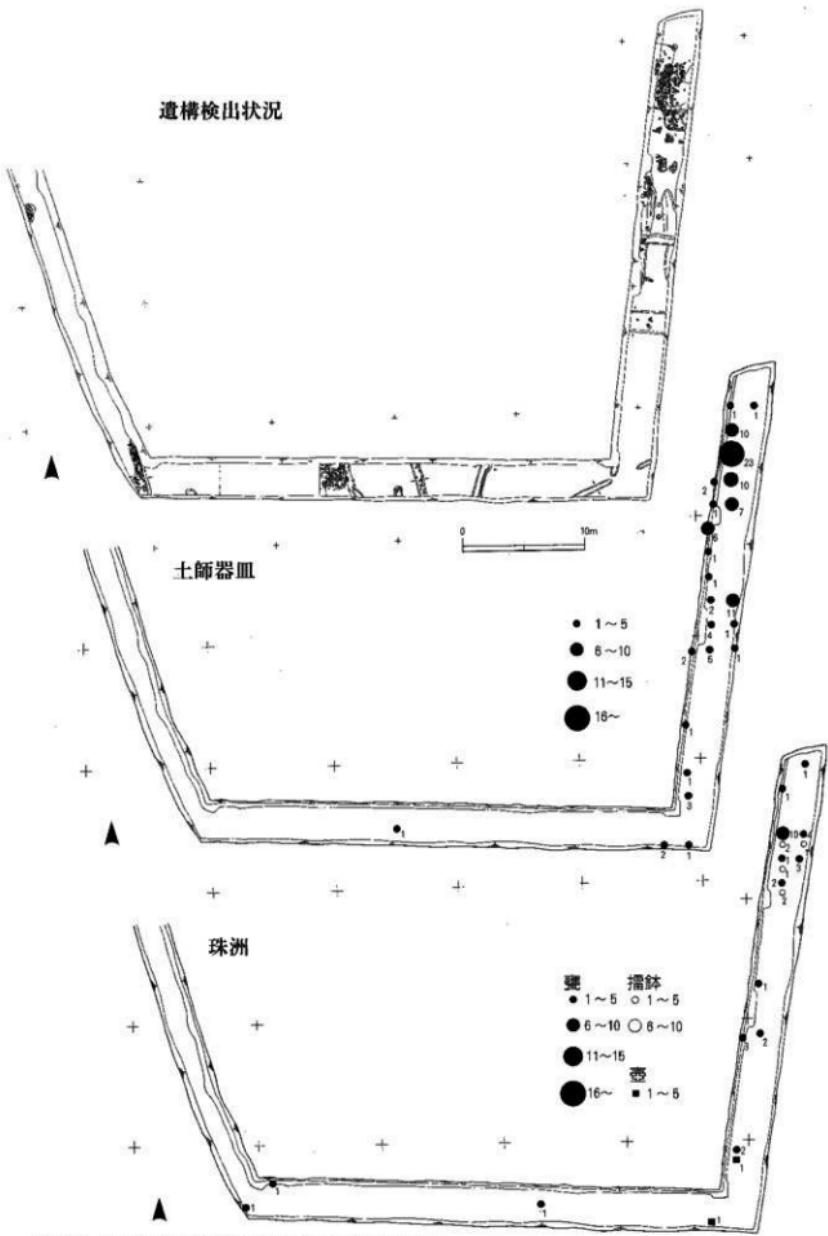


第6図 中名V遺跡F1②地区出土遺物分布図(1)

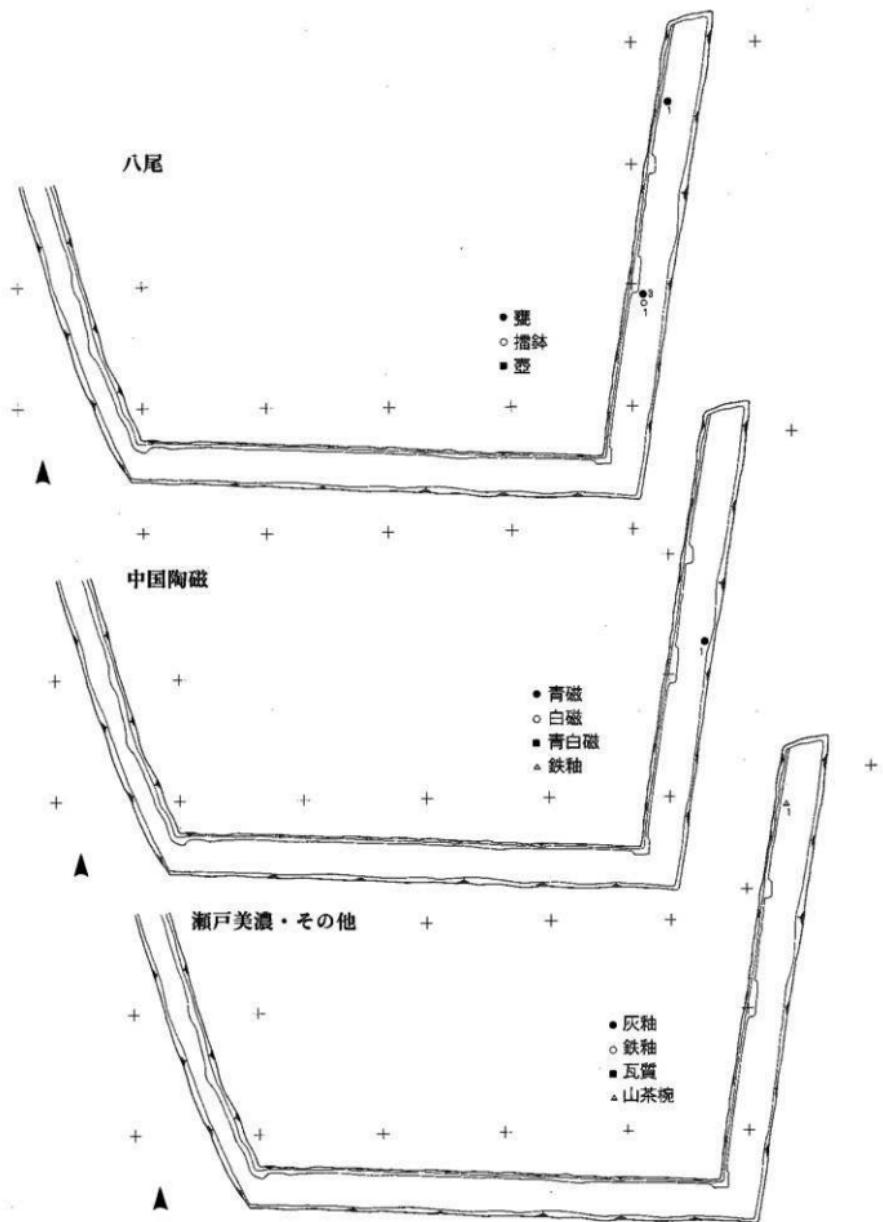


第7図 中名V遺跡F1②地区出土遺物分布図（2）

遺構検出状況



第8図 中名V遺跡F1③地区出土遺物分布図(1)



第9図 中名V遺跡F1③地区出土遺物分布図（2）

397点（54.2%）、珠洲225点（30.7%）、八尾73点（10%）、中国陶磁29点（4%）、瀬戸美濃8点（1.1%）となる。中名V遺跡F地区に比べると、土師器皿の比率が20~25%ほど低く、逆に珠洲の比率が約倍に、八尾が4倍に増加している。中国陶磁、瀬戸美濃は数%の比率でそう大差はないが、瓦質土器はみられない。すなわち中名V遺跡F2・F3地区に比べると、日常の生業に使用したと考えられる焼物に比重が高い点が、中名VI遺跡A地区の全体様相から読み取ることができる。

次に各焼物別の分布状況であるが、まず土師器皿では、やはり建物群の周辺に集中して出土する傾向はあるものの、南側の旧河道内にも出土がそれなりにみられ、使用済みの土師器皿の一部は旧河道内に破棄されていたことが窺える。ついで珠洲の様相であるが、概ね全域で広く点在しており、あまり集中して出土する様相は認めがたい。但し調査区中央西側の一角に壺が集中して出土する部分がみられる。またこの部分の北東側に近接して水注が出土しており注目される。周辺は集落Ⅲ期には区画溝が形成されることから何らかの関連性が窺えるが、この区画溝に伴う建物群は残念ながら明らかでない。八尾は珠洲と異なり調査区の北端付近にまとまる傾向がある。時期的にみてI～Ⅲa期（13世紀中頃～14世紀代）の建物群に伴うものであろう。これらの建物群は後出のIV期の建物群に比べると、配置がやや北側に偏っており、八尾の出土範囲とよく重なる位置にある。中国陶磁、瀬戸美濃については点数も少なく調査区全体に散在する様相を示している。

個別出土遺物では、まず中国陶磁のうち龍泉窯系青磁では、外面片彫り蓮弁文を有す大宰府分類I-5-b類（II b類）、I-2～4類、III類や同安窯系青磁杯・碗など古い時期のものが数点あり、これに大宰府分類IV～VI類の白磁および青白磁の瓶類を加えた組成が、I～Ⅲa期の古い時期の建物群に対応するものと考えられる。また大宰府分類IV類や上田分類B-II・C-II・D-II類などの龍泉窯系青磁、森田分類D群の白磁皿などは、Ⅲb期以降の新しい時期の建物群に伴う中国陶磁と考えられる。瀬戸美濃では灰釉の卸皿、縁釉小皿、卸目付大皿、緣折深皿、平椀などがみられ、藤澤編年古瀬戸後I～IV期の時期幅を有することから、これらの瀬戸美濃製品に関してはⅢb期以降の新しい時期の建物群に伴う組成と考えることができる。

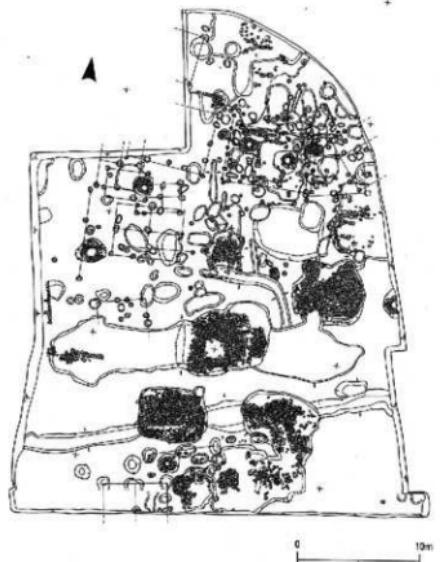
以上の組成を概観すると、土師器皿に比べより日常の生業活動に密着した珠洲などの焼物の比率が高く、中名V遺跡F地区の様相とはやや異なっている。中国陶磁や瀬戸美濃の出土傾向では碗皿が主体で、それ以外の器種はあまりみられない。瀬戸美濃は灰釉製品が主体で、天目茶碗など鉄釉製品は欠如している。同様に畿内産瓦質火鉢など瓦質土器の出土も欠如している。総じて建物の構成棟数が多いわりには、土器・陶磁器の組成内容が単純で器種に幅が無いことが指摘できよう。

（4）中名VI遺跡B地区

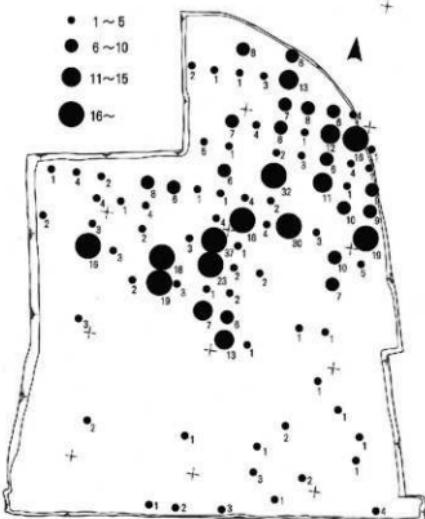
中名VI遺跡B地区は南北に約250mほどの長さのある細長いトレンチ調査区である。このため全域で遺構が濃密に検出されているわけではなく、遺構の分布に粗密がみられる。そこで中名V遺跡F1地区と同様に、遺構のまとまる範囲を一単位に、北から順にB①～B③の3地区にさらに細分した。

カウントした土器・陶磁器の総数は、B地区全体では402点である。内訳は、土師器皿325点（80.8%）、珠洲65点（16.2%）、八尾0点（0%）、中国陶磁10点（2.5%）、瀬戸美濃1点（0.2%）、瓦質土器1点（0.2%）となる。土師器皿が8割、珠洲1割6分、残りが中国陶磁、瀬戸美濃その他数%の比率で、中名VI遺跡などと比較的近似した組成比率である。これをさらにB①～B③の3地区毎にみてみると、まずB①地区では、総数12点、内訳は土師器皿3点（25%）、珠洲8点（66.7%）、八尾0点（0%）、中国陶磁1点（8.3%）、瀬戸美濃0点（0%）、瓦質土器0点（0%）となる。B②地区では総数99点、内訳は土師器皿77点（77.8%）、珠洲19点（19.2%）、八尾0点（0%）、中国陶磁

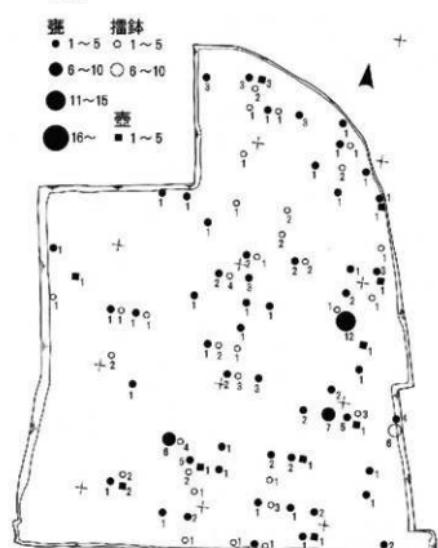
遺構検出状況



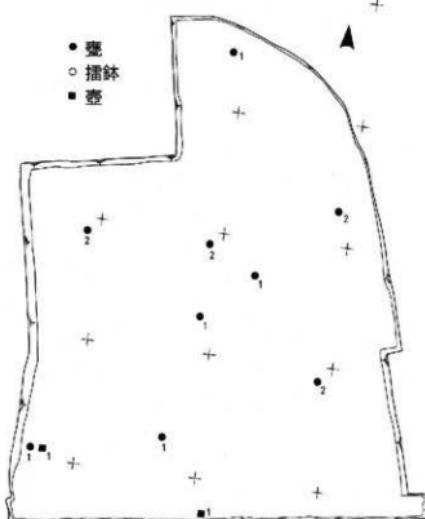
土師器皿



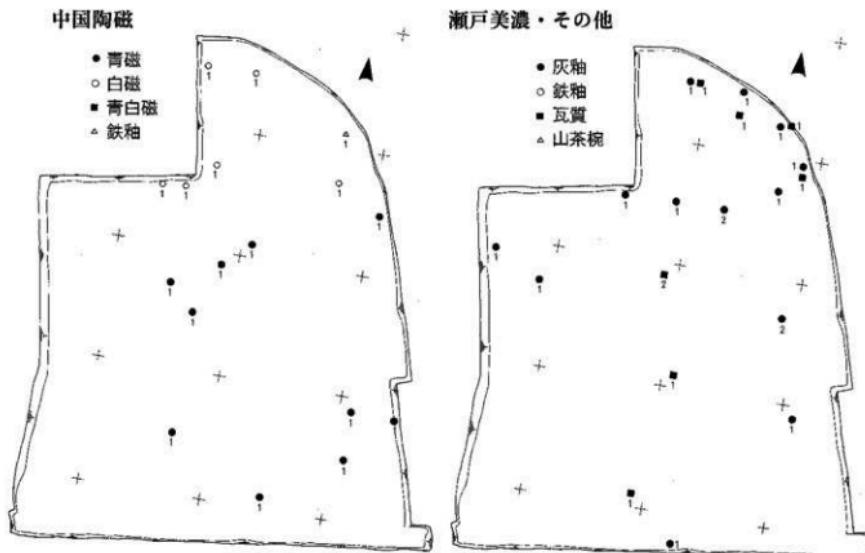
珠洲



八尾



第10図 中名V遺跡F1・F3地区出土遺物分布図（1）



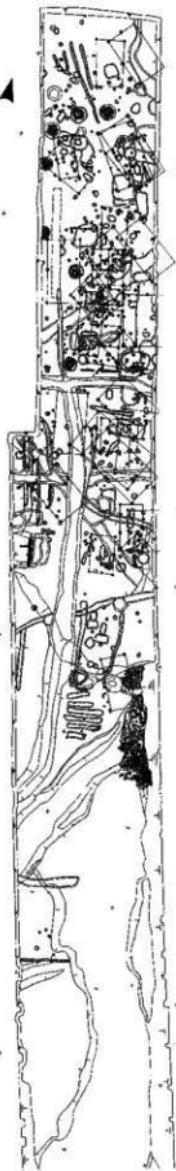
第11図 中名V遺跡F②・F3③地区出土遺物分布図（2）

2点（2%）、瀬戸美濃1点（1%）、瓦質土器0点（0%）となる。B③地区では総数203点、内訳は土師器皿156点（76.8%）、珠洲37点（18.2%）、八尾0点（0%）、中国陶磁8点（3.9%）、瀬戸美濃2点（1%）、瓦質土器0点（0%）となる。B①地区は資料数が少なく安定した数値にはならないが、B②、B③地区は今回の中名V・VI遺跡における標準的組成比率と考えられる。

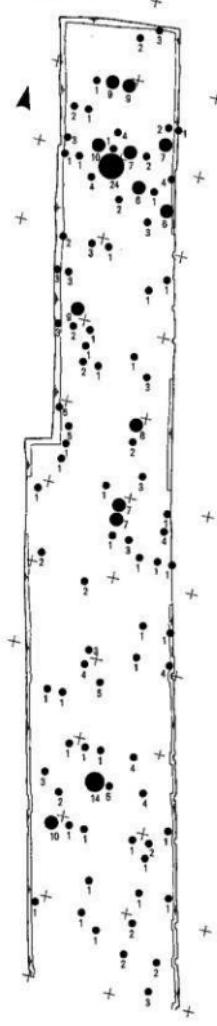
次に遺物の出土分布の状況であるが、B①地区では出土点数が少いものの、そのほとんどがトレンチ屈曲部付近のSD12から出土している。B②地区では土師器皿は掘立柱建物の分布する付近よりも北側の溝状造構の多い部分で多く出土している。珠洲も散在するが、ほぼ土師器皿と同様な傾向を示す。中国陶磁、瀬戸美濃は点数が少なく傾向を把握するには至らない。B③地区では土師器皿はS D26のトレンチ角付近に集中する他、掘立柱建物の周辺と南側に分布がある。点数は少ないが珠洲も同様の傾向である。中国陶磁は点数が少なく点在する。瀬戸美濃は1点のみだが建物群の周辺で鉄釉天目茶碗が1点出土している。

個別出土遺物の様相では、まず中国陶磁では大宰府分類I-5-b類（II b類）、I-2～4類の龍泉窯系青磁碗が出土しており、これに大宰府分類IV～VI類の白磁碗が加わるのが古い時期の組成の特徴と考えられる。一方大宰府分類IV類や上田分類D-II類などの龍泉窯系青磁碗、大宰府分類VII・IX類などの白磁碗、森田分類D群の白磁皿などで構成されるのが新しい時期の組成の特徴と考えられる。これらの様相は他の調査地の傾向とそう大差ないものと考えられる。ただしB地区では1点だけだが大宰府分類IV類に属する龍泉窯系青磁香炉が出土している。なお瀬戸美濃は灰釉平底碗が1点、鉄釉天目茶碗が1点、瓦質土器では風炉の小破片が1点みられるに過ぎない。このうち鉄釉天目茶碗については、B③地区中央の掘立柱建物の周辺で出土している。

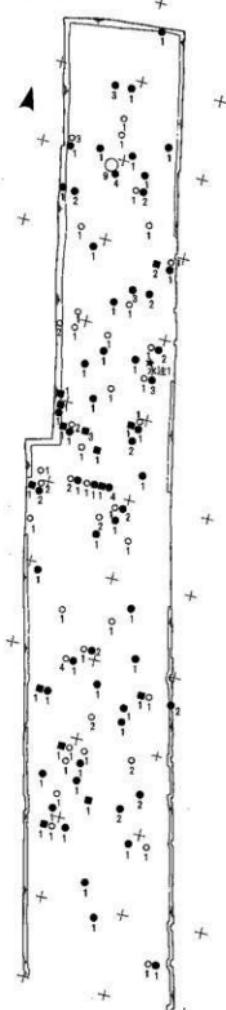
遺構検出状況



土師器皿



珠洲



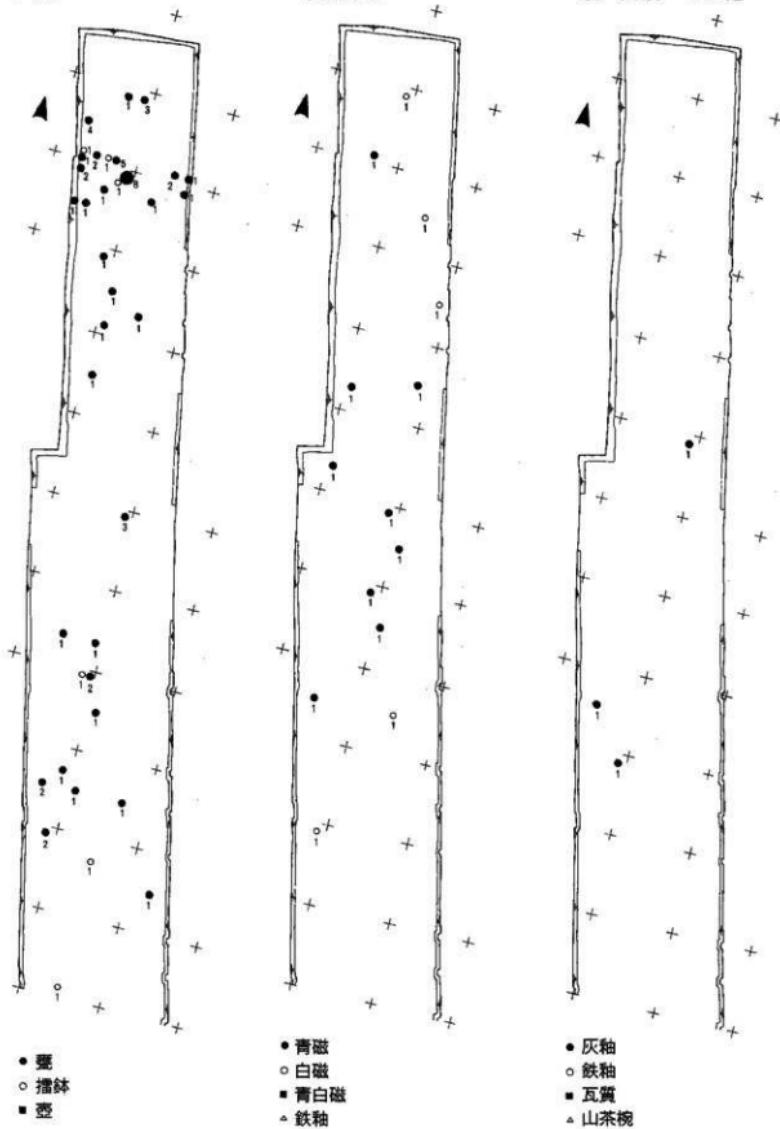
■ 摺鉢
● 1~5 ○ 1~5
● 6~10 ○ 6~10
● 11~15 ■ 1~5
● 16~ ■ 1~5

第12図 中名VI遺跡A地区出土遺物分布図（1）

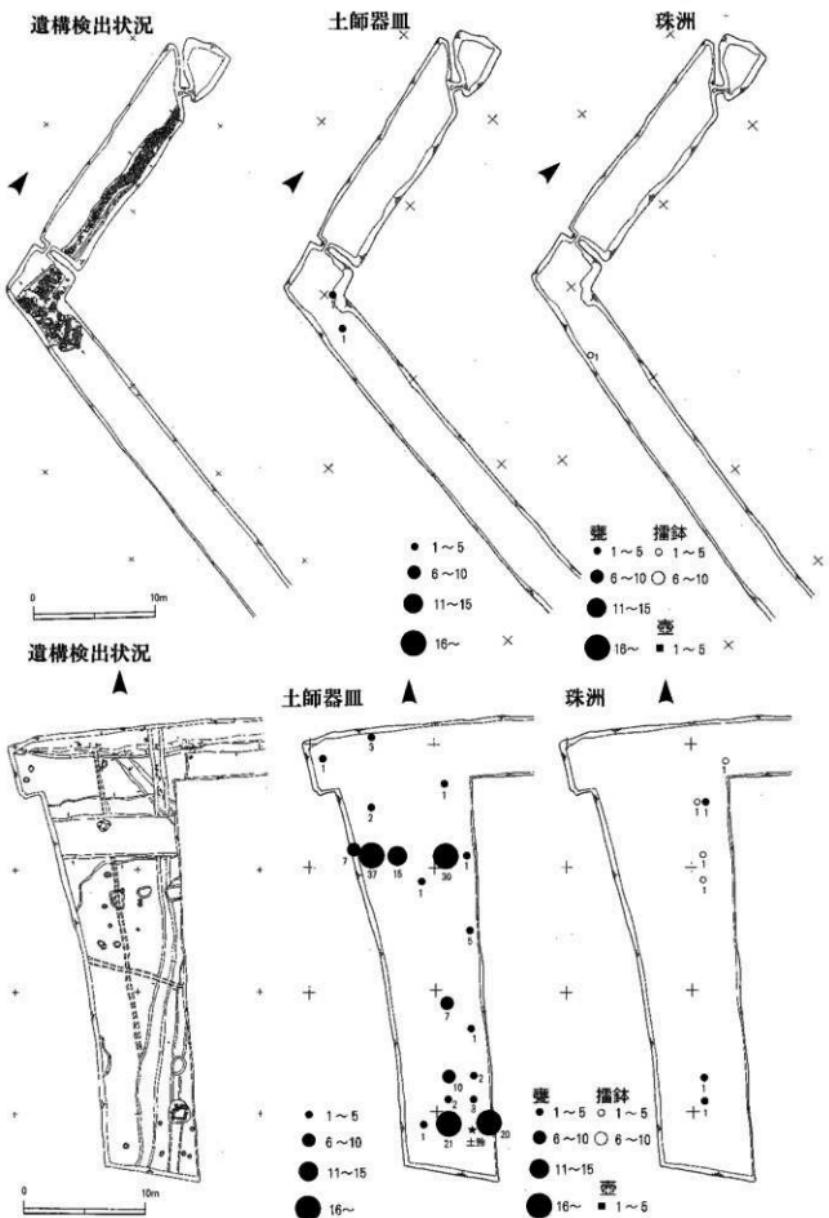
八尾

中国陶磁

瀬戸美濃・その他

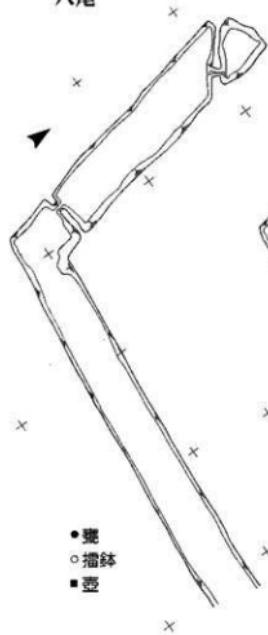


第13図 中名VI遺跡A地区出土遺物分布図（2）



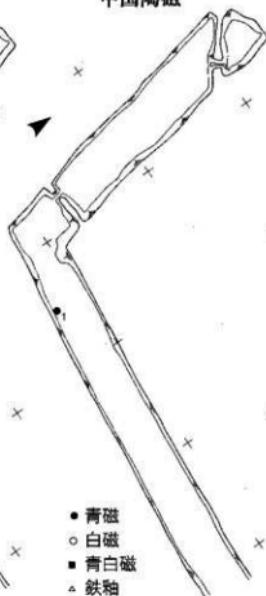
第14図 中名VI遺跡B①地区・C地区出土遺物分布図（1）

八尾



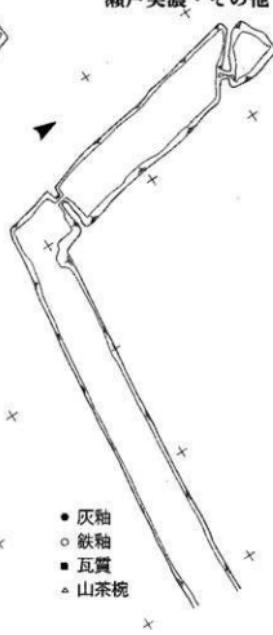
- 青磁
- 白磁
- 青白磁
- △ 鉄釉
- 壺
- 滴鉢

中国陶磁



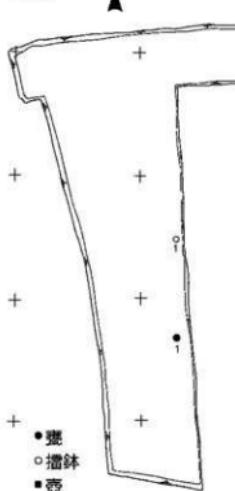
- 青磁
- 白磁
- 青白磁
- △ 鉄釉

瀬戸美濃・その他



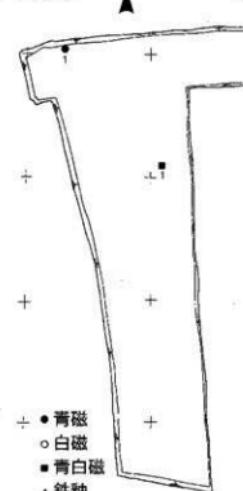
- 灰釉
- 鉄釉
- 瓦質
- △ 山茶椀

八尾



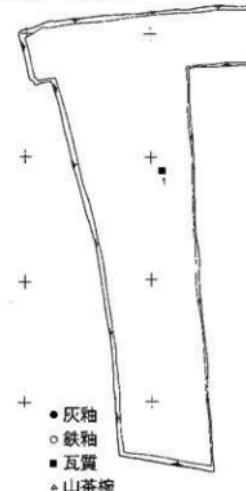
- 青磁
- 白磁
- 青白磁
- △ 鉄釉
- 壺
- 滴鉢

中国陶磁



- 青磁
- 白磁
- 青白磁
- △ 鉄釉

瀬戸美濃・その他

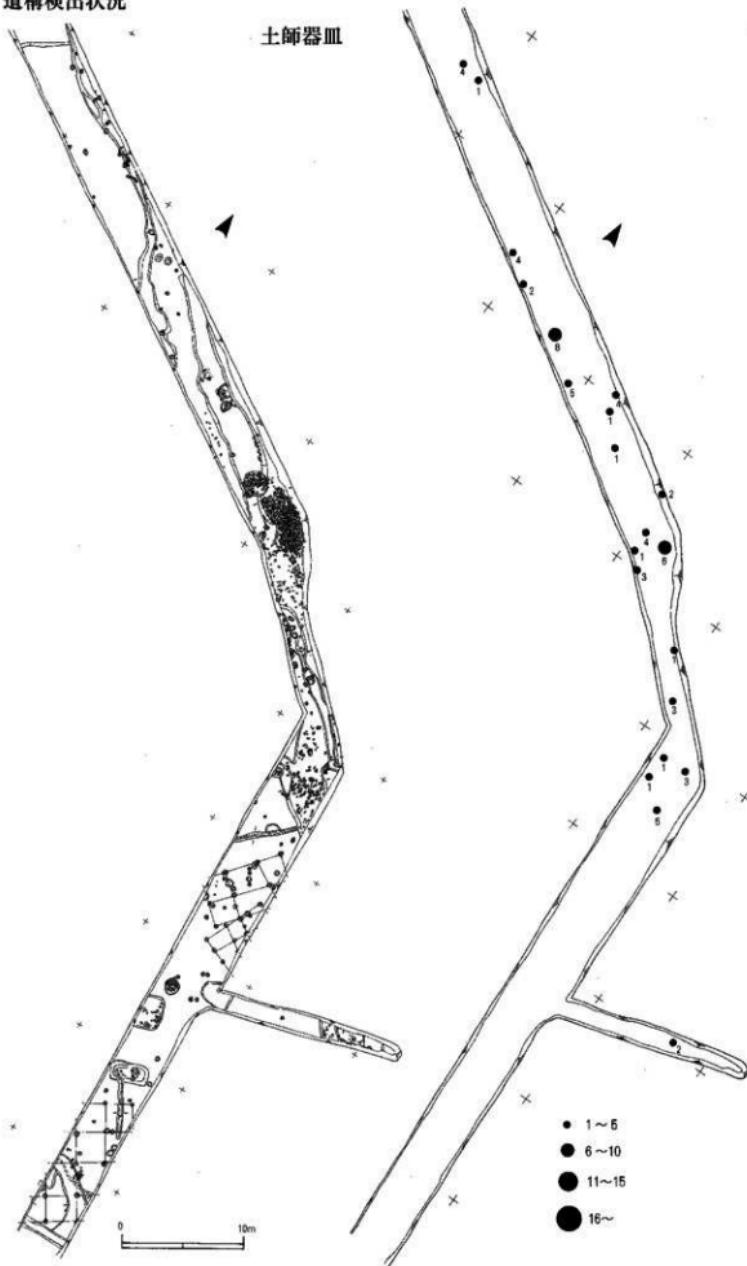


- 灰釉
- 鉄釉
- 瓦質
- △ 山茶椀

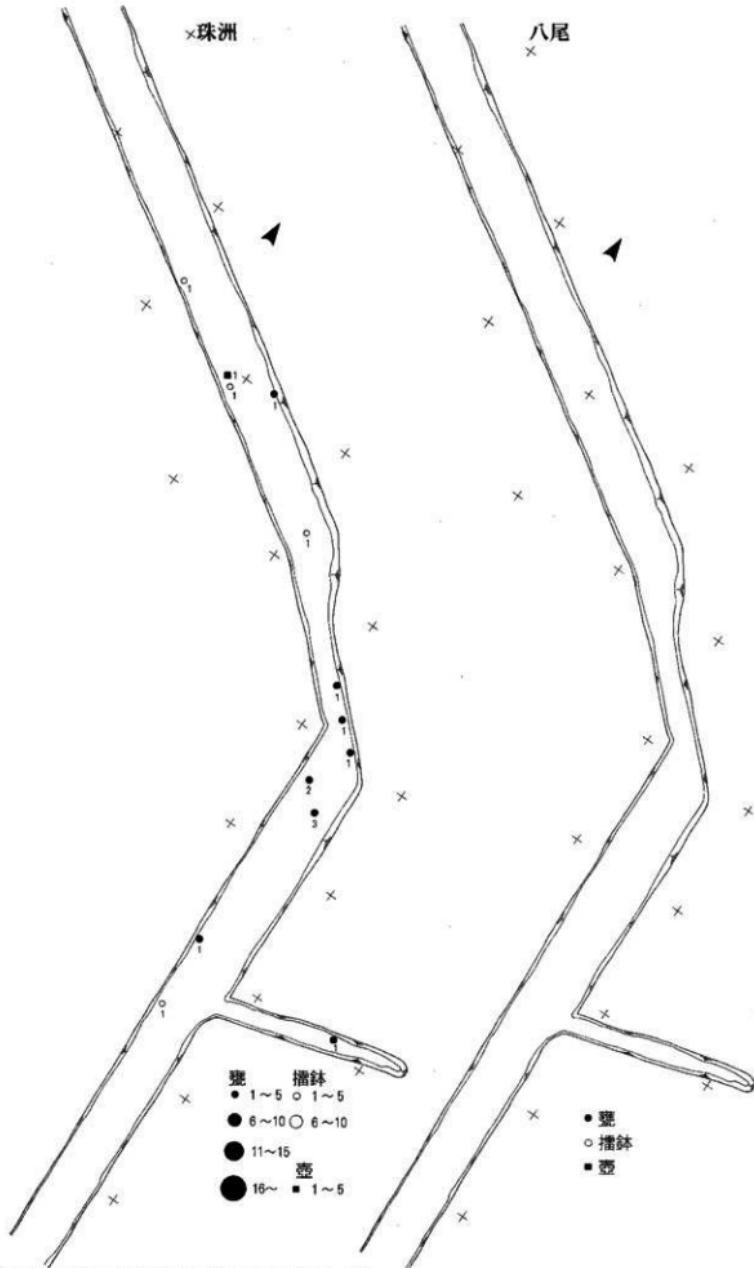
第15図 中名VI遺跡B①地区・C地区出土遺物分布図（2）

遺構検出状況

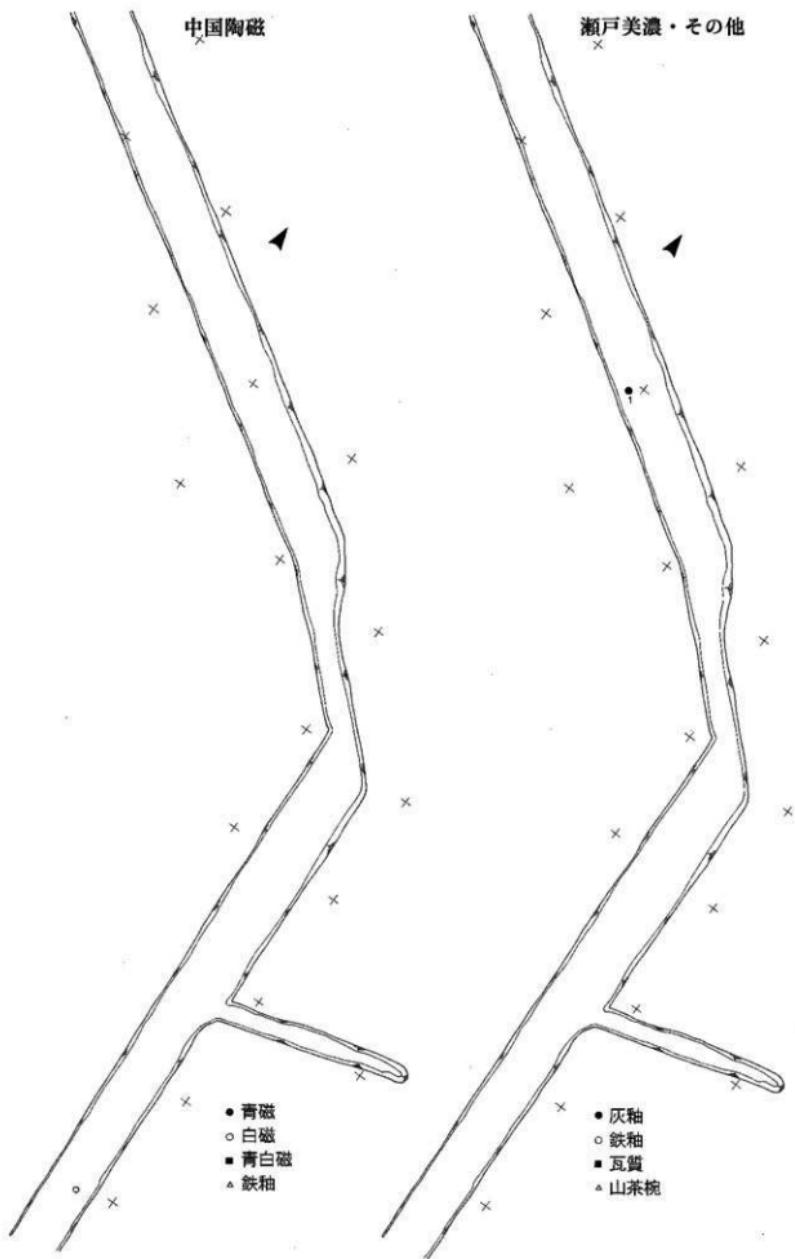
土師器皿



第16図 中名VI遺跡B②地区出土遺物分布図（1）

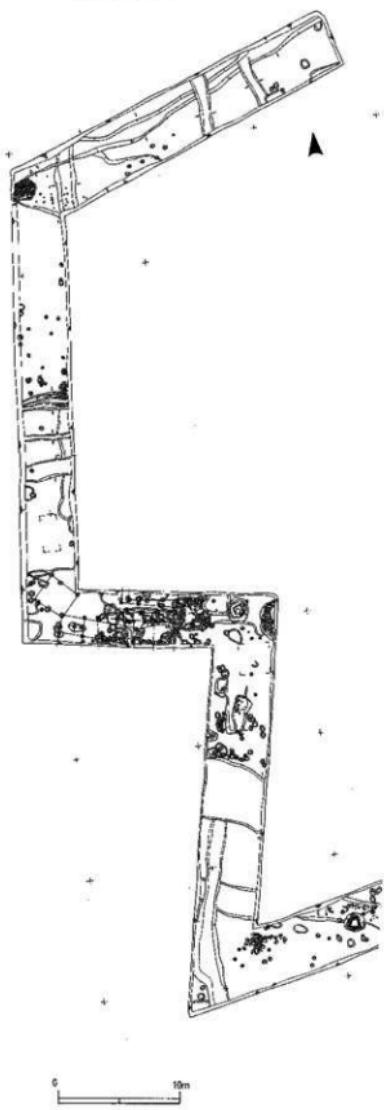


第17図 中名VI遺跡B②地区出土遺物分布図（2）

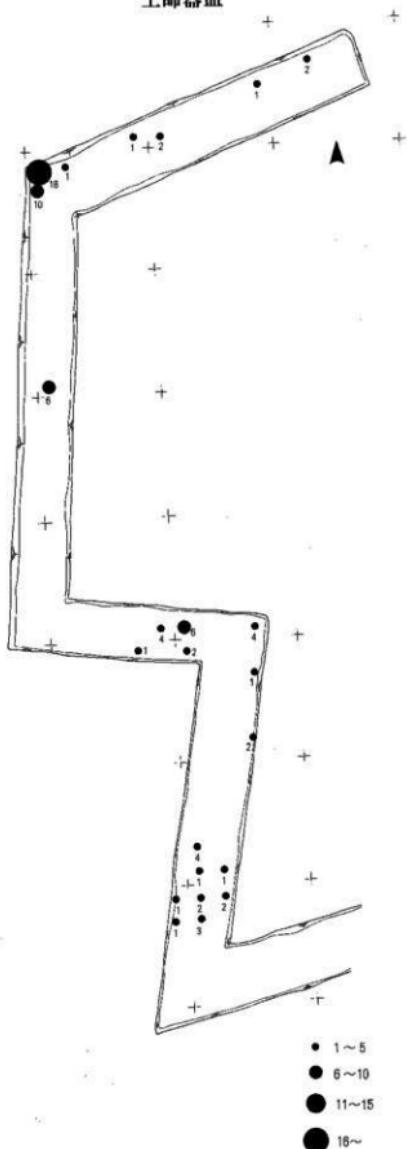


第18図 中名VI遺跡B②地区出土遺物分布図（3）

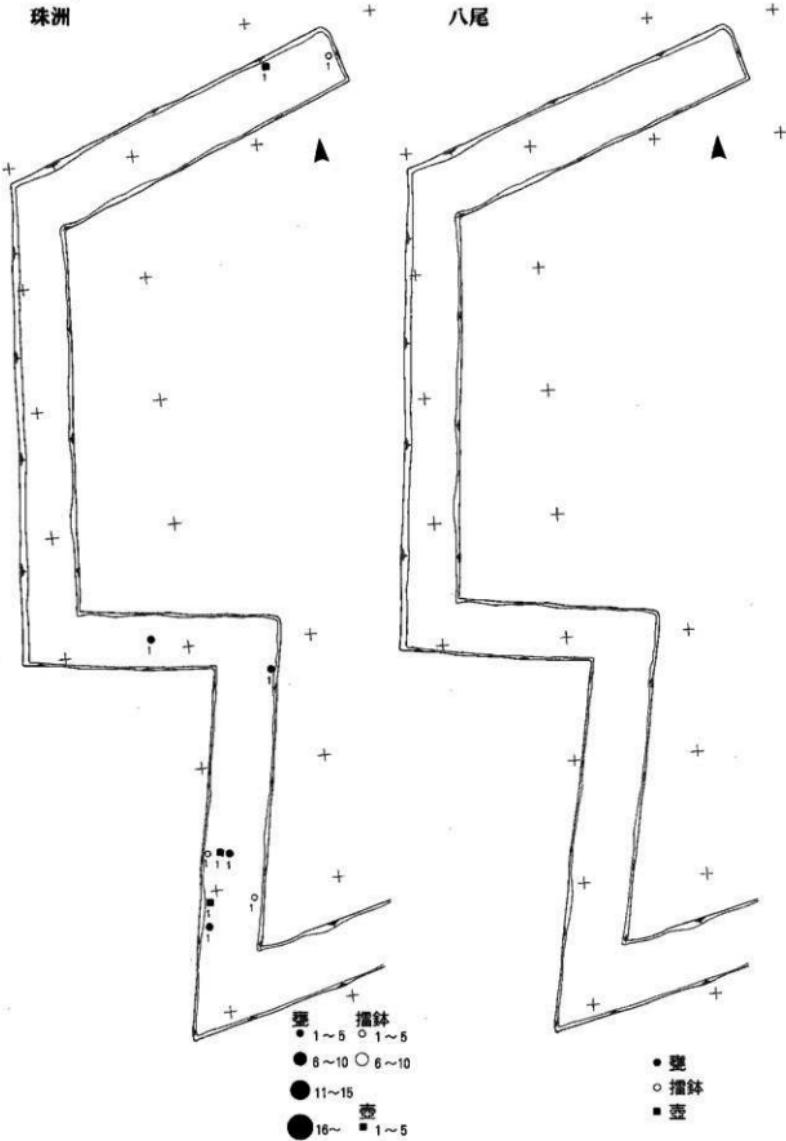
遺構検出状況



土師器皿



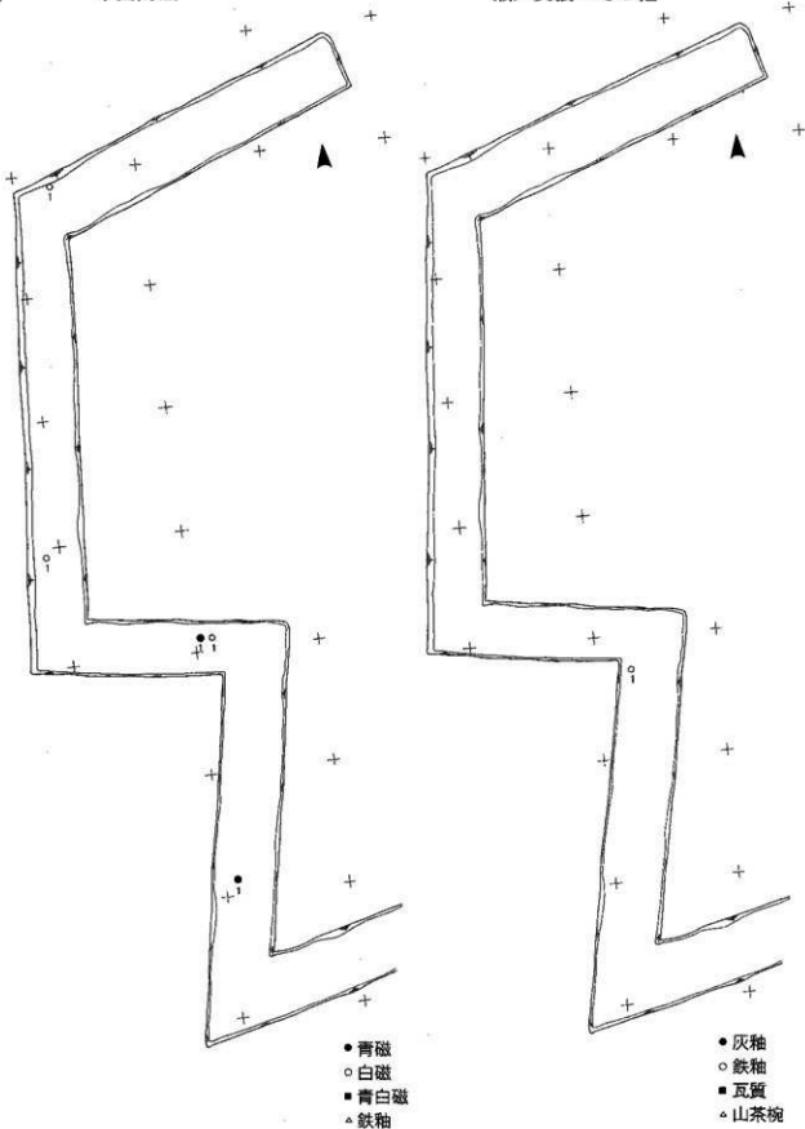
第19図 中名VI遺跡B(3)地区出土遺物分布図（1）



第20図 中名V遺跡B(3)地区出土遺物分布図（2）

中国陶磁

瀬戸美濃・その他



第21図 中名VI遺跡B③地区出土遺物分布図（3）

(5) 中名VI遺跡C地区

中名VI遺跡C地区は、中名VI遺跡B②地区と③地区との間で南側に拡張した長方形の調査地のことを指す。検出遺構には土坑、溝などがあるが掘立柱建物は検出されていない。

カウントした土器・陶磁器の総数は、C地区全体では300点ちょうどである。内訳は、土師器皿273点(91%)、珠洲17点(5.7%)、八尾3点(1%)、中国陶磁3点(1%)、瀬戸美濃1点(0.3%)、瓦質土器1点(0.3%)、その他2点(0.7%)となる。とくに土師器皿の組成が9割を超えており、珠洲その他は10%未満と組成比率が低いことに特徴がある。逆に土師器皿の高比率は、中名V遺跡F2・F3地区に近い様相を示している。

遺物の出土分布の様相では、土師器皿は北側のSD23付近と、調査区の南端付近の二ヵ所にまとまる傾向があり、珠洲も同様である。八尾、中国陶磁、瓦質土器は点数が少なく傾向を看取するに至らない。

個別の出土遺物では、中国陶磁には大宰府分類I-5-b類の龍泉窯系青磁碗、大宰府分類IX類の白磁皿および青白磁の合子などがあるが、点数は少ない。瀬戸美濃も灰釉鉢皿1点(藤澤編年古瀬戸後IV期)がみられる程度である。

4. まとめ

以上中名V・VI遺跡各調査地区の土器・陶磁器組成について、組成比率、出土分布の状況、個別出土遺物の特徴、の3点から分析を加えてきた。その結果各調査地間において共通する様相、異なる様相両者がみられることが明らかとなった。これらの点を以下に箇条書きしてまとめておきたい。

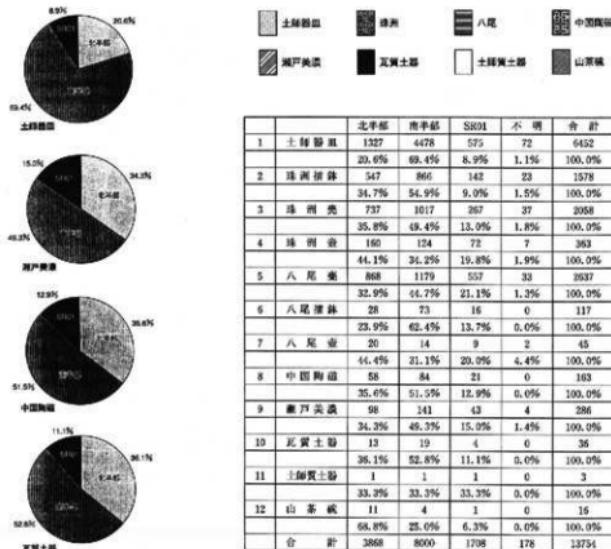
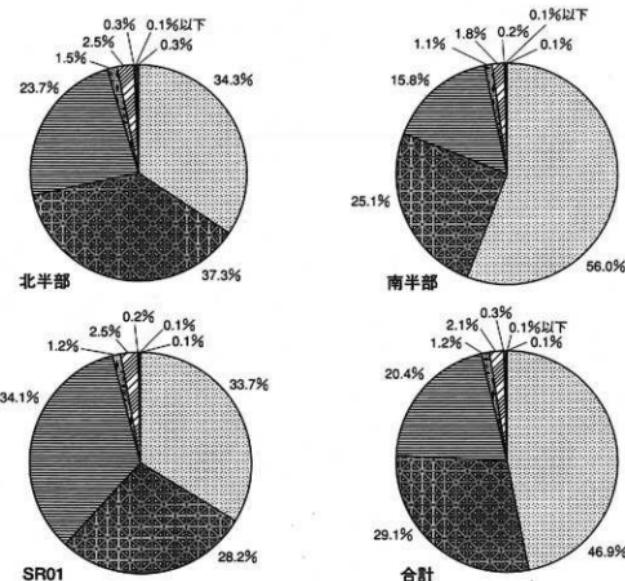
(1) 中名V遺跡F1②地区は、後述のF2・F3地区に隣接しており検出遺構も多いが、土器・陶磁器組成では土師器皿が8割を超え、これに珠洲、八尾が定量伴う。このうち土師器皿は掘立柱建物周辺に集中出土する傾向がみられる。これに対し珠洲、八尾は土師器皿よりもやや外縁側で出土するものが多くみられ、出土分布に若干の様相差がみられる。

(2) 中名V遺跡F2・F3地区は、調査面積が狭い割に総数860点と今回カウントした遺物数では最も多い。土器・陶磁器組成では土師器皿70.1%、珠洲23%、八尾1.7%、中国陶磁2.3%、瀬戸美濃1.7%、瓦質土器0.9%、瓦質羽釜0.1%と概ねF1地区と同様の組成比率であるが、サンプル数も多く組成比率も安定しており、今回の調査地の中では中名VI遺跡A地区と並び良好な分析資料となっている。

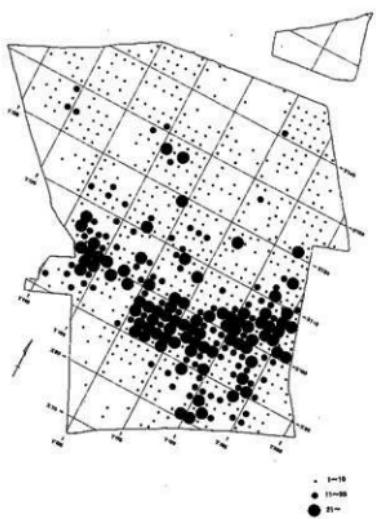
土師器皿の分布では、やはり掘立柱建物の周辺に集中しており、土師器皿使用形態の一端を示すものと考えられる。これに比べ珠洲は建物からやや離れて周辺に散在する様相はF1②地区と共通する。

(3) 中名VI遺跡A地区ではサンプル資料の総数は732点と、中名V遺跡F2・F3地区と比べると、調査面積が大きい割には遺物の出土点数は少ない。内訳は、土師器皿54.2%、珠洲30.7%、八尾10%、中国陶磁4%、瀬戸美濃1.1%で、中名V遺跡F地区に比べると、土師器皿の比率が20~25%ほど低く、逆に珠洲の比率が約倍に、八尾が4倍に増加している。このことから中名V遺跡F2・F3地区に比べると、日常の生活や生業に使用したと考えられる焼物に比重が高い点が、中名VI遺跡A地区的ひとつ特徴であると言うことができる。また土師器皿の分布状況では、やはり建物群の周辺に集中する傾向と同時に南側の旧河道内に使用済みの土師器皿の一部を破棄している状況が窺える。また建物の構成棟数が多いわりには、土器・陶磁器の組成内容が単純で器種にあまり幅が認められない。

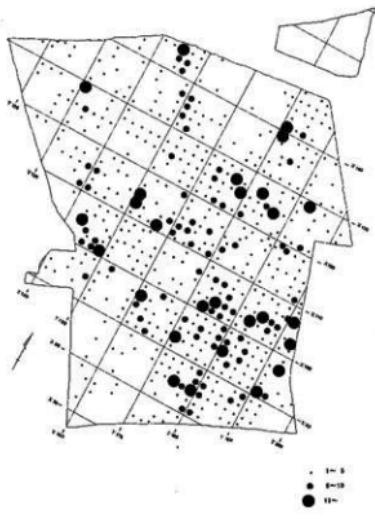
(4) 中名VI遺跡C地区では、カウントした土器・陶磁器の総数は300点ちょうどで、調査面積に比べ遺物量は多い。とくに土師器皿の組成が9割を超えており、珠洲その他は10%未満と組成比率が低い。



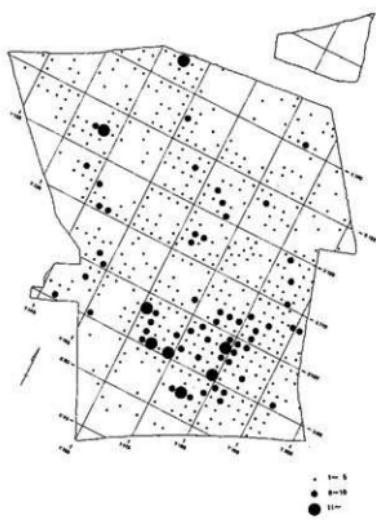
第22図 道場I遺跡の土器・陶磁器組成表



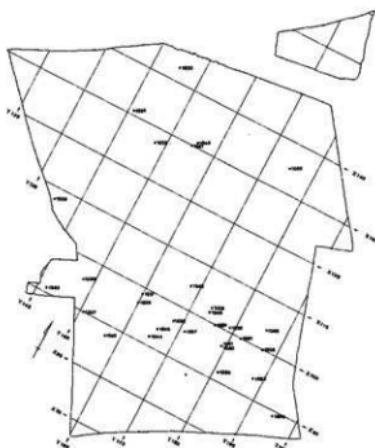
土師器皿の出土分布図



珠洲要の出土分布図



珠洲攢鉢の出土分布図



八足壇鉢の出土分布図

第23図 道場I遺跡の出土遺物分布図

ことに特徴がある。

今回報告した中名V・VI遺跡の様相をまとめるなら、以上のようになるが、最後に昨年度に刊行した道場I・II遺跡の土器・陶磁器組成との比較を若干行っておきたい。この道場I遺跡は中名V・VI遺跡の西側に隣接しており、平成10・11年度の調査では13世紀から15世紀に至る大小の区画を伴う屋敷地や、旧河道に面した荷揚げ場、貯蔵施設と考えられる大型の半地下式石組み建物などがみつかっており、中世莊園を構成する物流拠点遺跡として位置づけている。報告書中では本書とほぼ同様の分析方法をもちいて土器・陶磁器組成を検討しており、当遺跡の分析資料との比較が容易である。道場I遺跡の組成の特徴は第22図の通りで、分析は、屋敷地区画と建物規模の大きい調査地南半部、屋敷地区画が小さく建物規模も小さい北半部、および旧河道SR01内からの3カ所に分割して行っている。このなかでカウントした破片総数は13,754点である。まず全体組成では土師器皿6,452点(47.0%)、珠洲3,999点(29.1%)、八尾2,799点(20.4%)、中国陶磁163点(1.2%)、瀬戸美濃施釉陶器286点(2.1%)、瓦器・瓦質土器36点(0.3%)、土師質土器3点(0.1%未満)となる。つぎに北半部、南半部、SR01の組成では、まず北半部では土師器皿1,327点(34.3%)、珠洲1,440点(37.3%)、八尾916点(23.7%)、中国陶磁58点(1.5%)、瀬戸美濃98点(2.5%)、瓦質土器13点(0.3%)、土師質土器1点(0.1%未満)となる。南半部では土師器皿4,476点(56.0%)、珠洲2,007点(25.1%)、八尾1,266点(15.8%)、中国陶磁84点(1.1%)、瀬戸美濃141点(1.8%)、瓦質土器19点(0.2%)、土師質土器1点(0.1%未満)となる。最後に旧河道SR01では土師器皿575点(33.7%)、珠洲481点(28.2%)、八尾582点(34.1%)、中国陶磁21点(1.2%)、瀬戸美濃43点(2.5%)、瓦質土器4点(0.2%)、土師質土器1点(0.1%未満)、全体:土師器皿6,452点(47.0%)、珠洲3,672点(29.1%)、八尾2,799点(20.4%)、中国陶磁163点(1.2%)、瀬戸美濃286点(2.1%)、瓦質土器36点(0.3%)、土師質土器3点(0.1%未満)となる。以上の様相を概観すると、道場I遺跡の場合珠洲、八尾の比率がかなり高く、相対的に土師器皿の比率の低い点が特徴的である。とくに土師器皿は大型建物が多く当遺跡の中核となる南半部でもせいぜいわずかに過半数を超える(56%)程度である。しかしこれに出土遺物の分布様相を加味して検討すると、やや様相が異なることに気づく(第23図)。とくに土師器皿の分布については南半部でも大型建物の群在する付近を中心に東西にベルト状に密集するように出土しており、中名V遺跡F地区や中名VI遺跡A地区のように建物群に接してその周辺に集中して出土することが明確である。これに対し珠洲や八尾は同じ南半部でもさらに南側の貯蔵施設と考えられる大型半地下式石組み建物の周辺に集中する様相がみられ、とくに珠洲擂鉢にその傾向が著しくみられる。ただ全体に珠洲や八尾などの貯蔵・調理用の焼物が多い傾向は明白で、これが道場I遺跡のひとつの組成上の特徴となっている点は否定できない。また中国陶磁、瀬戸美濃、瓦質土器など遠隔地流通の陶磁器類も、中名V・VI遺跡に比べると、はるかに豊富な内容を有している。以上からも道場I遺跡と中名V・VI遺跡の組成では、一部に類似する様相もみられるが、大方においてかなりの相違がみられるのも事実である。その背景に、遺跡の性格や成因、遺跡の担う機能などが密接に介在していることは、想像に難くないであろう。

但し、本小論ではとりたてて結論を出すことを急ぐわけではない。むしろ今後とも同様の視点・手法をもって広く他遺跡でも土器・陶磁器組成の分析を実施していく必要性を強調しておく。そのような手順を経て、はじめて富山県における中世遺跡の土器・陶磁器組成の一端なりともが明らかになるものと考えている。

(引用参考文献)

- ・中世土器研究会編「概説中世の土器・陶磁器」真陽社 1955
- ・森降「富山県の中世土器（資料編）」（財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所『紀要』第6号）2003
- ・横出豊次郎・森田勉「人宰府出土の輸入中国陶磁器について」（『九州歴史資料館研究論集』4）1978
- ・山本信夫他「大宰府条坊跡II」（『太宰府町の文化財』第7集）太宰府市教育委員会1983
- ・山本信夫「中世前期の貿易陶磁器－その分析視点－」（『原遺跡七郎丸1地区・口寺田遺跡』国東町教育委員会 1999
- ・森田勉「14～16世纪の白磁の型式分類と編年」（『貿易陶磁研究』NO2）1982
- ・上田秀夫「14～16世纪の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』NO2）1982
- ・藤澤良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」（『東洋陶磁』第8号）1982
- ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群II－古瀬戸後期様式の編年－」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X）1991
- ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群III－瀬戸前期様式の編年－」（『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3編）1995
- ・藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」（『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10編）2002
- ・菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集）1989
- ・八尾町教育委員会「富山県八尾町長山遺跡・京ヶ峰古窯跡緊急調査概要」1985
- ・吉岡康暢「中世須恵器の研究」吉川弘文館 1994
- ・（財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所『道場I・II 遺跡発掘調査報告』2004

4. 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器資料

森 隆

1.はじめに

県営公害防除特別土地改良事業に伴う婦負郡婦中町域の発掘調査では、主に古代～近世に至る時期の遺構・遺物が多くみつかっている。なかでもとくに中世関係の遺構・遺物は質・量とも充実しており注目される。とくに筆者は婦中町域を含む富山平野の中世土器・陶磁器資料について、ここ数年分析を続けており、その一部を「富山県の中世土器（資料編）」としてまとめている。この抽稿のなかでは当時報告書の刊行されていた「清水島II遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡」および「中名I・V遺跡」については紹介したが、その時点で報告書が未刊であった「中名V・VI遺跡」については、一部概要掲載の資料を取り上げた程度に終わっている。そこで今回は前回の不備を補うべく本書で報告された中名V・VI遺跡の中世土器・陶磁器資料を取り上げ検討してみたい。

2. 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器資料

提示した資料は基本的に遺構から出土したものに限定した。遺物では編年研究の扱い所となる土師器皿が主体となるが、これに加えて出土量の多い珠洲や、広域流通品である中国陶磁、瀬戸美濃施釉陶器、瓦質土器などの遺物との共伴関係についても重視した。これは編年と実年代の研究の進展している搬入遺物と、在地土師器皿との共伴関係を検討することにより、土師器皿の型式編年をより深化することができるからであり、同時に当地における土器・陶磁器組成の特色や変遷過程を明らかにしていくためでもある。とくに当地の中世遺跡で普遍的に出土する珠洲や瀬戸美濃施釉陶器は、在地土師器皿編年を進めていくうえで常に重視すべき重要遺物のひとつである。また中国陶磁についても威信材としての性格から伝世期間が考慮されるものの、やはり重要な遺物であることに変化はない。

以上のような観点から概ね13世紀から16世紀前後までの各時期の土器・陶磁器資料について、簡単な資料集成を試みてみた。なお土師器皿の型式分類については抽稿の分類をそのまま使用した。また時期についても同様に抽稿の型式編年の区分をそのまま準用した。また同時に共伴遺物の分類・編年も明らかな場合はあわせて記述した。出土資料は型式的に古いものから新しいものの順に掲載した。
(1) 中名V遺跡D4地区SX03 (0521～0526)：土師器皿のみの構成であるが、土坑墓からの一括出土遺物である。土師器小皿4点、大皿1点で構成される。0523、0526がB2類の他はB1類に分類される。前IV期に比定される。

(2) 中名V遺跡D3地区SD05 (0794～0806)：土師器小皿・大皿、珠洲甕・擂鉢で構成される。土師器皿は0796がB1類、0797がB2類、0794がB3類、0795がB4類、0798・0799がZ1類、0800がZ3類に分類される。珠洲は0804・0806の擂鉢、0802の甕が吉岡編年II期に比定される。土師器皿は前IV～V期の様相を示す。

(3) 中名VI遺跡B地区SD21 (2097～2102)：土師器小皿・大皿、中国陶磁、珠洲で構成される。2097はZ1類、2098・2099はB2類、2100はB3類に分類される。2101は龍泉窯系青磁碗で、内底面に箇書き文様を有する。大宰府分類I-2～4類に比定される。2101は珠洲甕で吉岡編年II期に分類される。土師器皿は前IV～V期の様相を示す。

(4) 中名VI遺跡B地区SD28 (2067～2085)：土師器小皿・大皿、珠洲擂鉢で構成される。2074がA2類、2067・2077・2078・2082・2083がB1類、2075・2076がB3類、2070がB4類、2072・2073がZ1類、

2069がZ2類、2079・2080がZ4類、2068はZ5類、2081がZ6類に分類される。珠洲擂鉢は吉岡編年のⅢ期に比定される。土師器皿は概ね前VI～VII期の様相を示す。

(5)中名V遺跡D1地区SD07 (0533～0554)：土師器皿・大皿、中国陶磁、珠洲、八尾、瀬戸美濃の構成である。土師器皿のうち0533は回転台成形のK類の皿。0540～0546はB1類、0539はB2類、0534～0537はB4類、0538はZ1類に分類される。中国陶磁では0547が龍泉窯系青磁碗のI-5-B類に、0548がI-2～3類に比定される。0547は白磁四耳壺の破片。0552の珠洲擂鉢は吉岡編年Ⅱ期に比定される。瀬戸美濃の卸皿と縁釉小皿は藤澤編年後Ⅱ期に比定される。共伴遺物の時期にはらつきはあるが、土師器皿は概ね前VI～VII期の様相を示す。

(6)中名V遺跡A1地区SD12 (0167～0175)：土師器皿、中国陶磁、珠洲、八尾の構成である。土師器皿のうち0170はB1類、0168はB2類、0169はB4類、0167はZ1類に分類される。0172は、大宰府分類でI類に相当する同安窯系青磁である。土師器皿は概ね前VI～VII期の様相を示す。

(7)中名V遺跡A1地区SD19 (0178～0186)：土師器皿、中国陶磁、珠洲、八尾の構成である。土師器皿は0182がA1類、0180・0181がA2類、0179がA3類に分類される。0178は大宰府分類のI-5-b類の龍泉窯系青磁碗である。0183の珠洲擂鉢は吉岡編年Ⅱ期に比定される。他八尾の壺底部が2点、珠洲甕の底部1点が出土している。土師器皿は概ね前VI～VII期の様相を示す。

(8)中名V遺跡D1地区SD01a群 (0557～0574)：後述の(14)と同一遺構であるが、出土地点・層位が異なる。土師器皿、中国陶磁、珠洲で構成される。土師器皿は0563がB1類、0564がB3類、0562・0566がB4類、0561がB5類、0558～0560がZ1類、0567がZ5類、0569がZ6類、0570が回転台成形のK類に分類される。中国陶磁は0565が大宰府分類IX-1類の白磁の皿、0557がI～II類の龍泉窯系青磁碗の破片である。珠洲は0571～0573の擂鉢が吉岡編年Ⅱ期に、0574の甕がⅢ期にそれぞれ比定される。土師器皿はややばらつきがあるが、概ね前VI～VII期を中心とする。

(9)中名VI遺跡C地区SE03 (2156～2158)：土師器皿3点の構成である。2157・2158がB1類、2156がB2類に分類される。これらの土師器皿は概ね前V～VI期の様相を示す。

(10)中名V遺跡F3地区SK01 (1394～1397)：土師器皿、珠洲で構成される。土師器皿は1394がA2類、1395がB2類に分類される。珠洲擂鉢2点のうち1396は吉岡編年IV-1期に比定される。土師器皿は前VI～VII期の様相を示す。

(11)中名VI遺跡A地区SE02 (1807～1813)：土師器皿、中国陶磁、八尾の構成である。土師器皿は1811がA2類、1807～1809・1812がB4類に分類される。1813は大宰府分類I-2～4類の龍泉窯系青磁碗。1810は八尾甕の口縁部である。土師器皿は1811が古相を示すが、他は単一型式で構成される。概ね前VII～VIII期に比定できる。

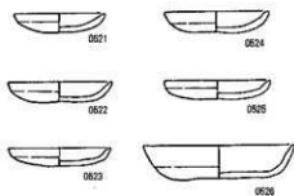
(12)中名V遺跡F3地区SD02 (1479・1480)：土師器皿2点を挙げておく。1479はB1類に、1480はZ2類に分類される。前VII期に比定される。

(13)中名V遺跡F3地区SP23 (1474・1475)：土師器皿2点を挙げておく。1474・1475ともB1類に分類される。前VII～VIII期の様相を示す。

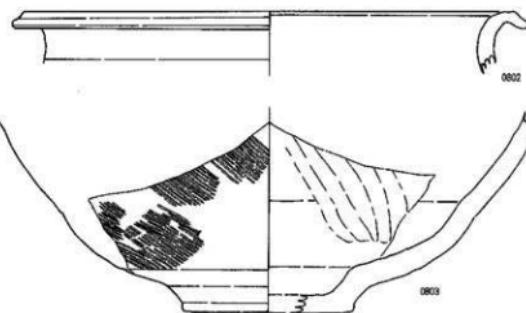
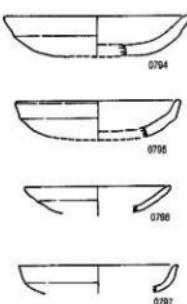
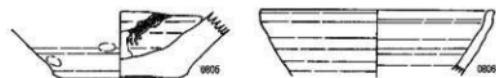
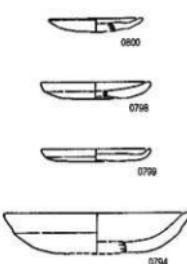
(14)中名V遺跡D1地区SD01b群 (0527～0532)：前述の(8)と同一遺構であるが、出土地点・層位が異なる。土師器皿のみの構成である。0528・0530がB1類、0532がB2類、0531がC1類、0527・0529がZ5類に分類される。土師器皿は概ね前VII～VIII期の様相を示す。

(15)中名V遺跡F3地区SK33 (1435～1442)：土師器皿と瓦質土器の構成である。土師器皿は1436～1439がB1類、1440・1441がB2類、1435がZ5類に分類される。瓦質土器は風炉の口縁部破片である。

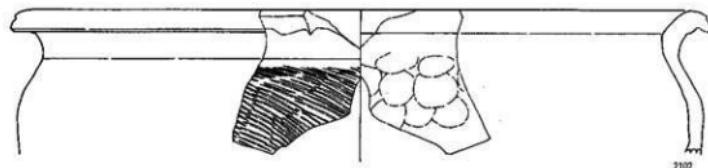
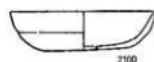
中名 V 遺跡 D 4 地区 SD02 (521~526)



中名 V 遺跡 D 3 地区 SD05 (874~889)

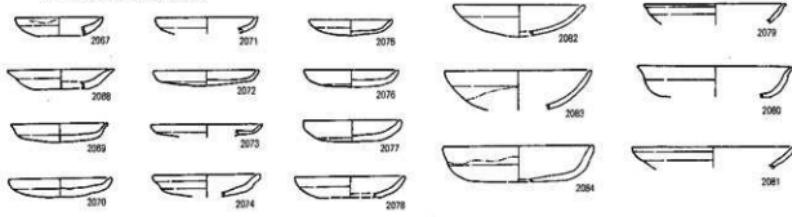


中名 V 遺跡 B 地区 SD21 (2097~2102)

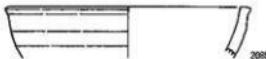


第1図 中名 V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器資料（1）

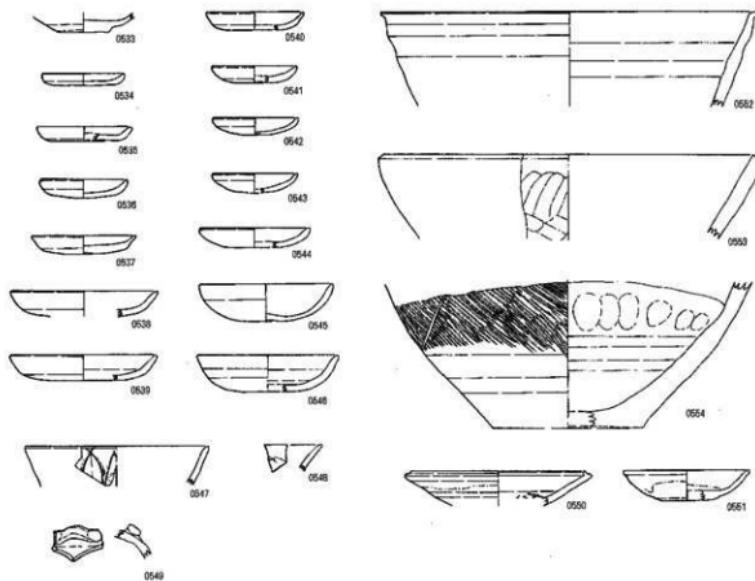
中名V遺跡B地区 SD25 (2067~2085)



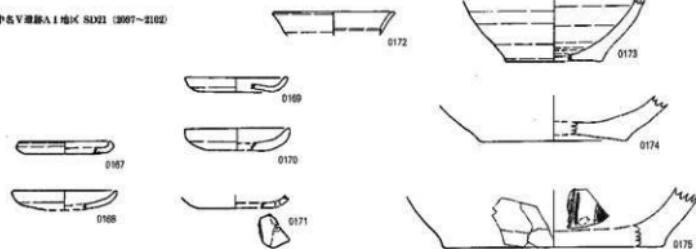
0 10 20cm



中名V遺跡D1地区 SD07 (0533~0554)

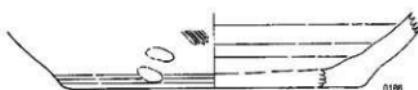
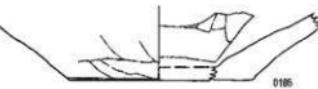
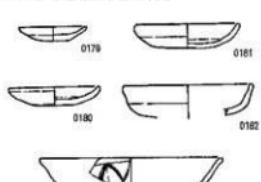


中名V遺跡A1地区 SD21 (2097~2102)



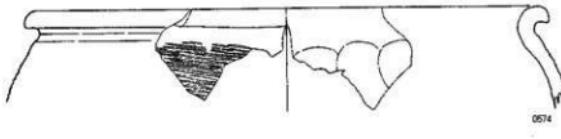
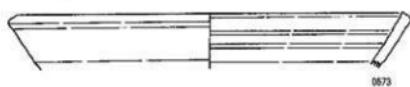
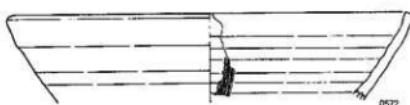
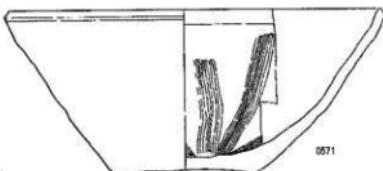
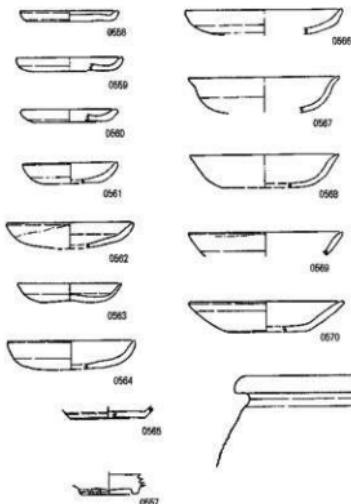
第2図 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器資料（2）

中名V遺跡A1地区 SD19 (0179~0186)

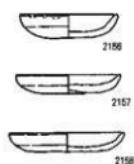


0 10 20cm

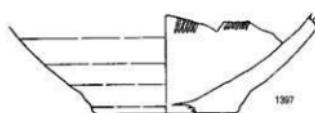
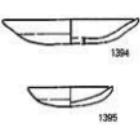
中名V遺跡D1地区 SD20a (0567~0574)



中名V遺跡C1地区
SD20 (2156~2158)

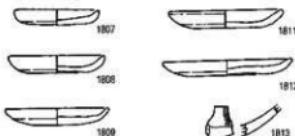


中名V遺跡F3地区
SK01 (1394~1397)

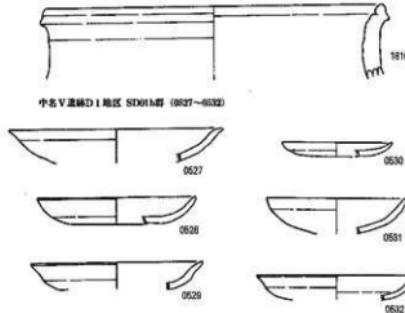


第3図 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器資料（3）

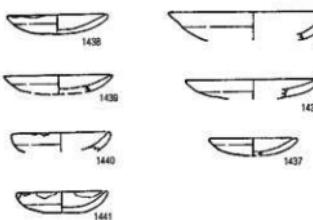
中名V遺跡A地区 SD02 (1407~1413)



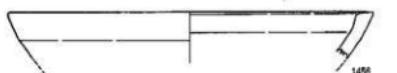
中名V遺跡D1地区 SD01b群 (0527~0532)



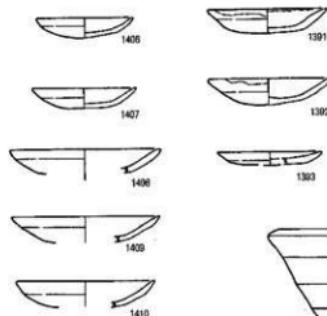
中名V遺跡F3地区 SK33 (1435~1442)



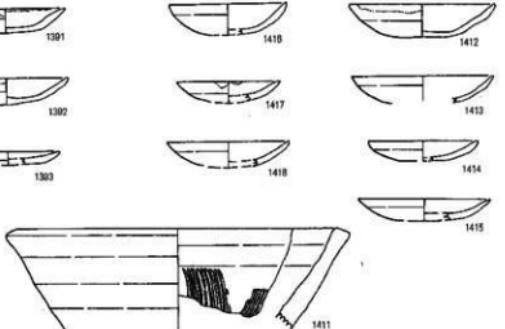
中名V遺跡F3地区 SK35 (1451~1456)



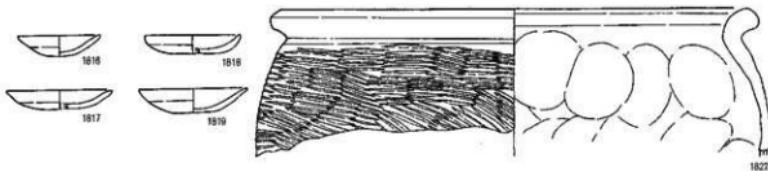
中名V遺跡F3地区 SK15 (1406~1411)
SK04 (1391~1395)



中名V遺跡F3地区 SK20 (1412~1415)

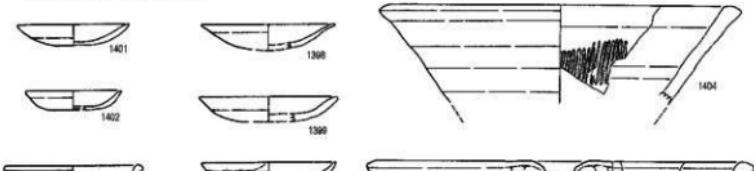


中名VI遺跡A地区 SK135 (1814~1819)

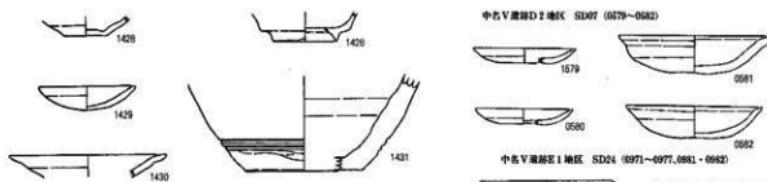


第4図 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器資料 (4)

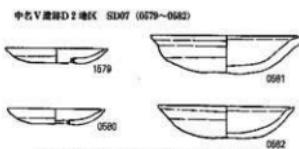
中名V遺跡F3地区 NK05 (1388~1405)



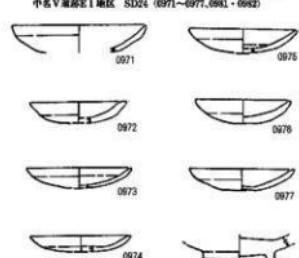
中名V遺跡F3地区 SK26 (1428~1430~1431)



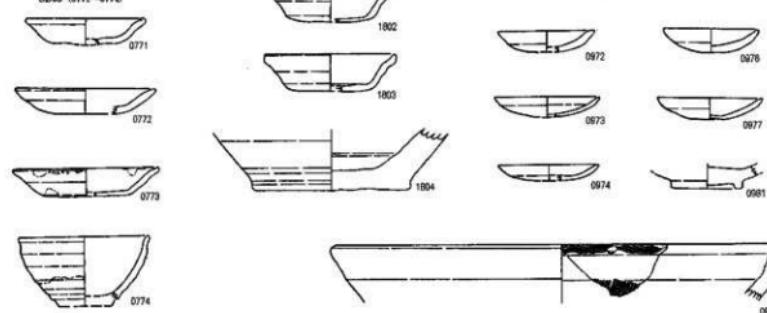
中名V遺跡D2地区 SD07 (0579~0582)



中名V遺跡E1地区 SD24 (0971~0977, 0981~0982)

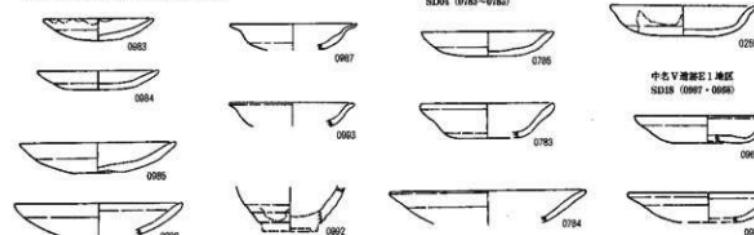


中名V遺跡A地区 SK01 (1802~1804)



中名V遺跡B5地区 SD02 (055~057)

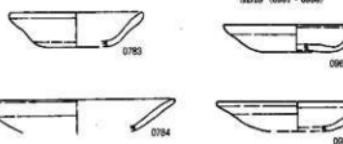
中名V遺跡E1地区 SD25 (0963~0967~0993)



中名V遺跡D3地区 SD04 (0793~0795)



中名V遺跡E1地区 SD18 (0967~0968)



第5図 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器資料（5）

土師器皿はやや時期幅があるが、概ね前IX期～後I期を中心とする。

(16) 中名V遺跡F3地区SK85（1454～1456）：土師器皿、珠洲の構成である。土師器皿は1455がB1類、1454がC2類に分類される。珠洲は擂鉢の口縁部破片で、吉岡編年V期に比定される。土師器皿は概ね前IX期～後I期の様相を示す。

(17) 中名V遺跡F3地区SK20（1412～1418）：土師器皿のみの構成である。1415・1417・1418はB1類に、1412・1413・1416はC2類に、1414はC3類に分類される。これらの土師器皿はややばらつきはあるが、概ね前IX期～後I期の様相を示す。

(18) 中名V遺跡F3地区SE04（1391～1393）：土師器皿3点の構成である。1393はB1類に、1392はC3類に、1391はZ5類に分類される。前IX期～後I期の様相を示す。

(19) 中名V遺跡F3地区SK15（1406～1411）：土師器皿のみの構成である。全てB1類の型式に分類される。前IX期～後I期の様相を示す。

(20) 中名VI遺跡A地区SK135（1816～1818）：土師器皿、珠洲で構成される。土師器皿は1818が型式的に古相を、他は新相を呈するが、分類は全てB1類である。珠洲は甕で、吉岡編年IV-2期に比定される。土師器皿は1818を除き、後I～II期と考えておく。

(21) 中名V遺跡D2地区SD07（0579～0582）：後世の混入が見られるため、同時期と考えられる土師器皿4点のみを挙げておく。0579・0580はB1類、0581はC4類、0582はC5類に比定される。後I～II期の様相を示す。

(22) 中名VI遺跡A地区SE01（1802～1804）：土師器皿と珠洲擂鉢で構成される。土師器皿は2点ともD1類に分類される。後II期に比定される。

(23) 中名V遺跡D3地区SD03（0771～0774）：土師器皿、瀬戸美濃で構成される。土師器皿は0771・0773がD1類、0772がD2類に分類される。瀬戸美濃は鉄釉天目茶碗で、藤澤古瀬戸後IV期新に比定される。土師器皿は後II～III期の様相を示す。

(24) 中名V遺跡F3地区SK26（1426・1428～1431）：土師器皿、中国陶磁、八尾で構成される。土師器皿は、1429がB1類、1428がへそ皿横倣のC6a類、1430がZ11類に分類される。中国陶磁は大宰府分類III-1類に分類される龍泉窯系青磁杯である。土師器の型式にはばらつきがあるが、後I～III期の様相を示す。

(25) 中名V遺跡F3地区SK05（1398～1405）：土師器皿、瀬戸美濃、珠洲で構成される。土師器皿は、1399～1402がB1類に、1398がZ9類に分類される。瀬戸美濃は灰釉袴形香炉で、藤澤編年古瀬戸後II期に比定される。珠洲は1404・1405とも擂鉢で、吉岡編年IV-3期に比定される。土師器皿は、概ね後I～II期の様相を示す。

(26) 中名V遺跡E1地区SD24（0971～0977・0981・0982）：土師器皿、珠洲で構成される。土師器皿は0973～0977がB1類、0971がC2類、0972がZ9類に分類される。中国陶磁は大宰府分類I～II類の龍泉窯系青磁碗である。珠洲は擂鉢で、吉岡編年V期に比定される。土師器皿は、概ね後I～II期の様相を示す。

(27) 中名V遺跡B5地区SD02（0253～0257）：土師器皿、越前の構成である。土師器皿は0253・0254がB1類、0255がZ9類、0256がZ11類に分類される。これに伴う越前は擂鉢の底部が出土する。土師器皿は概ね後I～III期の様相を示す。

(28) 中名V遺跡D3地区SD04（0783～0785）：土師器皿3点を挙げておく。0785はB1類に、0783はD2類に、0784はZ10類に分類される。概ね後I～III期の様相を示す。

(29)中名V遺跡E1地区SD18 (0967・0968)：本例は良好な資料とはいえないが、とくに後IV期以降は良好な資料に乏しい。ここでは土師器皿2点を挙げておく。0967はD1類に、0968はZ10類に分類される。後IV～VI期の様相を示す。

(30)中名V遺跡E1地区SD25 (0983～0987・0992・0993)：土師器皿、瀬戸美濃の構成である。土師器皿は0983がB1類、0987がZ1類、0984～0986がZ5類に分類される。瀬戸美濃は0992の鉄軸天日茶碗が藤澤編年の古瀬戸後IV期新に、0993の灰釉端反皿が藤澤編年の大窯I期にそれぞれ比定される。土師器皿は概ね後II～IV期の様相を示す。

(31)中名V遺跡B5地区SX01 (0258・0259)：数は少ないが、2点の土師器皿を挙げておく。0258はK類で、該期では少ない回転台成形の土師器皿である。0259はD3類に分類される。これらの土師器皿は後III期に比定される。

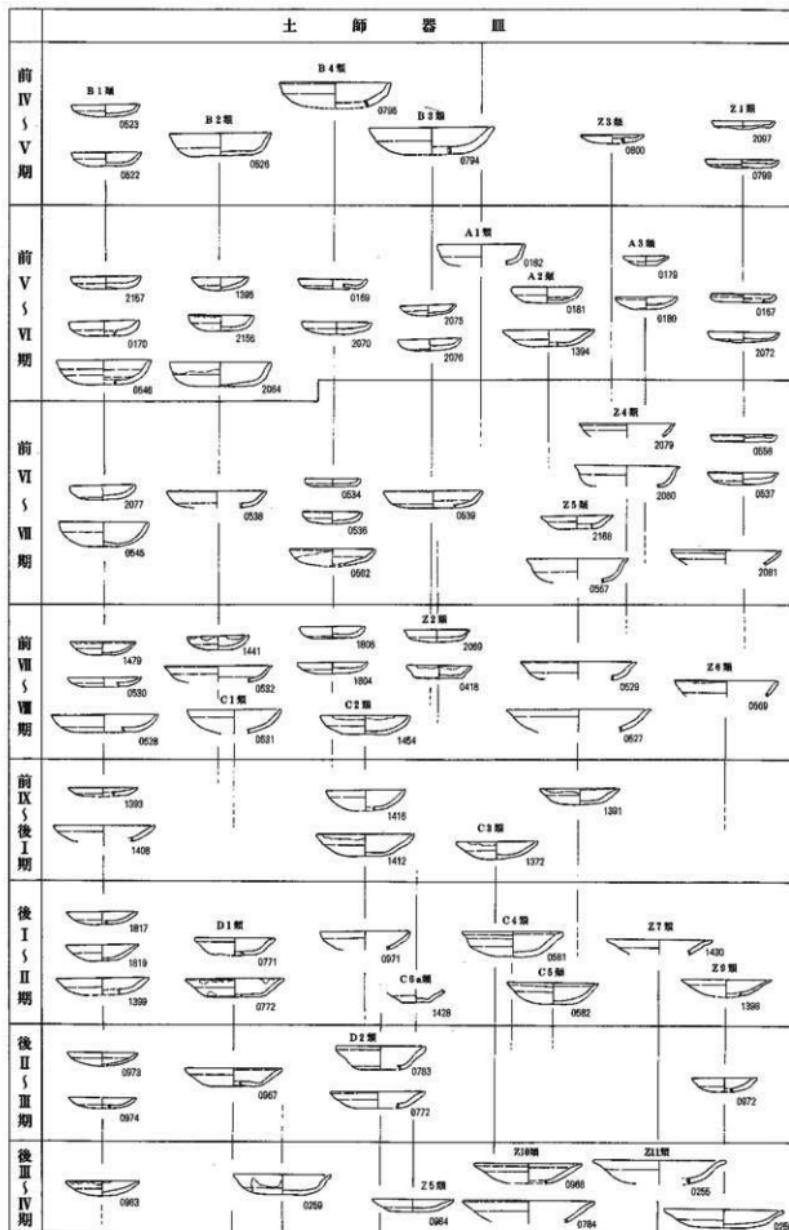
3. 中名V・VI遺跡における中世土器・陶磁器の変遷

以上中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器資料のうち、遺構出土のもので比較的まとまりのある資料を中心に簡単な紹介を試みた。その結果土器・陶磁器組成の内容を良好に示す資料は少ないものの、概ね13世紀初頃から15世紀代にいたる土器・陶磁器資料が本遺跡から継続的に出土していることは明示できたと思う。これに別論でまとめた中名V・VI遺跡の中世土器・陶磁器組成の成果を組み合わせれば、本遺跡における、概ねの土器・陶磁器の変遷が把握できることと思う。そこで今回提示した資料を中心に、簡単な土器・陶磁器の変遷表を作成したので、あわせて参照頂ければ幸いである（第6図）。

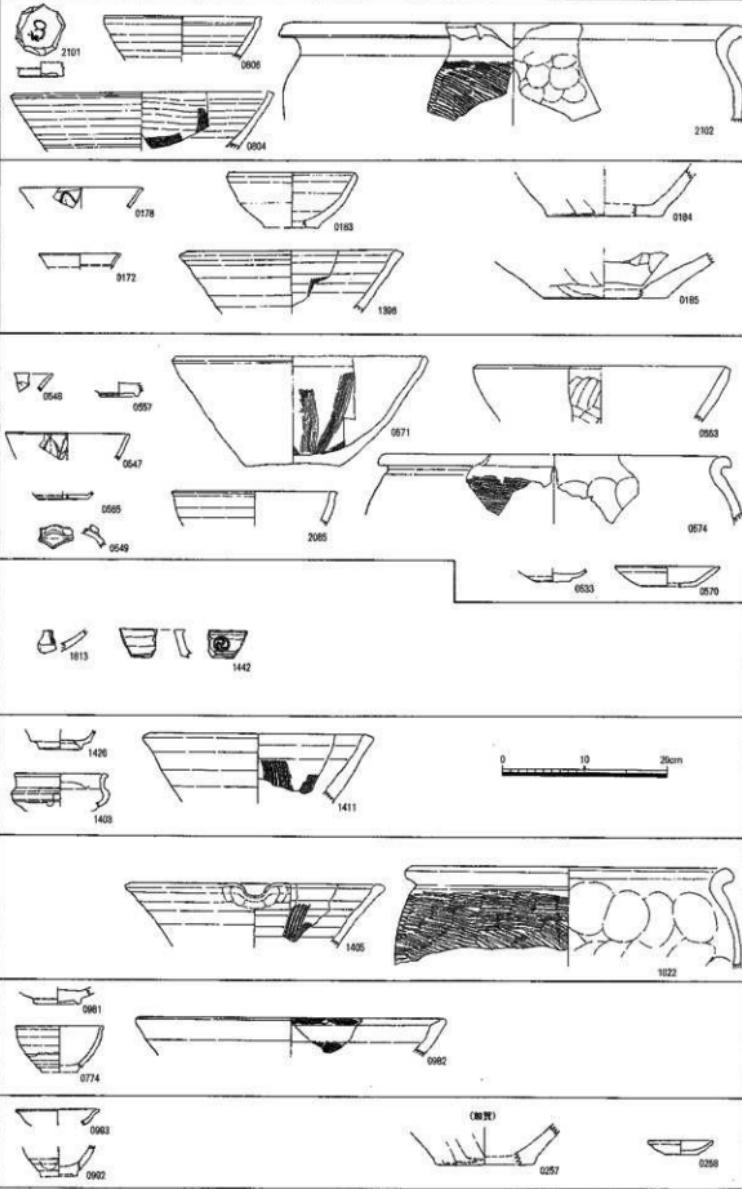
この変遷表の主体となるのは、やはり土師器皿であろう。土師器皿は13世紀初頭前後に考えている前IV期の製品がみられるが、それ以前のものは少ない。とくに京都系の器形・技法を比較的忠実に再現しているA類や、古代後半から続く回転台成形の土師器皿（柱状高台等）の出土は少なく、在地型のB類主体に、これにZ型が加わる組成である。また道場I遺跡で多量にみられたC類が、本遺跡では少ない傾向にある。とくにへそ皿模倣であるC6類の出上はかなり少ない。後I期以降はB類に加えてD類が徐々に多くなるが、後III期以降の資料はあまり多くない。同時に遺構への近世遺物の混入がめだつようになり、両者の分離が困難なものが多くなるのも、良好な資料に乏しい一因となっている。

その他の共伴遺物では、中国陶磁、瀬戸美濃、瓦質土器、珠洲、八尾、越前などがある。このなかで最も中国陶磁では、龍泉窯系青磁を中心に中世の古い時期から新しい時期まで継続的に出土している。特に外面に大きな蓮弁を有する大率府分類I-5-b類（新分類ではII-b類）が多く目につく。新しい時期ではIV類以降の製品が多い。白磁や青白磁は、今回提示した資料中にはあまり含まれていないが、青磁ほどではないが定量の出土が継続的にみられる。また建窯産と考えられる鉄軸天日茶碗の出土もみられる。瀬戸美濃施釉陶器は、少なくとも当遺跡の様相では藤澤編年の古瀬戸後I期以降の製品が主体的で、大窯I期までの製品がみられる。瓦質土器はそれほど多くなく、風炉などの器種がわずかに出土する。ただしF地区で畿内産と考えられる瓦質羽釜が出土している点は注目される。煮沸・貯蔵・調理器では、珠洲が吉岡編年II期以降V期まで継続的に出土している。八尾も定量出土するが、遺構出土の良好な資料に欠けている。越前はごく微量の出上がみられる。

以上ごく簡単に中名V・VI遺跡の土器・陶磁器の変遷を概観した。とくに本報告書の刊行をもって公害防除特別土地改良事業に伴う婦中町域の発掘調査報告書は全て刊行したことになる。今回は時間の制約もあり、中名V・VI遺跡の資料のみを取り上げたが、これらの報告書がすべて出揃った現在、



第6図 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器変遷図



今一度鍋中町域の発掘調査成果を振り返りながら、これらの遺跡調査で出土した中世土器・陶磁器を総括・検討したいものと考えている。

引用・参考文献

- ・財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『清水島II遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡発掘 調査報告』2002
- ・財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『中名I・V遺跡発掘調査報告書』2003
- ・財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『道場I・II遺跡発掘調査報告書』2004
- ・財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『中名V・VI遺跡発掘調査報告書』2005
- ・森隆「富山県の中世土器（資料編）」（財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『紀要』 第6号）2003
- ・横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」（『九州歴史資料館研究論集』4）1978
- ・山本信夫他「大宰府条坊跡II」（『太宰府町の文化財』第7集）太宰府市教育委員会1983
- ・山本信夫「中世前期の貿易陶磁器—その分析視点—」（『原遺跡七郎丸1地区・口寺田遺跡』国東町教育委員会1999
- ・森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」（『貿易陶磁研究』NO2）1982
- ・上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』NO2）1982
- ・藤澤良祐「古瀬戸巾刷様式の成立過程」（『東洋陶磁』第8号）1982
- ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年—」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X）1991
- ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群III—古瀬戸前期様式の編年—」（『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯）1995
- ・藤澤良祐「瀬戸・美濃大京編年の再検討」（『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯）2002
- ・菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集）1989
- ・吉岡康惣『中世須恵器の研究』吉川弘文館 平成6年
- ・中世土器研究会編「概説中世の土器・陶磁器」真陽社 1965

5. 中名遺跡群における古環境復元

中村 光仁

1. はじめに

中名遺跡群は婦負郡端中町に所在する古代から中世を中心に営まれた集落遺跡である。中名遺跡群は富山平野を流れる神通川と井田川によって形成された複合扇状地上に立地し、標高は20m前後を測る。遺跡群の西には0.8kmほど離れて井田川が北流し、さらに3.5km先には奥羽丘陵が北東に延びている。また、南には5.0kmほど離れて奥羽丘陵から連なる丘陵が延びている。このような立地のなかで、南北0.7km、東西1.0kmの範囲に中名I遺跡、中名II遺跡、中名V遺跡、中名VI遺跡、道場I遺跡、道場II遺跡、持田I遺跡、清水島II遺跡が分布し、さながら一つの大集落を形成している。小論でいう中名遺跡群とはこれらの遺跡を総称して用いているが、これらの遺跡からは土器や陶磁器類などの考古学的な遺物の他に種実遺体や昆虫遺体・骨などの自然遺物も多数検出されている。特に種実遺体や花粉分析など自然科学的分析により、まとまったデータが蓄積されている。小論ではこれら植物遺体に関連する既存のデータから、古代から近世にいたる遺跡周辺の植生や栽培植物などを中心に古環境の復元を試みる。

2. 各遺跡の資料

ここでは、各遺跡から検出された植物遺体のうち、葉・種子・果実などの大型植物遺体と花粉化石、樹種といったように植物体の部位の違い、分析方法の違いによって分けて記述する。そして、最後に個々のデータをまとめて遺跡全体の植生や農耕について考えてみる。樹種については木材の選材や利用面について述べる。なお、植物珪酸体については必要に応じてその都度述べることとする。

①中名I遺跡^{①)}

大型植物遺体（葉・種子・果実など）については、木本でカヤ・クマシデ属・コナラ近似種・ウラジロガシ近似種・ブナ・ケヤキ・クリ・ヤマグワ・サクラ属・ウメ・スモモ・モモ・キイチゴ属・サンショウ・トチノキ・トチノキ近似種・ブドウ属・イタヤカエデ類・カキ・グミ属・エゴノキの21分類群、草本でイネ・アワヒエ・キビ・オオムギ・コムギ・カヤツリグサ科・ホタルイ属・イボクサ・カナムグラ・アサ・タデ属・サナエタデ近似種・ソバ・アザ科・アオツヅラフジ・マメ類・エノキグサ・エゴマ・ナス近似種・ウリ科・メロン類・ヒヨウタン類・オナモミ属・メナモミ属の24分類群、合計45分類群が検出されている。これらの種実や葉から推定される植生については、古代では良好な資料がなく不明だが、中世では自然流路であるSD2172から木本のカヤ・クマシデ属・コナラ近似種・ウラジロガシ近似種・ブナ・ケヤキ・トチノキ近似種・イタヤカエデ類の葉がラミナ状に検出されている。また、オニグルミ・クリ・ハンノキ属・トチノキ・エゴノキ属などの種実遺体が遺構内覆土から検出されている。草本ではゴミ捨て場と推定されているSK1104から、ホタルイ属・イボクサなどの溝や水田などに生育する水湿地性植物に加え、カナムグラ・アザ科・エノキグサ・オナモミ属・メナモミ属などの日当たりの良いやや乾燥した場所に生育する陸性植物もみられる。これらのことから、中名I遺跡周辺ないしは少なくともSD2172の上流には、中世の段階までオニグルミ・ハンノキ・クマシデ属・クリ・コナラ近似種・ウラジロガシ近似種・ブナ・ケヤキ・トチノキ近似種・イタヤカエデ類を中心とする自然度の高い森林が分布していたと推定される。遺跡内では木本は少なく、自然流路沿いにはオニグルミ・ハンノキ属・トチノキなどの樹木が孤立木程度に生育していたとみられる。日当たりの良い開けた場所には草本であるカナムグラ・アザ科・エノキグサ・オナモミ属・メナモ

ミ属が繁茂し、溝などにはホタルイ属やイボクサが生育していたと推定される。栽培植物については、古代ではモモ・ヒョウタン類が確認されている。中世の時期になるとモモ・ウメ・カキといった果樹に加え、主食となるイネ・アワーヒエ・キビ・オオムギ・コムギ・ソバの他にアサ・マメ類・エゴマ・ナス近似種・メロン類・ヒョウタン類など多様な分類群がみられる。これらは現地で栽培されていたものか、流通によってもたらされたものなのかは今回の資料からは判断できないものの、これらの栽培植物を中名I遺跡で利用されていたとみなされよう。

次に花粉化石については木本でモミ属・ツガ属・トウヒ属・マツ属（不明）・コウヤマキ属・スギ属・クリミ属・カバノキ属・ハンノキ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・クリ属・ニレ属一ケヤキ属・モチノキ属・カエデ属・トチノキ属・ブドウ属・ノブドウ属・グミ属・ウコギ科・ミズキ属・トネリコ属の23分類群、草本でイネ科・カヤツリグサ科・サナエタデ節一ウナギツカミ節・カラマツソウ属・アブラナ科・ツリフネソウ属・アリノトウグサ属・オミナエシ属・ヨモギ属・キク亜科・タンボボ亜科の11分類群、合計34分類群である。花粉分析試料は中世の自然流路であるSD2172から1点のみである。草本花粉に比べ樹木花粉が種数・個数とともに多い。樹木花粉については針葉樹のスギが最も多く、次にマツ属が続く。次にカバノキ属・ハンノキ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属が続く。他に風媒花であるモミ属・ツガ属・トウヒ属やクリミ属・コナラ属アカガシ亜属などもみられる。草本ではイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属がやや低率ではあるが出現している。また、カラマツソウ属・アブラナ科・アリノトウグサ属・キク亜科・タンボボ亜科なども検出されている。これらのことから、遺跡周辺にはカバノキ属・ハンノキ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属を中心とする落葉広葉樹林が分布し、林内にはスギやマツ属も生育していたと考えられる。遺跡内には乾燥地に生育するようなアブラナ科・アリノトウグサ属・ヨモギ属・キク亜科・タンボボ亜科などが繁茂していたと考えられる。

以上のことと総括すると、遺跡周辺の植生については古代では、良好な資料が無いため不明であるが、次の中世の段階についてはウラジロガシなどの常緑樹広葉樹を交えたブナ・クマシデ属・トチノキなどの自然度の高い落葉広葉樹林が存在していたと考えられる。このことは、中世以前の古代についても同様な植生が想定される。遺跡内の植生については草本が卓越し、乾燥地に生育するカナムグラ・アカザ科・エノキグサ・オナモミ属・メナモミ属が分布していたと考えられる。また、栽培植物で主食となるものはイネ以外にアワーヒエ・キビ・オオムギ・コムギ・ソバなどの多様な穀物類が検出されていることから、米食を中心とした食生活だけではなく、その他の穀物類もかなりの比重を占めていたと考えられる。また、アサ・マメ類・エゴマ・ナス近似種・メロン類・ヒョウタン類などの畑作作物やモモ・ウメ・カキなどの果樹も併せて食用にされていたと考えられる。また、ゴミ捨て場であるSK1104からは栽培植物以外に、クリ・ヤマグワ・サクラ属・スマモ・キイチゴ属・サンショウ・トチノキ・ブドウ属といった食用となる分類群が検出されていることから、これらの種実類も積極的に利用されていたと考えられる。

樹種についてはスギ・ヒノキ・ブナ・ケヤキの4分類群が検出されている。ブナ・ケヤキは漆器に、スギ・ヒノキは曲物や下駄に利用されている。

②中名II遺跡^{註2)}

大型植物遺体については、木本でコナラ属コナラ亜属・クリ・モモ・サンショウ・トチノキの5分類群、草本でイネ・オオムギ・マメ類の3分類群、合計8分類群が検出されている。中世の溝である

SD2251からはコナラ属コナラ亜属・クリ・トチノキが検出されており、トチノキは完形の種子が得られている。また、SD136からはサンショウがみられることから、遺跡周辺ないしは遺跡内には落葉広葉樹であるコナラ属コナラ亜属やトチノキ・サンショウが生育していたと考えられる。栽培植物にはモモ・イネ・オオムギが検出されている。イネ・オオムギは主食となり、モモは果樹として利用されていたと考えられる。

③中名V遺跡²³⁾

大型植物遺体については、木本でモミ属・スギ属・ヒノキ・ヒノキ科・サワグルミ・オニグルミ・クマシデ・アカシデ・クマシデ属・カバノキ属一ハンノキ属・カバノキ属一ヤシャブシ亜属・クリ・ブナ・ケヤキ・コブシ・ヤマグワ・カジノキ属・マタタビ属・モモ・サクラ属・キイチゴ属・サンショウ・サンショウ属・アカメガシワ・ドクツツギ・クマヤナギ属・ブドウ属・タラノキ・ウコギ科・ミズキ・クマノミズキ・カキノキ・クサギ・ムラサキシキブ属・エゴノキ属・ニワトコ・ガマズミ属の37分類群、草本でミクリ属・ヘラオモダカ・オモダカ科・イネ・アワーヒエ・エノコログサ属・オオムギ・コムギ・ムギ類・ホタルイ属・ホタルイ属A・ホタルイ属B・カヤツリグサ科・イボクサ・ツユクサ・カナムグラ・アサ・クワ科・サナエタデ近似種・ヤナギタデ近似種・タデ属・ソバ・アカザ科・ヒユ科・ナデシコ科・キケマン属・マメ類・エノキグサ・ツリフネソウ属・アオツヅラフジ・ノブドウ・ブドウ科・スミレ属・ヤブジラミ・セリ科・キランソウ属・メハジキ属・エゴマ・シソ属・イヌコウジュ属・ナス科・スズメウリ・ゴキヅル・メロン類・キカラスウリ・ヒョウタン類・メナモミ属・キク科の47分類群、合計84分類群が検出されている。

これらの種実遺体から想定される植生は、古代についてはD3地区の自然流路SD01から、クマシデ属・カバノキ属一ハンノキ属・ブナ・コブシ・クマヤナギ属・エゴノキ属などの落葉広葉樹を主体とする分類群が検出されている。また、草本についてはミクリ属・ヘラオモダカ・オモダカ科・ホタルイ属A・B・イボクサは溝や水田などの水湿地に生育する水湿地性植物であり、カナムグラ・アカザ科・ヒユ科・ナデシコ科・エノキグサ・スミレ属・イヌコウジュ属・ナス科・メナモミ属・キク科は陸生植物で、おもにやや乾燥した日当たりの良い開けた土地に生える分類群である。さらに、アオツヅラフジ・ノブドウ・ブドウ科・ゴキヅル・キカラスウリなどのつる性植物は森林との境界にあたる林縁に繁茂する分類群である。以上のことから、遺跡周辺や後背地にはクマシデ属・カバノキ属一ハンノキ属・ブナ・コブシ・クマヤナギ属などの落葉広葉樹を中心とする豊かな森林の存在が推定される。また、集落や自然流路沿いの林縁にはつる植物が繁茂し、集落内は日当たりの良い開けた景観で、カナムグラ・アカザ科・ヒユ科・ナデシコ科・エノキグサ・スミレ属・キク科などが繁茂し、自然流路内や集落に巡られた溝にはミクリ属・ヘラオモダカ・ホタルイ属A・B・イボクサが生育していたと考えられる。D2地区のSD07（中名VI遺跡A地区SD02）は古代から中世にかけて遺跡内を北流していた自然流路であるが、この自然流路からはモミ属・ヒノキ・サワグルミ・ブナ・クマヤナギ属・ミズキ・クマノミズキなど多様な落葉広葉樹が検出されている。他に、草本として水湿地性植物のミクリ属・ホタルイ属があり、エノコログサ属・エノキグサ・イヌコウジュ属・ナス科などの陸性植物も見受けられる。これらの結果は、D3地区の古代の自然流路SD01で得られた種実遺体群から想定された自然度の高い落葉広葉樹林の存在と類似している。また、遺跡内は草本が卓越する日当たりの良い開けた景観が広がっていたと考えられる。ただし、自然流路の流れていた時期が古代から中世と存続期間が長く、検出された種実遺体群がすべて同時期のものではないことに注意しなくてはならない。

モミ属とヒノキについては葉や枝条が検出されているのだが、D4地区の中世の溝である、SD20でもモミ属・ヒノキの葉が検出されている。このため、モミ属・ヒノキが遺跡の周囲や堆積地の近隣に生育していたと考えられる。D4地区SD20から検出された木本ではモミ属・ヒノキの他に、スギ・サワグルミ・クマシデ・アカシデ・カバノキ属一ヤシャブシ亜属・クリ・ケヤキ・ヤマグワ・カジノキ属・マタタビ属・ブドウ属・カラスザンショウ・アカメガシワ・タラノキ・ニワトコなどが検出されている。モミ属・ヒノキ・スギ以外の分類群は落葉広葉樹で、自然度の高い落葉広葉樹林を構成していたと考えられる。草本では、水湿地植物のホタルイ属A・B・イボクサの他に、乾燥地に生育する陸生植物のカナムグラ・アカザ科ヒユ科・エノキグサ・スマレ属・イヌコウジュ属・ナス科・メナモミ属が検出されている。遺跡周辺にはサワグルミ・クマシデ・アカシデ・カバノキ属一ヤシャブシ亜属・クリ・ケヤキといった自然度の高い落葉広葉樹林が存在していたと考えられる。また、溝沿いのやや開けた日当たりの良い場所にはカラスザンショウ・アカメガシワ・タラノキ・ニワトコなどの二次林的な分類群が生育し、林縁にはマタタビ属・ブドウ属が繁茂していたと考えられる。遺跡内は日当たりの良い開地で、カナムグラ・アカザ科ヒユ科・エノキグサ・スマレ属・イヌコウジュ属・ナス科・メナモミ属などの陸生植物が繁茂し、溝内や溝沿いなどにはホタルイ属やイボクサなどが生育していたと考えられる。このように中世に至っても豊かな森林が部分的に分布し続けていたものの、中世末から近世の時期になると、落葉広葉樹を中心とした豊かな森林の存在を示す分析結果は得られていない。分析試料が比較的広範囲の種実遺体を含む自然流路ではなく、遺跡内の区画溝といった止水域から得られた種実遺体からかもしれないが、C地区のSD5302の溝からは、木本でスギの種果と種子の他に、オニグルミ・クリ・サンショウ・ニワトコが検出されている。木本ではスギ以外のほとんどの種実類が利用可能な分類群である。スギはおそらく堆積地周辺に生育していたと考えられ、屋敷林として植えられていた可能性が示唆される。草本では土坑からホタルイ属が検出されていることから、周囲の溝などに生育していたと考えられる。

栽培植物については古代ではD2地区のSI01から炭化したイネが検出されている。また、D3地区的SD01からは主食となるイネ・オオムギ・ムギ類がみられ、他にメロン類が検出されている。古代から中世にかけて流れていたD2地区的SD07（中名VI遺跡A地区SD02）からは果樹であるモモの他に、イネ・オオムギ・ムギ類・ソバ・アサ・エゴマ・シソ属・メロン類などが検出されている。中世にはD3地区的溝や井戸からモモ・イネ・アワーヒエ・ムギ類・コムギ・アサ・シソ属・メロン類がみられ、D4地区的SD20やSK83からはモモ・イネ・アワーヒエ・オオムギ・コムギ・ムギ類・アサ・マメ類・エゴマ・メロン類など多彩な栽培植物がみられる。中世末から近世の時期には、C地区ではモモ・カキノキ・イネ・オオムギ・アサ・ヒヨウタン類が、E地区の井戸や溝からはモモ・カキノキの果樹の他に、イネ・アワーヒエ・オオムギ・コムギ・ムギ類・ソバ・アサ・マメ類・メロン類が、A1地区ではモモ・カキ・イネが、D3地区では鍛冶関連遺構のSK31からイネ・オオムギ・コムギ・ムギ類の主食となる分類群がそれぞれ検出されている。このように、各時期において遺跡内の多数の地点から栽培植物が検出されていることは、広く遺跡内で食用にされていたことを示している。

花粉化石については木本でモミ属・トウヒ属・マツ属単維管束亜属・マツ属複維管束亜属・マツ属（不明）・スギ属・クルミ属・カバノキ属・ブナ属・イチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科・クマシデ属・ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属・クリ属・ニレ属一ケヤキ属・エノキ属一ムクノキ属・ツタ属・ミズキ属・カキ属・スイカズラ属の20分類群、草本でイネ科・カヤツリグサ科・サナエタデ節一ウナギツカミ節・ソバ属・アカザ科・ナデシコ科・アブラナ科・キカシグサ属・アリノトウグサ属・オオバ

コ属・ヨモギ属・タンボボ亜科の12分類群、合計32分類群である。

古代の時期の花粉分析はD4地区で基本層序で行われているが、古代の包含層であるIIc・IIdから花粉遺体がほとんど含まれていないため、植生の推定については有効性を欠く。中世の花粉分析としては同じくD4地区の基本層序のIIb層から良好な結果が得られている。樹木ではマツ属・マツ属複雜管束亞属が高率で出現している。他に、モミ属・トウヒ属・スギ属・ハンノキ属・コナラ属コナラ亞属・クリ属などが検出されている。草本ではイネ科が最も卓越し、他にカヤツリグサ科・ソバ属・ナデシコ科・アブラナ科・ヨモギ属などが検出されている。これらの結果から推定される植生は、堆積地周辺には基本的に森林が広がっていたのではなく、草本が卓越しているような景観が推定される。木本ではマツ属・マツ属複雜管束亞属が集落内か周辺に生育していたと考えられる。草本ではイネが繁茂し、ナデシコ科やヨモギ属といったやや乾燥地に生育する分類群が分布していたと考えられる。また、ソバ属やアブラナ科の花粉もみられることから周辺では畑作を行っていたと推定される。中世末から近世の時期のデータはC地区の桶が掘れられている土坑(SK5124)で、桶内堆積物から得られている。このSK5124は便所や肥溜めのように使用されていたものではなく、比較的きれいな水を溜めていたと推定されている。木本ではマツ属複雜管束亞属・ハンノキ属が高率で出現している。他にスギ属・ブナ属・コナラ属コナラ亞属・ニレ属一ケヤキ属・ツタ属・カキノキ属などが検出されている。草本ではイネ科が最も卓越し、カヤツリグサ科・ソバ属・アザチ科・アブラナ科が続く。これらの花粉遺体群は堆積地の性格から、かなり短期間でなおかつ局所的な植生を示していると考えられる。この点を留意して、推定される堆積地の周囲の植生は、出現率の高いマツ属複雜管束亞属・ハンノキ属が堆積地にごく近い場所に生育していたと考えられる。また、花粉生産量の少ない虫媒花であるカキ属がみられることから、カキ属も果樹として周辺に植えられていたと推定される。草本ではイネ科が高率でみられるため、周囲に繁茂していたと考えられる。ただ、この中にイネ属型のものが含まれているかどうかは不明である。また、虫媒花のソバ属やアブラナ科がやや多く出現していることから、周辺では広く畑作を行っていた可能性が考えられる。

なお、D4地区の基本層序では花粉分析とともに植物珪酸体分析も実施されており、古代のIIIc層や中世のIIb層から畑作によるイネ属の植物珪酸体が検出されていることから、畑作が行われていたと推定される。

以上のことまとめると、古代では遺跡周辺や後背地にクマシデ属・サワグルミ・ブナ・クマヤナギ属・カバノキ属・ハンノキ属・ブナ・コブシなどの落葉広葉樹を主体とする自然度の高い森林が分布していたことが考えられ、集落内はカヌムグラ・アザチ科・ヒュク科・ナデシコ科・キク科などが繁茂する日当たりの良い開けた景観が推定される。遺跡の周囲では畑作が行われていたと考えられる。中世になると遺跡の後背地では大規模な変化はないものの、遺跡周辺では中世の早い段階で植生に大きな変化があり、中世末から近世に至っては、古代までみられたブナを含む落葉広葉樹林は消失したと考えられる。かわって、遺跡周辺では畑作の他にモモやカキノキといった果樹やソバ属やアブラナ科など畑作の盛行が考えられる。この時期になると集落自体が分散化し、居宅単位で農地に散在するという散村的な景観となる。このため検出された木本の種実遺体などの多くは、局地的な居宅周囲は植樹された屋敷林としてスギが植えられていた可能性が高いと考えられる。栽培植物の利用については、古代では主食となるものとしてイネがあり、他にオオムギ・コムギなども広く利用されていた。中世になるとイネ・オオムギ・コムギの他にソバが加わり、アサ・マメ類・エゴマ・シソ属・メロン類などの畑作物が集落内で普遍的に利用されていたと考えられる。

樹種についてはカヤ・二葉松・モミ・ツガ属・スギ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ亞科・ヒノキ科・ダケカンバ・ハンノキ・クリ・コナラ属コナラ亜属・コナラ属クヌギ節・コナラ属コナラ節・ブナ・ケヤキ・エノキ・イスノキ・サイフリボク・ツゲ・ヌルデ?・イタヤカエデ・トチノキ・ムクロジ・ヒサカキ・コバノトネリコ・オオウラジノキ・フジキの29分類群が検出されている。漆器にはブナ・ケヤキ・トチノキが多く、他にハンノキ・ダケカンバが用いられている。曲物にはスギが、底板にはヒノキ・スギが用いられている。井戸の側板や板材・桶板はスギ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ亞科・ヒノキ科が多用され、他にクリ・コナラ亜属がある。櫛にはサイフリボク・イスノキ・ツゲが用いられ、下駄にはモミ・スギが、柄杓にはハンノキ・トチノキ・ヒノキが、箸にはスギ・ヒノキ・ヒノキ亞科が、木札にはスギが、折敷にはスギが、木札にはスギ・ヒノキが、横樋にはイタヤカエデ・二葉松が、鋤にはクヌギ節が、独楽にはカヤがそれぞれ用いられている。

④中名VI遺跡

大型植物遺体については、木本でモミ属・ヒノキ・ハンノキ属・ブナ・ヤマグワ・マタタビ属・モモ・サクラ属・サンショウ属・アカメガシワ・ブドウ属・ミズキ・クマノミズキの13分類群、草本でミクリ属・ヒルムシロ属・ヘラオモダカ・イネ・アワーヒエ・エノコログサ属・オオムギ・コムギ・ホタルイ属・カヤツリグサ科・カナムグラ・アサ・クワ科・ギシギシ属・タデ属・アカザ科-ヒユ科・キケマン属・エノキグサ・ツリフネソウ属・ノブドウ・ブドウ科・セリ科・エゴマ・シソ属・イヌコウジュ属・ナス科・オミナエシ属・スズメウリ・メロン類の29分類群、合計42分類群が検出されている。

種実遺体の木本が多く検出されたA地区SD02は古代から中世にかけて流れていた自然流路であるが、中名V遺跡D2地区のSD07と同一遺構であるため種実遺体から想定される植生も類似し、遺跡周辺や後背地にはブナを含む落葉広葉樹を主体とする森林の存在が推定される。集落内では開けた景観が想定され、草木を中心生育していたと考えられる。中世になるとB地区の溝であるSD21からは、木本のサクラ属・サンショウ属・アカメガシワ・ミズキ・クマノミズキなどが検出され、サンショウ属・アカメガシワなどは伐採地などに生育する二次林的要素の高い分類群である。草本ではミクリ属・ヒルムシロ属・ヘラオモダカ・ホタルイ属などの水湿地性植物に加え、カナムグラ・アカザ科-ヒユ科・エノキグサ・イヌコウジュ属・ナス科の陸生植物が検出されている。また、林縁などに生育するノブドウ・スズメウリもみられる。SD21周辺は草本が卓越していた植生が推定され、カナムグラ・アカザ科-ヒユ科・エノキグサ・イヌコウジュ属・ナス科が繁茂していたと考えられる。木本は分布していても孤立木程度で、サンショウ属やアカメガシワなどが生育していたと推定される。また、溝内にはミクリ属・ヒルムシロ属・ヘラオモダカ・ホタルイ属といった水湿地性植物が生育していたと考えられる。栽培植物については中世遺構から出土したものであり、A地区的井戸からはモモ・イネ・アワーヒエ・オオムギ・アサ・メロン類の6分類群が、B地区SD21ではイネ・オオムギ・コムギ・エゴマ・メロン類の5分類群が、C地区のSE03からはモモ・イネが検出されている。オオムギ・コムギは主食となることから、イネを中心とした食生活のみならず、ムギ類も積極的に利用されていたと考えられる。また、他の畑作物についても集落内で広く食用とされていたと考えられる。

樹種についてはツガ属・スギ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ科・ハンノキ属ハンノキ節・クリ・コナラ属クヌギ節・コナラ属コナラ節・ブナ属・ケヤキ・カツラ・サクラ属・ウルシ属・カエデ属・トチノキ・ミズキ属・エゴノキ属・ネズコ・トネリコ属・クロモジ属の21分類群が検出されている。箸には

スギ・サワラ・ヒノキ・サクラ属が、漆器にはブナ属・トチノキ・ケヤキ・カツラが、曲物にはスギ・サワラが、井戸枠にはスギ・ヒノキ・ネズコが、折敷にはスギが、下駄にはスギ・ヒノキ・ケヤキ・ブナ属が、升にはスギが、呪符にはスギが、木栓にはサクラが、柱根にはスギ・ヒノキ・サワラ・ツガ属・トネリコ属・ハンノキ属・ハンノキ節・ウルシ属・クリ・ミズキ属、礎板にはスギがそれぞれ用いられている。

⑤道場 I 遺跡^{24・5)}

大型植物遺体については、木本でマツ属複雑管束亞属・クリ・ムクノキ・ヤマグワ・クワ属・カジノキ属・マタタビ・マタタビ属・ウメ・スモモ・モモ・サクラ属・キイチゴ属・サンショウ・トチノキ・ブドウ属・タラノキ・ウコギ属・ミズキ・ムラサキシキブ属・ニワトコ・タニウツギ属の22分類群、草本でミクリ属・イバラモ属・ヘラオモダカ・オモダカ属・オモダカ科・スブタ・イネ・エノコログサ属・イネ科A・イネ科B・カヤツリグサ属A・カヤツリグサ属B・カヤツリグサ属C・ヒゴクサ節・スゲ属・ホタルイ属・カヤツリグサ科・イボクサ・ツユクサ・コナギ・ミズアオイ属・カナムグラ・アサ・クワクサ・カラムシ属・ミゾソバ・イシミカワ近似種・ヤナギタデ近似種・ハナタデ・イヌタデ・ツルタデ節・タデ属・タデ属A・タデ属B・タデ属C・ソバ・アカザ属・ヒユ属・アカザ科・ヒユ科・ザクロソウ属・スペリヒユ近似種・ナデシコ科・ナデシコ科A・ナデシコ科B・キジムシロ属・ヘビイチゴ属・オランダイチゴ属・マメ類・カタバミ属・エノキグサ・ノブドウ・ブドウ科・アリノトウグサ・チドメグサ属・セリ科・シソ属・イヌコウジュ属・キランソウ属・トウバナ属・ナス科・メロン類・キカラスウリ・メナモミ・メナモミ属・キク科の62分類群、合計84分類群が検出されている。具体的にみると、自然流路のSR01からムクノキ・サクラ属・トチノキ・ミズキ・マタタビ属・ブドウ属・タラノキ・ニワトコなどの落葉広葉樹が検出されており、草本ではやや乾燥地に生育するエノコログサ属・イシミカワ近似種・クワクサ・カナムグラ・アカザ科・ヒユ科・ナデシコ科・ナス科・メナモミなどの陸性植物の他に、ミクリ属・イバラモ属・ヘラオモダカ・オモダカ属・スブタ・カヤツリグサ属・ホタルイ属・イボクサ・コナギなどの水湿地性植物が検出されている。また、井戸であるSE01からはマツ属複雑管束亞属の毬果が検出されている。これらの種実遺体から推定される道場 I 遺跡の植生は、SR01周辺にはムクノキ・サクラ属・トチノキ・ミズキ・タラノキ・ニワトコなどの落葉広葉樹が生育し、林縁にはマタタビ属・ブドウ属が繁茂していたと考えられる。集落内は樹木は少なく、草本が卓越していたと考えられ、木本はあっても孤立木程度と考えられる。SE01からはマツ属複雑管束亞属が検出されていることから、集落内に生育していたと考えられる。また、日当たりの良いやや乾燥した場所にはエノコログサ属・イシミカワ近似種・クワクサ・カナムグラ・アカザ科・ヒユ科・ナデシコ科・ナス科・メナモミなどの陸性植物が生育し、区画溝やSR01内にはミクリ属・イバラモ属・ヘラオモダカ・オモダカ属・スブタ・カヤツリグサ属・ホタルイ属・イボクサ・コナギなどの水湿地性植物が繁茂していたと考えられる。栽培植物については、ウメ・モモの果樹や、イネ・ソバといった主食となるもの、アサ・マメ類・シソ属・メロン類の畑作物が検出されており、これらの栽培植物を広く食用としていたと考えられる。

樹種についてはスギ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ亞科・クリ・ブナ・ケヤキ・ムクノキ・トチノキ・の9分類群が検出されている。曲物にはスギ・ヒノキが、漆器にはブナ・ケヤキ・トチノキ・ヒノキが、下駄にはスギ・ケヤキが、匙にはムクノキ・ケヤキが、箸にはスギ・ヒノキが、木トンボにはスギが、羽子板状・ヘラ・ヘラ状木製品にはスギが、呪符・斎串状木製品にはスギが、井戸枠・側板に

はスギ・ヒノキ・サワラがそれぞれ用いられている。

⑥持田Ⅰ遺跡⁸⁽⁶⁾

大型植物遺体については、木本でヤマグワ・キイチゴ属・モモ・タラノキの4分類群、草本でイネ・アワーヒエ・オオムギ・コムギ・ホタルイ属・タデ属・イヌコウジュ属・メロン類の8分類群の合計12分類群が検出されている。あまり良好な資料がないものの、井戸であるSE213からはタデ属が、SE180からは木本のヤマグワ・キイチゴ属・タラノキや草本のホタルイ属・タデ属・イヌコウジュ属が検出されている。木本のキイチゴ属・タラノキは二次林的要素の高い低木である。また、草本のホタルイ属は溝や水田などに生育する水湿地性植物で、イヌコウジュ属は畑や路傍などの乾燥したところに生育する陸性植物である。これらのことから、集落内は木本が少なく、草本が繁茂する日当たりの良い開けた景観が広がっていたと考えられる。また、集落内の溝などにはホタルイ属が生育していたと考えられる。栽培植物についてはSE575からモモが検出されている。

⑦清水島Ⅱ遺跡⁸⁽⁷⁾

大型植物遺体については、木本でオニグルミ・クリ・ウメ・スマモ・モモ・トチノキ・ブドウ属の7分類群、草本でイネ・オオムギ・アサ・エゴマ・メロン類の5分類群、合計12分類群が検出されている。栽培植物以外の分類群はオニグルミ・クリ・スマモ・トチノキ・ブドウ属であるが、これらの種実類は食用となるため、堆積地周辺に生育していたものか、持ち込まれたものは判断できない。栽培植物にはウメ・モモ、草本でイネ・オオムギ・アサ・エゴマ・メロン類であり、草本についてはすべて栽培植物である。ウメ・モモは果樹として優良な果実が得られる。また、主食となるものはイネの他にオオムギがあり、オオムギも積極的に食されていたと考えられる。また、畑作物であるアサ・エゴマ・メロン類も利用されていたと考えられる。

3. 古環境復元

ここでは、各遺跡ごとに推定された植生や栽培植物利用について総括し、古環境復元を試みる。また、図1～3には遺跡群周辺の景観がどのように推移したかを模式的に示した。

古代の植生については種実遺体よりもさらに広域の植生推定が有効な花粉分析が各遺跡ともにほとんどなされていない。また、分析されていても花粉遺体が含まれていないか、分解されていて遺存していないなど分析結果が必ずしも良好でない。このため、花粉分析からの古植生復元は有効性に欠く。このような状況から、大型植物遺体（種実類や葉）などの分析結果を中心に中名遺跡群の植生を考えることにする。なお、検出された種実遺体群は自然流路から検出されたもの多いため、遺跡群周辺のみならず、やや離れた遠方から供給された可能性を含んでいる。まず、中名遺跡群が展開している周辺や後背地にはクマシデ属・サワグルミ・クマヤナギ属・カバノキ属・ハンノキ属・ブナ・コブシなどの落葉広葉樹を中心とした森林の存在が推定される。特にブナの果実や葉が検出されたことは特記され、遺跡群周辺や後背地に人間活動の干渉があまり及ばない自然度の高い森林が残存していたことが考えられる。その一方で、集落域の周囲では、古代のIIIc層から稻作に起因するとみられるイネ属の植物珪酸体が一定量検出されていることから、稻作が行われていたと推定される。また、水田と森林との境界付近や自然流路沿いなどの林縁にはアオツヅラフジ・ゴキヅルなどのつる植物が繁茂していたと推定される。集落内の植生は、基本的に木本より草本が卓越し、木本については孤立

木的に散在していたと考えられる。カナムグラ・アカザ科ヒュ科・ナデシコ科・エノキグサ・スマレ属・キク科などがやや乾燥した日当たりの良い場所に普通に生育し、自然流路内や集落内に巡れされた溝などにはミクリ属・ヘラオモダカ・ホタルイ属・イボクサなどの水湿性植物が繁茂していたと考えられる。中世前半には依然、遺跡群の周辺や後背地にウラジロガシなどの常緑広葉樹を交えたクマシデ属・サワグルミ・ブナ・クマヤナギ属・カバノキ属・ハンノキ属・ブナ・コブシ・クマヤナギ属などの落葉広葉樹を主体とする自然度の高い森林が残存していたことが推定される。遺跡群周囲では稲作に加え、ソバ属などの畑作も行っていたと推定される。集落内の植生については古代と類似しており、開けた景観が想定される。草本が卓越し、木本については孤立木程度が分布していたとみられる。集落内にはマツ属複数管束並属（二葉松）などが散在し、カナムグラ・アカザ科・エノキグサ・オナモミ属・メナモミ属などの草本が路傍や日当たりの良い乾燥した場所に分布していたと考えられる。自然流路や溝内などにはミクリ属・ヘラオモダカ・ホタルイ属などが生育していたと考えられる。中世の前期から後期にかけての植生については判然としないが、中世末から近世初頭の段階では、中名遺跡群の後背地に中世前半まで分布していたブナを含む落葉広葉樹は完全に姿を消し、集落周辺では稲作の他に、ソバ属やアブラナ科などの畑作などが広く盛行されていたと考えられる。また、居住周囲に植樹された屋敷林にはスギ・マツ属複数管束並属が植えられていた可能性が高く、更にカキノキ属などの果樹も植えられていたと考えられる。

栽培植物については古代にはイネ・オオムギ・アサ・ウリ類・ヒヨウタン類の他に、果樹としてウメ・モモが利用されていたと考えられる。また、中世になると古代に検出された分類群に加え、カキノキ属・コムギ・アワヒエ・キビ・ソバ属・マメ類・ナス近似種・エゴマ・シソ属など種数が多くなる。これらは中名遺跡群で広く利用されていることを示している。特に、オオムギ・コムギ・アワヒエ・キビ・ソバ属などは主食となることから、イネを中心とした食生活のみならずこれらの栽培植物も併せて食生活の重要な比重を占めていたと考えられる。

木材利用については、出土した木製品のほとんどが中世以降のものである。すべての木製品について樹種同定を行っていないものの、比較的分析されている中名V・VI遺跡の傾向としてスギの利用が最も盛んであったことが推定される。また、建物の柱跡から出土する柱根をみると、クリが最も多く、次にスギやヒノキなどの針葉樹が続く。他に、ハンノキ属・ハンノキ節やヌルデといったウルシ属などの広葉樹がみられる。このように中世の柱材に広葉樹が多用される傾向は県内の他の遺跡でもみられ³³⁾、特に中世でも後期に多い。また、石川県の西川島遺跡群の一つである白山橋遺跡³⁴⁾でもクリが使用されている。

4.まとめ

富山県内の平野から丘陵地での潜在自然植生は、社叢林などからヤブツバキクラス域のウラジロガシ林やアカガシ林などの常緑広葉樹を主要構成種とする照葉樹林が大まかに想定されている。しかし、遺跡から出土する種実遺体からはブナやミズナラなどの冷温帶落葉広葉樹林の主要樹種がしばしば報告されている。冷温帶落葉広葉樹林の主要樹種が出土した遺跡は考古学的にみると数千年前という、森林に対してさほど人為的改変が及んでいない時期であり、社叢林や現存植生から推定されている植生と、遺跡から出土する植物遺体から推定される植生とでは矛盾が生じている。このことは、従来から吉井が指摘している点でもある³⁵⁾。実際、現存植生で二上山の山頂にはブナとアカガシが小範囲ながら同所で生育しているような場所があり、また、県内の標高200m前後の丘陵地にもブナが小規

横ながら分布している。中名遺跡群については、古代の遺跡群周辺や後背地の植生は照葉樹林的な要素は小さく、どちらかというとブナやサワグルミなどの落葉広葉樹を中心に、ウラジロガシなどの常緑広葉樹が部分的に分布する混交林が成立していたと考えられる。そして、ブナを含む自然度の高い森林は中世前期まで残存するものの、中世末～近世に至っては消滅したとみなされる。この時期には耕地化が進み、耕地の中に居宅が点在する散居的な景観が広がっていたと推定される。つまり、中世前期～後期にかけて急速に森林破壊が進んだ結果と考えられるが、これを裏付けられる分析データは乏しく、判然としない。しかし、中世の包含層や覆土として、有機質の黒褐色粘土質シルトを基調とする土層があるが、中世に入って森林破壊によって生成された土壤の可能性が高いことが示唆される。古代でもおよそ10世紀前後の耕作痕とする溝群には、黒褐色粘土質シルトを基調とする上層は見受けられない。少なくとも、古代の耕作痕の形成以降にこれらの黒褐色粘土質シルトが生成されたということができる。

栽培植物については、以前筆者が富山県内の遺跡から出土した栽培植物についてまとめたことがあり^{註10}、中世になると出現する種数が著しく多くなる傾向がみられた。これは、農業技術が飛躍的に向上し、効率的で集約的な農業体系が形成された結果と推定されたのだが、中名遺跡群についても同様な傾向がみられた。また、このような効率的で集約的な農業体系の形成と中世前期まで残存していた自然度の高い森林の消滅の間には大きな因果関係が指摘できよう。

以上、中名遺跡群の植生や栽培植物から古環境復元について述べてきた。結論についてはかなり推論を交えた部分が多く、特に古植生については種実遺体や葉の遺体を主体として論を展開するという点で躊躇せざるを得なかった。中名遺跡群の古環境復元を考古学的に得られた知見を含めて模式的に示したが、どの程度示し得たかは少々心持たない。特に、森林域については模式図より更に上流の後背地に分布していた可能性もある。最後に、今後も中名遺跡群はもとより他の遺跡についても資料を蓄積し、考古学の手法で得られた知見も含めて総合的に検討していくことが必要と考えられる。

註

- 註1) 財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所『中名I・V遺跡発掘調査報告』2003
註2) 財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所『清水島II遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡発掘調査報告』2002
註3) 財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所『中名I・V遺跡発掘調査報告』2003
註4) 財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所『道場I・II遺跡発掘調査報告』2004
註5) 中村亮二「井戸出土の種実遺体・遺場I・遺跡A1地区について」『富山考古学研究紀要第6号』2003
註6) 財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所『清水島II遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡発掘調査報告』2002
註7) 財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所『清水島II遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡発掘調査報告』2002
註8) 町田賢一「木の家・柱根の樹種鑑定から遺物を考えるー」『富山考古学研究紀要第6号』2003
註9) 松田隆嗣「西川島遺跡群より出土した木製遺物の樹種について」『西川島・能登における中世村落の発掘調査』石川県・穴水町教育委員会 1987
註10) 吉井亮一「富山県朝日町境A遺跡から出土した種実遺体の概要」『北陸自動車道遺跡調査報告朝日町編7 境A遺跡紹介編』富山県教育委員会 1992
註11) 中村亮二「富山県における植物利用－栽培植物の導入期と変革期－」『統文化財学論集』文化財学論集刊行会 2003

参考文献

- 大田弘・小路登一・永井真隆『富山県植物誌』廣文堂 1983
粉川昭平・吉井亮一「江上遺跡群出土の種実遺体」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品・総括編－』上市町教育委員会 1984
富山県被生調査研究会『富山県の植生』富山県 1977

表1 中名跡遺群出土種實遺体一覧(1)

裸子植物	
イチイ科Taxaceae	
カヤTorreya nucifera	
マツ科Pinaceae	
マツ属Pinus subgen. Diploxylon	
モミ属Abies	
スギ科Taxodiaceae	
スギCryptomeria japonica	
ヒノキ科Cupressaceae	
ヒノキChamaecyparis obtusa	
被子植物	
单子葉類	
ミクリ科Sparganiaceae	
ミクリ属Sparganium	
イバラモ科	
イバラモ属Najas	
ヒルムシロ科Potamogetonaceae	
ヒルムシロ属Potamogeton	
オモダカ科Alismataceae	
ヘラオモダカAlisma canaliculatum	
オモダカ属Sagittaria	
トチカガミ科Hydrocharitaceae	
スブタBlyxa echinisperma	
イネ科Gramineae	
オオムギHordeum vulgare	
コムギTriticum aestivum	
イネOryza sativa	
アワヒエSelaria italica-Echinochloa crus-galli	
エノコログサ属Setaria	
キビPanicum miliaceum	
カヤツリグサ科Cyperaceae	
ホタルイ属Scirpus	
スゲ属ヒゴクサCarex sect. Extensae	
スゲ属Carex	
カヤツリグサ科Cyperaceae	
ツユクサ科Commelinaceae	
イボクサMurdannia Keisak	
ツユクサCommelina communis	
ミズアオイPontederiaceae	
ミズアオイ属Monochoria	
被子植物	
双子葉類	
クルミ科Juglandaceae	
オニグルミJuglans ailanthifolia	
カバノキ科Betulaceae	
クマシテ属Carpinus	
ハンノキ属Alnus	
ブナ科Fagaceae	
クリCastanea crenata	
ウラジロガシ近似種Quercus salicina cf.	
コナラ近似種Quercus serrata cf.	
コナラ属コナラ属Quercus subgen. Lepidobalanus	
ブナFagus crenata	
ニレ科Ulmaceae	
ケヤキZelkova serrata	
ムクノキAphananthe spspera	
クワ科Moraceae	
カナムグラHumulus japonicus	
アサCannabis sativa	
ヤマグワMorus bombycis	
カジノキ属Broussonetia	
イラクサ科Urticaceae	
カラムシ属Boehmeria	
タデ科Polygonaceae	
タデ属Polygonum	
イシミカラ近似種Polygonum perfoliatum cf.	
サンエクテ近似種Polygonum lapathifolium cf.	
ヤナギタデ近似種Polygonum hydropiper cf.	
ハナタデイイヌタデPolygonum caespitosum-Polygonum longisetum	
タデ属フルタデ属Polygonum sect. Tinaria	
ソバFagopyrum esculentum	

表1 中名遺跡群出土種実遺体一覧（2）

アザガ科Chenopodiaceae
アザガ科-ヒユ科Chenopodiaceae-Amaranthaceae
スベリヒユ科Portulacaceae スベリヒユ近似種 <i>Portulaca oleracea</i> cf.
ナデシコ科Caryophyllaceae
ソプラフジ科Menispermaceae アオツラフジ <i>Cocculus trilobus</i>
モクレン科Magnoliaceae コブシ <i>Magnolia kobus</i>
ケシ科Papaveraceae キケマン属 <i>Corydalis</i>
バラ科Rosaceae キジムシロ属-ヘビチゴ属-オランダイチゴ属 <i>Potentilla-Duchesnea-Fragaria</i>
キイチゴ属 <i>Rubus</i>
サクラ属 <i>Prunus</i> ウメ <i>Prunus mume</i> モモ <i>Prunus persica</i> スモモ <i>Prunus salicina</i>
マメ科(マメ類)Leguminosac
カタバミ科Oxalidaceae カタバミ属 <i>Oxalis</i>
ミカン科Rutaceae サンショウ属 <i>Zanthoxylum piperitum</i>
トウダイグサ科Euphorbiaceo エノキグサ <i>Acalypha australis</i>
カエデ科Aceraceae イタヤカエデ属 <i>Acer mono</i>
トチノキ科Hippocastanaceo トチノキ <i>Aesculus turbinata</i>
ツリフネソウ科Balsaminaceae ツリフネソウ属 <i>Impatiens</i>
ブドウ科Vitaceae ノブドウ <i>Ampelopsis brevipedunculata</i>
ブドウ属 <i>Vitis</i>
マタタビ科Actinidiaceac マタタビ属 <i>Actinidia</i>
グミ科Elaeagnaceas グミ属 <i>Elaeagnus</i>
アリノトウグサ科Haloragaceae アリノトウグサ <i>Haloragis micrantha</i>
ウコギ科Araliaceae カラノキ <i>Aralia elata</i>
ウコギ科Araliaceae ウコギ属 <i>Acanthopanax</i>
セリ科Umbelliferae チドメグサ属 <i>Hydrocotyle</i>
セリ科Umbelliferae
ミズキ科Cornaceae ミズキ <i>Coruns controversa</i>
カキノキ科Ebenaceae カキノキ <i>Diospyros kaki</i>
エゴノキ科Styracaceae エゴノキ属 <i>Styrax</i>
クマツヅラ科Verbenaceae ムラサキシキブ属 <i>Callicarpa</i>
シソ科Labiatas キラシソウ属 <i>Ajuga</i>
シソ属 <i>Perilla</i> エゴマ <i>Perilla frutescens</i>
イヌコウジュ属 <i>Mosla</i>
トウバナ属 <i>Clinopodium</i>
ナス科Solanaceae ナス近似種 <i>Solanum melongena</i> cf.
スイカズラ科Caprifoliaceae ニワトコ <i>Sambucus racemosa</i>
ガマズミ属 <i>Viburnum</i>
タニウツギ属 <i>Weigela</i>
ウリ科Cucurbitaceae ヒヨウタン属 <i>Lagenaria leucantha</i>
キカラスウリ <i>Trichosanthes kirilowii</i>
メロン属 <i>Cucumis Melo</i>
キク科Compositae メナモ属 <i>Siegesbeckia</i>

表2 中名遺跡群出土花粉遺体一覧(1)

裸子植物
イチイ科—ヒノキ科—イヌガヤ科Taxaceae—Cupressaceae—Cephalotaxaceae
マツ科Pinaceae
マツ属Pinus
マツ属複管束亞属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
マツ属單維管束亞属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>
ツガ属 <i>Tsuga</i>
モミ属 <i>Abies</i>
トウヒ属 <i>Picea</i>
コウヤマキ科
コウヤマキ属 <i>Sciadopitys</i>
スギ科Taxodiaceae
スギ属 <i>Cryptomeria</i>
被子植物
单子葉類
ガマ科Typhaceae
ガマ属 <i>Typha</i>
オモダカ科Alismataceae
オモダカ属 <i>Sagittaria</i>
イネ科Gramineae
カヤツリグサ科Cyperaceae
ホシクサ科Eriocaulaceae
ミズアオイ科Pontederiaceae
ミズアオイ属 <i>Monochoria</i>
被子植物
双子葉類
クルミ科Juglandaceae
クルミ属 <i>Juglans</i>
カバノキ科Betulaceae
カバノキ属 <i>Betula</i>
クマシデ属—アサダ属 <i>Carpinus—Ostrya</i>
ハンノキ属 <i>Alnus</i>
ブナ科Fagaceae
クリ属 <i>Castanea</i>
コナラ属アカガシ亞属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
コナラ属コナラ亞属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>
ブナ属 <i>Fagus</i>
ニレ科Ulmaceae
ニレ属—ケヤキ属 <i>Ulmus—Zelkova</i>
エノキ属—ムクノキ属 <i>Celtis—Aphananthe</i>
タデ科Polygonaceae
サナエタデ節—ウナギツカミ節
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> — <i>Polygonum</i> sect. <i>Echinocaulon</i>
ソバ属 <i>Fagopyrum</i>
アカザ科Chenopodiaceae
ナデシコ科Caryophyllaceae
キンポウゲ科Ranunculaceae
カラマツソウ属 <i>Thalictrum</i>
アブラナ科Cruciferae

表2 中名遺跡群出土花粉遺体一覧（2）

マメ科Leguminosae
ソラマメ属 <i>Vicia</i>
モチノキ科Aquifoliaceae
モチノキ属 <i>Ilex</i>
カエデ科Aceraceae
カエデ属 <i>Acer</i>
トチノキ科Hippocastanaceae
トチノキ属 <i>Aesculus</i>
ツリフネソウ科Balsaminaceae
ツリフネソウ属 <i>Impatiens</i>
ブドウ科Vitaceae
ノブドウ属 <i>Ampelopsis</i>
ツタ属 <i>Parthenocissus</i>
ブドウ属 <i>Vitis</i>
グミ科Elaeagnaceae
グミ属 <i>Elaeagnus</i>
ミソハギ科Lythraceae
キカシグサ属 <i>Rotala</i>
アリノトウグサ科Haloragaceae
アリノトウグサ属 <i>Haloragis</i>
フサモ属 <i>Myriophyllum</i>
ウコギ科Araliaceae
セリ科Umbelliferae
ミズキ科Cornaceae
ミズキ属 <i>Coruns</i>
カキノキ科Ebenaceae
カキノキ属 <i>Diospyros</i>
モクセイ科Oleaceae
トネリコ属 <i>Fraxinus</i>
オオバコ科Plantaginaceae
オオバコ属 <i>Plantago</i>
スイカズラ科Caprifoliaceae
スイカズラ属 <i>Lonicera</i>
オミナエシ科Valerianaceae
オミナエシ属 <i>Patrinia</i>
キク科Compositae
ヨモギ属 <i>Artemisia</i>
キク亜科Asteroideae
タンポポ亜科Lactucoideae

表3 中名遺跡遺跡群樹種一覧

裸子植物	
イチイ科	Taxaceae
カヤ	<i>Torreya nucifera</i>
マツ科	Pinaceae
二葉松類	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
モミ	<i>Abies firma</i>
ツガ属	<i>Tsuga</i>
ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i>
スギ科	Taxodiaceae
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>
ヒノキ科	Cupressaceae
ヒノキ亜科	Subfam. Cupressoideae
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>
サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i>
ネズコ	<i>Thuja standishii</i>
被子植物	
双子葉類	
カバノキ科	Betulaceae
ダケカンペ	<i>Betula ermanii</i>
ハンノキ属	ハンノキ節 <i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothrysus</i>
ハンノキ	<i>Alnus japonica</i>
ブナ科	Fagaceae
クリ	<i>Castanea crenata</i>
コナラ属	コナラ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>
コナラ	クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
コナラ属	コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinns</i>
ブナ属	<i>Fagus</i>
ブナ	<i>Fagus crenata</i>
ニレ科	Ulmaceae
ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i>
ムクノキ	<i>Aphananthe sspera</i>
エノキ	<i>Celtis sinensis</i>
カツラ科	Cercidiphyllaceae
カツラ	<i>Cercidiphyllum japonicum</i>
クスノキ科	Lauraceae
クロモジ属	<i>Lindera</i>
マンサク科	Hamamelidaceae
イスノキ	<i>Distylium racemosum</i>
バラ科	Rosaceae
ナシ亜科	Subfam. Maloidae
サイフリボク	<i>Amelanchier asiatica</i>
オオウラジノキ	<i>Malus Tschonoskii</i>
サクラ属	<i>Prunus</i>
マメ科	Leguminosae
フジキ	<i>Cladrastis platycarpa</i>
ツゲ科	Buxaceae
ツゲ	<i>Buxus microphylla</i>
ウルシ科	Anacardiaceae
ウルシ	<i>Rhus</i>
ヌルデ?	<i>Rhus javanica</i> ?
カエデ科	Aceraceae
カエデ	<i>Acer</i>
イタヤカエデ	<i>Acer mono</i>
トチノキ科	Hippocastanaceae
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i>
ムクロジ科	Sapindaceae
ムクロジ	<i>Sapindus mukorossi</i>
ツバキ科	Theaceae
ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>
ミズキ科	Cornaceae
ミズキ	<i>Cornus</i>
エゴノキ科	Styracaceae
エゴノキ	<i>Styrax</i>
モクセイ科	Oleaceae
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>
コバノトネリコ	<i>Fraxinus lanuginosa</i>

表4 栽培植物一覧

	持田I遺跡	中名II遺跡	清水島II遺跡	道場I遺跡	中名I遺跡	中名V遺跡	中名VI遺跡	中世 末～近世	中世 末～近世	中世 末～近世	中世 末～近世
分類群								中世	中世	中世	古代
モモ	●	●			●	●	●				
スモモ		●		●	●	●	●				
カキ・カキノキ属					●		●				
イネモモ	●	●		●	●	●	●				
オオムギ・コムギ	●	●	●			●	●				
アワ・ヒエ・キビ	●				●	●	●				
ソバ・ソバ属				●	●	●	●				
マメ類				●	●	●	●				
アサ				●	●	●	●				
ナス近似種・ナス属					●						
エゴマ		●				●	●				
シソ属				●		●	●				
メロン類・ウリ類	●	●		●	●	●	●				
ヒョウタン類					●	●					

表5 柱根の樹種一覧

中名 I・V 遺跡 (17点)	
樹種	点数
スギ	1
クリ	12
エノキ	2
ウルシ科ヌルデ?	1
ムクロジ	1
未同定	3
合計	19

中名 V・VI 遺跡 (29点)	
樹種	点数
ツガ属	1
スギ	3
ヒノキ	2
サワラ	1
ハンノキ属ハンノキ節	2
クリ	9
ウルシ属	1
ミズキ属	1
トネリコ属	1
未同定	8
合計	20

道場 I 遺跡 (4点)	
樹種	点数
クリ	1
未同定	3
合計	4

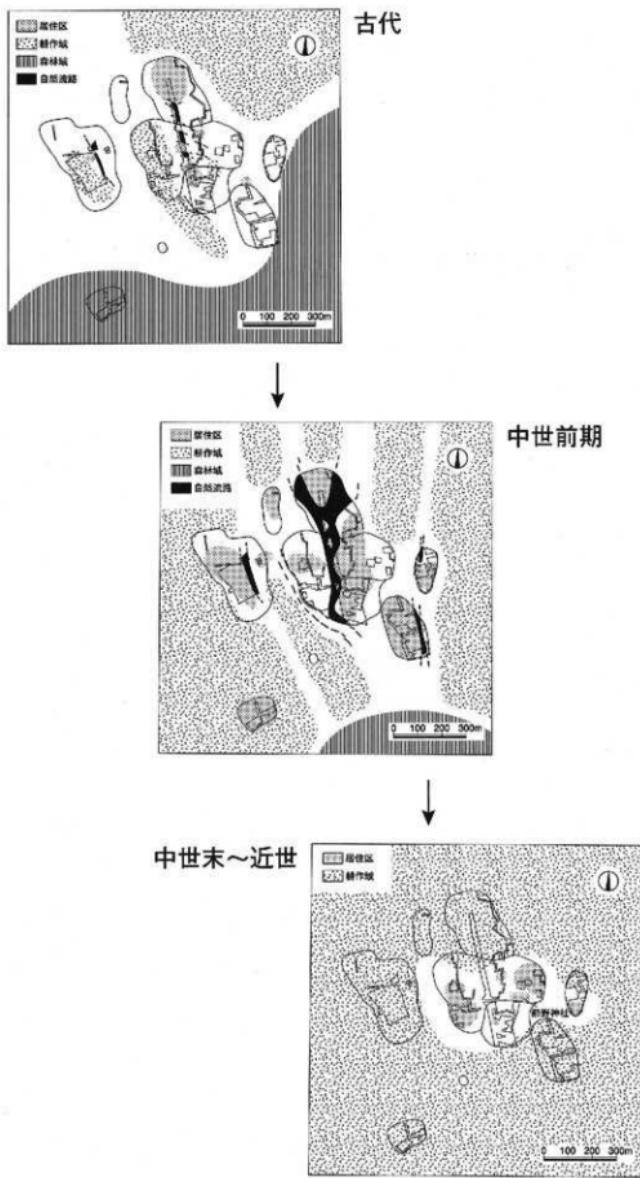


図1 中名遺跡群の古環境復元模式図

報告書抄録

ふりがな 書名	なかのみょうご・ろくいせき・すなごだいちいせきはくつちょうさほうごく
副書名	中名V・VI遺跡、砂子田1遺跡発掘調査報告
巻次	公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 IV
シリーズ名	富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第26集
編著者名	中村亮仁
編集機関	財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL076-442-4229
発行年月日	西暦2005年3月11日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中名V遺跡	婦負郡婦中町 中名	16362	121	36度 38分 35秒	137度 09分 57秒	19961014 ～ 19961217 ・ 19970512 ～ 19970704 ・ 19990521 ～ 19991217 ・ 20000629 ～ 20000929	37,159m ²	公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査
中名VI遺跡	婦負郡婦中町 中名	16362	130	36度 38分 42秒	137度 09分 54秒			
砂子田1遺跡	婦負郡婦中町 砂子田	16362	122	36度 39分 38秒	137度 09分 38秒	20000717 ～ 20001206	2,965m ²	公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中名V・VI遺跡	古墳・古代 集落跡	古墳・古代	堅穴住居1棟・掘立柱建物3棟・土坑・柱穴・溝・自然流路・集石遺構	土師器・須恵器・灰釉陶器・土鏡・金属製品・石製品	
		中世・近世	掘立柱建物74棟・礎石建物1棟・横列8条・井戸47基・土坑・柱穴・溝・土壙墓・治水関連遺構・敷治関連遺構・石列・集石遺構	中世土師器・珠洲・八尾・越前・瀬戸美濃・瓦質土器・中国製陶磁器・近世陶磁器・木製品・金属製品・石製品	13世紀中頃～15世紀の治水関連遺構
砂子田1遺跡	集落跡	古墳・古代	堅穴住居3棟・土坑・柱穴・溝・集石遺構	土師器・須恵器・土鍬・石製品	

2005(平成17年)年2月25日 印刷
2005(平成17年)年3月11日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第26集
中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡発掘調査報告

—公害防除特別土地改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告IV—

(第一回)

編集・発行 財團法人富山県文化振興財團
埋藏文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL. 076-442-4229

印刷 利魚津印刷株式会社
〒937-0068 魚津市本新町27番13号
TEL. 0765-22-0253